

王維『輞川集』の研究

紺野 達也

# 目次

序章	
第一節 本論文の研究対象	1 頁
第二節 これまでの研究とその課題	4 頁
第三節 本論文の構成	16 頁
第四節 使用する王維の別集の版本	21 頁
第一章 王維の詩と園林	24 頁
第一節 「終南別業」詩について ― “輞川” に連なるものとして―	24 頁
第二節 「待儲光羲不至」詩について ― 初盛唐期の園林における詩人の交遊を中心に―	42 頁
第二章 輞川莊と詩	61 頁
第一節 王維の輞川諸詠における田園の風景	61 頁
第二節 『輞川集』における王維の風景認識 ― “遊止” の典故を手がかりに―	74 頁
第三章 詩と繪畫	102 頁
第一節 唐詩における「詩人」と「畫家」 ― 王維詩を手がかりに―	102 頁
第四章 『輞川集』の評價	118 頁
第一節 唐代宗による「天下文宗」評について ― 王縉の『王維集』獻上との關係を中心に―	118 頁
第二節 『輞川集』と「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷 ― 文人による詩畫評價の視點から―	133 頁
結語	159 頁
主要参考文献	168 頁
初出一覽	176 頁

## 序章

### 第一節 本論文の研究対象

本論文は、盛唐の詩人、王維（字は摩詰。七〇一以前？―七六一）の「代表作」とされる『輞川集』における詩歌と園林との關係を考察し、さらに後世、特に唐宋期の文人がそこに繪畫を加えた關係を如何に見ていたかについて検討するものである。従来、この二つはそもそも別個の研究課題である、とされてきた。しかし、それでは『輞川集』という文學作品を議論する上で、不十分、ないしは不適當ではないか、と筆者は考える。つまり、この二つはいずれも『輞川集』という作品を研究する重要な方法であり、それを混同することなく、しかし、統一して論じる必要があるように思われる。

そもそも、中國古典詩に限らず、文學作品あるいは文學者一般の諸問題を考えるにあたり、その対象を中心にした場合、誤りを恐れずに言えば、二つの考え方に大別できるだろう。一つは世に埋もれてしまった作品や作家の發掘、發見とその位置づけであり、もう一つは充分に知られた作品および文學者について新たな研究方法や資料等を用いて捉え直すというものである。實際の個別の研究には、たとえば著名な詩人の作品でありながら、あまり有名ではない詩を考察するような兩者に跨るものなども確かに多數存在する。しかし、全體の傾向から言えば、前述の二點に集約されるといつてよいのではないか。

王維の『輞川集』を主な研究対象とする本論文は後者に屬する、とひとまずは言えよう。今日、王維は盛唐という短期間のみならず、唐詩もしくは中國古典詩全體を代表する詩人として認知されている。そもそも、その文學的名声は在世していた時期には既に高かった。そして、李白や杜甫、あるいは白居易や蘇軾などと比較した場合の相對的な地位の上下、その人物への道徳的、儒家的價值觀による毀譽褒貶はあつたものの、王維は決して忘卻されたり、徹底的に無視されるような詩人ではなかった。『輞川集』についても、現行の王維の選集にはほぼ必ず採録され、また多くの唐詩や中國古典詩の詞華集にも「鹿柴」や「竹里館」などが収められている。したがって、現在、『輞川集』が王維の詩の「代表作」であることは疑いようもなく、さらには唐詩、中國古典詩における「代表作」の一つとして認められることもある。このことは王維とともに『輞川集』の作品を詠んだ裴迪が、その官員もしくは詩人としての經歷、現存する作品數、あるいはその水準から言って、本來、二流ないしはそれ以下の詩人として扱われてもおかしくはないにもかかわらず、まさに『輞

川集』によってその名が広く知られていることから傍證されよう。

従來の研究、特に王維の文學全般や『輞川集』そのものの問題を考える研究において、今まで述べてきたような内容、つまり、王維が盛唐（あるいは唐詩、中國古典詩）を代表する詩人であり、『輞川集』がその王維の詩を代表する作品であるということは既に自明のことであつて、それを前提にして議論されることが歴史的に多かつたように思われる。

しかし、そもそも何らかの文學作品を“代表作”と認めたときに、既に評價史・受容史の問題を議論しなければならぬ、少なくとも意識せざるを得ない。それは“代表作”とは同時代、もしくはその後の時代の評價や文學の流行などと切り離すことができない存在だからである。『輞川集』はこの點で複雑な問題を孕んでいる。本論文の第四章第二節および引用する先行研究が明らかにするように、少なくとも唐代、―それは王維の在世中も含めて―、『輞川集』は“代表作”として扱われるどころか、充分に認知されていたかどうかも實は疑わしい作品であつた。さらには、中唐後期以降、同じ輞川莊という園林を描いた繪畫の「輞川圖」が廣範圍で知られていたことは對照的に、詩歌である『輞川集』はむしろのこと、輞川という地と王維の詩作を結びつけることさえ、表だつて行われることはほとんどなくなつていた。そして、『輞川集』への本格的な評價は北宋の後期まで待たざるを得なかつたのである。本論文は、このような『輞川集』の評價史・受容史、特に唐宋期の文人が『輞川集』という詩歌と園林・繪畫との關係をどのように考へていたかを『輞川集』研究の一つの方法として検討している。

評價史・受容史への検討を本論文が『輞川集』を研究する方法の一つとしているのは、それが『輞川集』そのものへの考察にも大きな意味を持つと考えるからである。『輞川集』が王維の“代表作”となるまでに前述のような複雑な過程を経たことが明らかになつた以上、當然、『輞川集』を單純に王維の“代表作”と見なし、諸問題を論じることが困難だろう。たとえば、歴史書や王維の他の作品から彼が篤い佛教徒であつたことは確かであるとはいへ、その“代表作”である『輞川集』は彼の佛教信仰の結實であるという結論を導くには今までよりも遙かに慎重にならざるを得ない。

むしろ、『輞川集』の評價史・受容史にとって重要な問題、すなわち北宋後期の文人、さらにはそれ以降の讀者が『輞川集』から看取した詩歌と園林・繪畫との關係という問題こそ、『輞川集』という作品そのものを考えるにあつても、最も検討すべきことではなからうか。なぜならば、その關係が後世に見出されたことこそ、『輞川集』が王維の“代表作”にまで認められるようになった最大の要素の一つであると考えられるからである。したが

って、『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との関係はそもそもどのようなものであったか、という問題への考察を本論文のもう一つの研究方法とする。

冒頭に述べた「二つの方法」とはまさにこれらを指す。本論文はこの二つの方法によって『輞川集』における詩歌と園林・繪畫との関係を論じる。それは中國における「創作―受容―再創作」という文學史、文化史全體に關わる非常に大きな問題の一端を明らかにすることでもある。

## 序章第一節注

(1) たとえば、南宋の朱熹は『楚辭後語』(『楚辭集注』(上海古籍出版社・安徽教育出版社排印本、二〇〇一年一二月第一版)卷四「山中人」で「遭祿山亂、陷賊中、不能死、事平復幸不誅。其人既不足言、詞雖清雅、亦萎蕪少氣骨」と、王維の人格と文學に辛辣な評價を興えている。

(2) 参照：潘慧瓊「名作的被忽視與受重視―對王維『輞川集』藝術特色認識過程的思考」(柳州師範高等專科學校『柳州師專學報』第十七卷第二期、二〇〇二年六月) 一一一―一五頁。

## 第二節 これまでの研究とその課題

### 一 『輞川集』に關する基礎的問題

前節で述べたように、本論文では王維の『輞川集』における詩歌と園林・繪畫との關係を考察する。それにあたり、『輞川集』に關する基礎的な問題について確認したい。

『輞川集』は言うまでもなく、唐の都、長安（現在の陝西省西安市）の東南約五十キロメートル、藍田縣輞川にあった王維の別莊である輞川莊において、王維とその友とされる裴迪によつて創られた五言絶句四十首からなる連作組詩である。詩の本文に詩題や序をあわせても九百字前後のこの詩集は、しかし、既に述べたように、後世、王維の詩、あるいは唐代の山水詩を“代表”する作品となつている。

しかし、著名な作品であるにもかかわらず、その成立時期の問題、あるいはその位置をめぐる問題といった基本的な懸案が未だ十分に解決をみない、少なくとも議論の餘地があるように思われる。

『輞川集』の成立については、詩や序、あるいは他の資料に時期を特定できる記述がない。したがつて、その時期を確定することは実際には困難であるため、いずれの研究も嚴密に言えば、推測の域を出ない。ただし、當然のことではあるが、王維が輞川莊を購得した時期よりも後に創作されたはずである。その輞川莊入手の時期については、通説の多くが開元の末から天寶の初めとして<sup>(1)</sup>いる。これよりも早く設定する説としては、小林太一郎氏の開元十四年（七二六年）とするもの<sup>(2)</sup>、道上克哉氏の「流浪期」説がある<sup>(3)</sup>。しかし、本論文第二章第一節では、『輞川集』以外の輞川莊において詠じられた多くの作品が隱逸・歸隱の詩風を持つことを根據に、それらの作品の成立時期を天寶元年（七四二年）の王維の左補闕就任以降と判斷している。

それでは、『輞川集』についてはどうか。従來、安史の亂以前に成立したとする研究が多いなか、近年、亂後、つまり王維の最晩年の時期にその成立時期を比定する言説が見られる。たとえば、森瀬壽三氏は「孟城坳」詩の解釋において、『輞川集』は至徳三載（七五八年）の作であるという見解を示している<sup>(4)</sup>。また王輝斌氏は上元二年（七六一年）もしくはそれ以降の作品とし、いくつかの根據を擧げるが、いずれも充分な説得力を持つとはいえない<sup>(5)</sup>。

本論文第四章第一節でも述べるように、安史の亂後の王維は自らの佛教信仰の性格を變えつつ、唐朝再興もしくは鎮護國家を祈願していた。そうであるならば、その頃の王維が、『輞川集』の序文にあるように「閒暇」にわざわざ五十キロメートルも離れた自らの園林に遊び、詩歌を賦したと考えるのは適當ではないだろう。

一方、安史の亂以前に『輞川集』が成立したとする研究にも、近年、裴迪の生年や作詩水準などからそれを推測するものが現れている。一つは内田誠一「『輞川集』に關する二三の問題（上）」―裴迪同詠はなぜ稚拙か―<sup>(6)</sup>であり、もう一つは陣内孝文「裴迪生年考」<sup>(7)</sup>である。両者はいずれも『輞川集』が創作された時點において裴迪の年齢を十五歳前後と推測し、その論證に用いる資料も重複しているが、前者は天寶四・五載より前、後者は天寶十一載から十五載の間と見解が分かれている。

『輞川集』に關するもう一つの基礎的事項、すなわち輞川莊の位置をめぐる問題を確認しておきたい。その大まかな位置は既に明確であり、實際にその遺址を訪れて得た成果をもとにした論考も發表されている。<sup>(8)</sup>しかし、『輞川集』とともに王維の詩として比較的知られる「終南別業」詩の「終南別業」と輞川莊が同一か否かについては、陳允吉氏による研究<sup>(9)</sup>以來、議論が續いている。

## 二 『輞川集』に見える詩歌と園林の關係

次に、『輞川集』に見える詩歌と園林の關係について、これまでの研究を確認したい。前述したように、『輞川集』における詩歌と園林の關係を論じることが本論文の中核の一つである。そのため、従來の研究動向を把握することで、本論文の意義もより明確になるだろう。

『輞川集』における詩歌と園林との關係を考察するということは、すなわち『輞川集』という詩歌が描く輞川莊とはどのような世界かという問題を考えることである。この『輞川集』の描く世界をめぐる議論は、印象批評的なものも含めて多くの論考が發表されており、その全てを論評することは困難である。しかし、『輞川集』の世界、あるいはその他の輞川集の作品を含めた輞川莊の世界について、おおむね次の三つの類型に分けることができるだろう。

第一は、王維の信仰した佛教の世界として理解するものである。これは『輞川集』に關する議論などにおいて最も多く見られる論考である。特に入谷仙介『王維研究』は發表か

らすでに相當の時間が経過しているが、今なお無視できない重要な指摘を含む。入谷氏は、『輞川集』は他の輞川諸詠とは異なり、「田園詩の中核ともいえる農業労働と農民とは全く出てこない」、つまり「田園性の缺如」した作品であると論じる。さらに、盧鴻一の「嵩山十志」を連作組詩の先行作品と認めて『輞川集』と比較した上で、王維は『輞川集』の世界を「輞川莊を現實から隔絶させた幻想的な世界」として構築し、「極樂淨土の理想郷」とした、と結論する<sup>10</sup>。また、陳允吉氏は『輞川集』それぞれの作品と佛教との關係を論じる研究を複数発表している。その一つ、「王維『輞川集』之「孟城坳」佛理發微」は冒頭の「孟城坳」詩を佛教の「無常」「無我」から論じ、さらにこの詩が基本的には、以下に續く十九首の型を定めたものとしている<sup>11</sup>。さらに邱瑞祥「試論『輞川集』中的佛家色彩」は、『輞川集』に「無常」「無我」「空寂」の思想が強く表れ、それは南宗禪からの影響を受けたものである、と論じている<sup>12</sup>。

第二は、『楚辭』の世界、もしくは仙界に代表される道教的、神仙的世界として考えるものである。小林太市郎氏は『輞川集』の世界を『楚辭』の世界<sup>13</sup>と考えていた。また皮述民「神遊輞川——輞川集」二十景點析述」は『輞川集』に佛家・儒家とともに道家の思想があることを挙げ、それが濃厚であることを指摘する<sup>14</sup>。皮述民氏のように道佛という二つの思想、あるいは儒家をも含めた三教が併存することを論じる研究は他にも相當數見られる。

第三には、陶淵明の「桃花源記」の世界として見るもの、つまり桃源郷に準える研究である。これは第二の仙界説にやや類似しており、近年、比較的よく見られる見解である。侯迺慧氏は、その一節を輞川莊に割り、『輞川集』の全作品を紹介し、その世界に「淨土」の氛圍があり、また道教や『楚辭』のような幻想もあることを認めた上で、王維自身は輞川を「桃花源の所在」、「隱遁悠遊的最佳天地」と考えていた、と述べる<sup>15</sup>。また、李亮偉氏も、王維が輞川を「現實」の桃花源とし、人と神の往來する社會形態を「創造」したと考える<sup>16</sup>。また、高倩藝氏は、王維は『輞川集』において「桃花源記」を代表とした六朝説話の構造を用いることで、佛教に接近するという説を述べている<sup>17</sup>。

このように、『輞川集』の世界、あるいは輞川における文學に表現された世界は論者によって様々に説明され、かつそれらは時に重なり合っている。さらには、これら三つの類型にはあてはまらない、あるいは全てを包含したような論考もかなり多い。たとえば、道上克哉「王維の輞川莊について」は、入谷説を承けつつも、『輞川集』の各「遊止」を詠じた作品に王維は「永遠なるものへの憧憬」を込めている、と考えている<sup>18</sup>。また、内田誠一「王



維の自閉的志向」は、『輞川集』と佛教との關係を論じることの難しさを率直に認めた上で、「『輞川集』」では、生身の人間が捨象された特殊な世界が展開される。現實の人間との交流が行われる場ではなく、王維と自然との、王維と神仙との、王維と古人との、(スピリチュアルな交感)が行われる場、それが輞川であったということではないだろうか」と推論している。譚朝炎氏は輞川の詩境を「避世的世界」(遁世の世界)、「澡雪精神的世界」(精神を淨化する世界)、「士大夫情結的物化世界」(士大夫の思いが具現化した世界)、「孤獨内心的消散世界」(孤獨な心が解放される世界)、「色相俱空的世界」(譚氏は、これを佛教のみに偏重するのではなく、「佛家的一切善法」と「道家的出世思想」の兩方に言及する)と分析している。小林太市郎氏も當初は「あらゆる現世の汚濁より離脱せる遙けき清淨境の憧憬がその根本をなしているところである。而してこの憧憬は、王維の心中に於いて自ら遠く遙かな幽深の情感へ推移している」とやや抽象的議論を展開している。

これらの先行研究を通観すると、一つのこと指摘できるだろう。それは従來の論考において、『輞川集』の世界とその他の作品における世界とを別々のものとして考える研究がある一方で、それらが一體となった單一の世界として考える研究の二種類に分かれるということがある。後者については、特に前述の第三の類型に分類した桃源郷説に顯著となっている。實際、輞川を記録した『藍田縣志』などの地方志や地理志を参照した時、入り口の向こうに小盆地の廣がる輞川は、現世に存在する「桃花源記」と思えなくもなく、この點において『輞川集』か他の作品かを問わず、輞川莊を桃源郷の世界として考えることも、一應は可能かもしれない。

確かに、輞川の各作品と『輞川集』の間に區別を設けないとする考えは、そもそも王維という一詩人が營なんだ輞川莊における作品という共通性があることを前提としており、そのこと自體に事實誤認はない。しかし、輞川の地で行われた詩歌・繪畫・園林の複合に對する文學史的、文化史的評價をも視野に入れた場合、『輞川集』とそれ以外の作品とではやはり相違があると認められる。たとえば、北宋の後期以降、繪畫「輞川圖」に對應する作品として想起されたのは詩歌である『輞川集』であって、少なくとも、その他の輞川における王維の詩が『輞川集』と同等の位置を占めたとは考えにくい。つまり、王維自身が一つの連作組詩として他の作品と區別する形で『輞川集』を詠じただけでなく、歴代、特に北宋後期以降の讀者も兩者を分けて讀んできたのである。したがって、現在、『輞川集』について考察するにあたって『輞川集』とその他の詩は別々に考察しなければならぬ。この點において、入谷氏が『輞川集』と他の作品との相違を峻別して議論したことは高く

評價すべきであろう。

それでは、『輞川集』の世界とは入谷氏の考えるように、やはり佛教的世界なのだろうか。ただし、従来からある他の見解も相當の根據を持っている。それを全面的に否定することは、結果として、王維が佛教を篤く信仰した事実とその詩、あるいはその「代表作」である『輞川集』が佛教的であることを混同することになり、客觀性を缺くことになる。しかし、逆に『輞川集』に道教や「桃花源記」などの色彩もあることを認めようとすると、道上氏や小林氏の初期の研究のように、具體性に缺ける論述になる可能性がある。あるいは譚朝炎氏の論のように、詳細に分析し得ても、結論から言えば、かえって意味するところが不鮮明になるおそれも否定できない。したがって、『輞川集』の世界、つまり『輞川集』に見える詩歌と園林の關係という問題を考えるにあたっては、従来とは異なる考え方が必要となるように思われる。

『輞川集』の考察にあたり、もう一つ問題とされてきたのが裴迪の唱和詩、特にその水準である。裴迪の作品が王維の詩と比較して、かなり稚拙であり、見劣りがする點は多くの研究者における共通認識となっている。<sup>24</sup> 本論文も、裴迪詩の水準の低さそのものについては、これらの先行研究と立場を一にする。しかし、そうであったとしても、王維が『輞川集』において二十首からなる自らの連作組詩とあえて並置した唯一の作品が裴迪の唱和詩であることは無視できない。つまり、園林における詩の應酬（うたごころ）や送別詩などにしばしば見られる規模のやや大きい集團による唱和、あるいはその他の偶發的な唱和とは異なり、裴迪の唱和を缺いて『輞川集』を議論することは困難である。したがって、本論文においては、裴迪の詩をも含めて王維の『輞川集』という一つの作品と考えたい。それは、その稚拙さゆえに王維の詩からは獨立して存在することが難しい裴迪の詩の實態にも即していよう。

### 三 『輞川集』を中心にした詩歌と繪畫・園林との關係への評價と受容

王維における詩歌と繪畫の關係を考えると、蘇軾の述べた「詩中有畫」「畫中有詩」の問題は、従來の研究においては避けて通れない問題であった。しかし、『輞川集』という作品を具體的に見るとき、その詩に繪畫性があるかどうかを果たして判断できるのだろうか。

詩歌としての『輞川集』と繪畫との關係で注目されるのは、やはり「輞川圖」であろう。<sup>25</sup> 「輞川圖」、特に宋代までの流傳に關しては、小林太市郎『王維の生涯と藝術』に多くの資

料が引用される。その第三篇『輞川集』と輞川圖』の「五 宋以前の輞川圖」では、北宋の秦觀「書輞川圖後」<sup>(28)</sup>を引用し、彼の見た輞川圖が「〔輞川集〕に」於いて第二なる華子岡が先ず第一にあり、ついで（輞川）集に最初に詠まれたる孟城坳があつて、而してその次に王維の二十詠のうちに見えない輞口莊の來たれることは全く現行輞川圖のそれと一致する」という指摘をしている。また、古原宏伸「輞川圖卷」も「唐宋二つの時代の間、資料の大きな斷絶」を問題にし、「輞川圖」の「現行本の原型は、王維の創建當時の輞川山莊とは絶縁された時期の産物であること、唐代資料の長い斷絶の後、再び世に現れた（輞川圖）は、唐代の原本とは相違する、新しい意匠の部分をもとに作られていたことが明らかとなった。……原本の姿は永遠に不明であるといわねばならない」と結論する。この二つの論考は、現行の「輞川圖」と『輞川集』の單純な比較が困難であることを示している。更に言えば、こと『輞川集』・「輞川圖」に關する限り、王維の作品自體の「詩中有畫」・「畫中有詩」を議論することもかなり難しいことではないか、と思われる。<sup>(30)</sup>

そもそも、蘇軾の「詩中有畫」・「畫中有詩」という題跋は、『輞川集』や「輞川圖」に直接に言及したものでないことは事實として確認しておく必要がある。ただし、より重要かつ根元的な問題は、王維の詩が繪畫的性質を持つのか、さらにはそれを論證することが可能か、ということである。これについて、蔣寅氏は、王維の詩において「詩中有畫」を表している例を再分析し、それが成立しないことを論じるなどの方法によって、王維の詩の特徴として「詩中有畫」を強調することを批判する。<sup>(31)</sup>したがって、王維における詩歌と繪畫の關係については、従來のような王維の詩歌そのものの繪畫性を論じるのではなく、新たな方法から考えなければならないだろう。

詩歌と繪畫の關係について、本論文は詩歌である『輞川集』と繪畫「輞川圖」との關係、さらには、それらが創作された輞川莊という園林との關係を後世の文人がどのように見ていたかを確認した。言い換えれば、それはこの三者の關係を王維の受容史・評價史において考えるということである。そして、この關係が見出されたからこそ、『輞川集』は王維の「代表作」になり得たといっても過言ではない以上、『輞川集』を考える上でこの問題は議論する必要があるのではないか。

王維の受容史・評價史は、これまで主に中國の研究者によって議論されてきた。まず、この情況を確認することで本論文の意義を確認したい。

王維の受容史・評價史と詩畫の問題に言及した早い時期の論考に葛曉音「王維・神韻說・南宗畫―兼論唐代以後中國詩畫藝術標準的演變」<sup>(32)</sup>がある。同論文は「王維が中國の藝術詩

情、地位が不斷に向上したことは唐宋から明清までの中國の詩畫藝術の基準に大きな變化が生じたことを示す<sup>(33)</sup>と論じる。葛氏は、蘇軾が「詩畫一理」、詩と文人畫はいずれも「寫意達心」を主とする觀點を提出したものの、宋代においては、この理想を體現し得た共通の代表を見出せなかつた、と述べる<sup>(34)</sup>。

二〇〇〇年代に入ると、唐宋期における王維の受容史・評價史に對する研究が増大する。以下、特に『輞川集』あるいは「輞川圖」に關する部分を中心に確認したい（一部の論文には、本論文の關係部分の初出より後れて發表されたものがある）。潘慧瓊「名作的被忽視與受重視―對王維『輞川集』藝術特色認識過程的思考<sup>(35)</sup>」は、『輞川集』が唐代にほとんど知られなかつたことの理由に、王維が禪宗の信徒、朝官、詩人の三つの身分を兼備していたために『輞川集』は誕生當初、有效な傳播の方法を缺いたこと、さらには『輞川集』そのものが唐代の五言絶句の主流に合わなかつたことを擧げる。潘氏はまた、錢起や顧況など中唐の多くの詩人が創作上、王維の『輞川集』の風格を学んでいることをも述べている。張浩遜「從唐代接受層面看王維詩歌的歷史地位」も錢起「藍田溪雜詠二十二首」を「當爲模倣之作」とする<sup>(36)</sup>。王祥「宋人論王維述評<sup>(37)</sup>」は、「北宋開国から八十數年」「慶曆から元祐年間」「北宋末から南宋前期」「南宋中期から宋末元初」という四期に分けて王維への評價を論じる。王氏は宋代においては、繪畫を除いて王維の人物と詩への評價は全體的に高くはなく、その理由としては、士大夫における名節の重視、積極的な政治参加、学問を根底とする文學觀を擧げる。また、蘇軾の詩畫を一體のものとする認識の意義は「宋代の繪畫の文人化と文人の生活の高雅化<sup>(38)</sup>」にあると述べ、さらに王維の山水詩、特に『輞川集』が宋代の人々に理解、認識されたことについて、多くは彼等の王維の山水畫に對する理解、認識に依據している可能性がある、少なくとも両者は相補關係にあると論じる。張進「宋金元王維接受研究<sup>(40)</sup>」は、宋から元の畫評を踏まえ、「輞川圖」が象徴的な記号となり、官界の雑事から逃れ、自由、閑適の生存環境と生存状態へ向かう理想の境地を含んでいた<sup>(41)</sup>という。袁曉薇「『輞川集』經典化和輞川模式的建立<sup>(42)</sup>」は、中唐の大暦年間以降に五言絶句の連作組詩が現れ、それは『輞川集』の内容と筆法を模倣していること、「輞川圖」が五代以來、ある意味で『輞川集』の代替となつて同様の効果を持っていたことを述べ、輞川における閑雅な生活方式は『輞川集』を士大夫が高尚、優雅な情趣を發揮する際の理想的な代表とし、彼等の日常の詩歌における經典的な内容ともなつたと論じる。王家琪氏は唐宋における王維の受容史について、「效果史」「闡釋史」「影響史」の三點から論じる<sup>(43)</sup>。『輞川集』に關しては、第五章「王維影響史研究」において、これまでの研究を概括した上で、宋代に

「輞川圖」が流行するのと同時に、『輞川集』のような山水や自然、田園を歌う小品への極めて大きな関心も生じた<sup>(44)</sup>と述べる。

これらの先行研究には二つの特徴を見出すことができる。一つは研究対象の問題である。潘慧瓊氏の論文を除き、いずれも王維の文學、さらには詩畫全體や人物評價まで廣く対象としており、そのなかで『輞川集』や「輞川圖」にも言及する形を取ることが多い。當然のことながら、大きな視点から論じることと全體的な位置づけが明瞭になることもあり、その方法に誤りがあるわけではない。特に葛氏や王祥氏の論は王維の文學や詩畫への評價について説得力を持つ議論を展開している。しかし、『輞川集』に関しては、焦點を絞って論じることと有効な方法となり得るのではないかと考える。前述したように、王維自身、『輞川集』とその他の輞川諸詠を分けて創作していた。また、受容史・評價史においても直接に、あるいは最初に繪畫の「輞川圖」と結びつくのは『輞川集』であり、その他の王維の作品ではない。したがって、詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」に對する評價に限定して議論することで、『輞川集』を軸にして詩歌と繪畫、さらには園林との關係を唐宋の文人がどのように見ていたか、それがどのように變化したかを明確に看取できるのではないかと。もう一つは連作組詩の問題である。特に中唐の錢起や顧況の作品をどう考えるか。この問題については、二宮美那子氏も關連の論考を發表している<sup>(45)</sup>。そして多くの論考は、これらの作品を『輞川集』の後繼とすることが多い。特に中國の研究では、王維と錢起の交遊などを理由にやや安易に認めるように思われる。しかし、實際に『輞川集』の後繼であることを明確に宣言するのは、北宋後期の蘇轍「題李公麟山莊圖二十首并敘」の敘まで確認できない。つまり、それ以前の作品が『輞川集』の後繼・模倣であると認めるには慎重な判断が必要に思われる。

## 序章第二節注

- (1) 陳貽焮『唐詩論叢』(湖南人民出版社、一九八〇年九月第一版)「王維生平事蹟初探」(初出は一九五八年)一〇六・一〇七頁は開元二十一、二十二年に長安に帰り、終南山に終南別業を得てより天寶七載までの間とする。入谷仙介『王維研究』(創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年)五八二頁は「開元二十八年」以降と推測する。陳鐵民『王維論考』(人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版)「王維年譜」(初出は一九八二年)二一頁は左補闕にあった天寶三載以前と推定する(なお、同書二〇頁は左補闕就任を天寶元年とする)。張清華『王維年譜』(學林出版社、一九八九

年九月第一版) 九三―九六頁は天寶二年から天寶三載前半とする。陶敏・傅璇琮『隋唐五代文學編年史(初盛唐卷)』(遼海出版社、一九九八年二月第一版) 七七五・七七六頁は天寶二年頃とする。

(2) 参照：小林太市郎『王維の生涯と藝術(小林太市郎著作集4)』(淡交社、一九七四年四月發行。初出は一九四四年) 三一頁。

(3) 参照：道上克哉「王維の輞川莊について」(中國藝文研究會『學林』第十二號、一九八九年三月) 一三頁。

(4) 参照：森瀨壽三・後藤裕也・重信あゆみ・高橋秀治「王維『輞川集』淺析」(關西大學中國文學會『關西大學中國文學會紀要』第二十四號、二〇〇三年三月) 三二頁。

(5) 参照：王輝斌『王維新考論』(黃山書社、二〇〇八年五月第一版)「第四章 王維作品綜考」「王維詩歌繫年考辨(下)」一九三・一九四頁。

(6) 中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十三集(二〇〇四年一月) 一五―三四頁。

(7) 九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十三號(二〇〇四年一月) 六一―七五頁。

(8) 王文學「輞川別業」遺跡尋踪」(教育部全國高等院校古籍整理研究工作委員會『中國典籍與文化』一九九二年第三期) 八八―九三頁および『輞川集』詩考(上)―王維「鹿柴」詩の解釋をめぐって―(全國漢文教育學會『新しい漢字漢文教育』第二十六號、一九九八年五月) など渡部英喜氏の一連の論考を参照。

(9) 参照：陳允吉『佛教與中國文學論稿』(上海古籍出版社、二〇一〇年一月第一版)「王維『終南別業』即『輞川別業』考」(初出は一九八三年) 二五三―二七一頁および李浩『唐代園林別業考錄』(上海古籍出版社、二〇〇五年一月第一版) 五九・六〇頁。

(10) 前掲注(1) 入谷著書六一三―六二四頁。

(11) 参照：前掲注(9) 陳著書「王維輞川「華子岡」詩與佛家「飛鳥喻」」(初出は一九九八年) 二八三―二九六頁および同「王維「鹿柴」詩與大乘中道觀」二九七―三一〇頁。

(12) 前掲注(9) 陳著書(初出は一九九六年) 二七二―二八二頁。

(13) 『王維研究』編輯部編『王維研究』第二輯(陝西人民教育出版社、一九九六年八月第一版) 五九―七〇頁。

(14) 小林太市郎・原田憲雄『王維(漢詩大系一〇)』(集英社、一九六四年八月第一版) 三〇七頁、原田執筆部分脚注所引の小林ノート。

- (15) 皮述民『王維探論』（聯經出版、一九九九年八月第一版）一九七頁。
- (16) 侯迺慧『詩情與幽境——唐代文人的園林生活——』（東大圖書、一九九一年六月第一版）第二章「唐代重要文人園林」第一節「與世隔絕的天然山水園——輞川形勝」九七頁。
- (17) 李亮偉『涵泳大雅——王維與中國文化』（中華書局、二〇〇三年一〇月第一版）「第二編 王維與中國園林篇」第四章「王維多處居所和輞川園林」三三四頁。
- (18) 參照：高倩藝「王維が描いた輞川——『輞川集』を中心に」（名古屋大學中國語學文學會『名古屋大學中國語學文學論集』第十一輯、一九九八年一月）裏一——一二頁。なお同「藍田輞川與桃花之仙源、八解之浴池」（梁瑜霞・師長泰主編『王維研究』第五輯（江蘇大學出版社、二〇一一年四月第一版）三〇三——三一〇頁、特に三〇七頁——三〇九頁は「神仙出入仙境」のほかに、佛教の「八解之浴池」に言及し、『輞川集』は「王維心靈中多重因素結合而產生出來的」と結論する。
- (19) 前掲注（3）道上論文三頁。
- (20) 松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』（研文出版、二〇〇六年三月第一版）三七四頁。
- (21) 參照：譚朝炎『紅塵佛道覓輞川 王維的主體性詮釋』（中國社會科學出版社、二〇〇四年五月第一版）「第六章王維出世入世不二的佛禪思想」二四三——二四六頁。
- (22) 參照：前掲注（2）小林著書一九五頁。
- (23) 前掲注（16）侯著書八四頁には、『藍田縣志』を引用している。また、林繼中『棲息在詩意中——王維小傳』（河北大學出版社、二〇〇〇年一〇月第一版）第七章「棲息在詩意中」四『輞川集』二七六頁も『藍田縣志』を引用し、「這景致實在太像陶淵明所寫的桃花源了！」と端的に述べる。
- (24) 前掲注（1）入谷著書、前掲（6）内田論文、前掲（7）陣内論文および師長泰「實做有盡 虛做無窮——『輞川集』王・裴五絕詩比較」（前掲注（13）『王維研究』第二輯所收）七一——八六頁などでは、その原因、あるいはそのような稚拙な詩を王維がなぜ採録した理由について考察している。
- (25) たとえば、韓愈の「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」（『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版）卷三百四十三）の序には「虢州刺史宅、連水池竹林、往往爲亭臺島渚、目其處爲三堂。劉兄自給事中出刺此州。……又作二十一詩以詠其事、流行京師、文士爭和之。余與劉善、故亦同作」とある。このような作品の場合、もし唱和の作が一つ缺けたとしても、もとの作品への影響はほとんどないといつてよい。

- (26) 前掲注(2) 小林著書。
- (27) 前掲注(2) 小林著書一九七二〇五頁。引用箇所は二〇〇頁。
- (28) 参照：徐培均『淮海集箋注』(上海古籍出版社、一九九四年一〇月第一版) 卷三十四「贊・跋」。
- (29) 古原宏伸『中國畫論の研究』(中央公論美術出版、二〇〇八年八月再版) 所收(初出は一九七五年)。引用箇所は三七頁・四五頁。
- (30) もちろん、「輞川圖」とは関係なく、『輞川集』の繪畫性を論じることとも論理的には可能である。しかし、その場合、北宋後期以降、『輞川集』と「輞川圖」を一體のものとして見てきた、という文化史上の問題をも等閑視することになるのではなからうか。そうであるならば、王維の詩の繪畫性に關する論議は一層證明困難な、印象批評になつてしまわざるを得ない。
- (31) 蔣寅「對王維『詩中有畫』的質疑」(中國社會科學院文學研究所『文學評論』二〇〇〇年四期) 九三一—一〇〇頁。
- (32) 葛曉音『漢唐文學的嬗變』(北京大學出版社、一九九〇年一月第一版) 二七五—二九六頁所收(初出は一九八二年)。なお、葛氏は明清期の「神韻說」における王維の評價を論じた上で、「王維詩的意境正是凭著一箇詩人兼畫家對自然美特殊敏感、通過辯証法地處理形的虛實、主次、繁簡等關係構成的、而決不是捨形求意的結果」(二九二頁)と述べる。
- (33) 前掲注(32) 葛著書二七五頁。
- (34) 前掲注(32) 葛著書二八〇頁。
- (35) 柳州師範高等專科學校『柳州師專學報』第十七卷第二期(二〇〇二年六月) 一一—一五頁。
- (36) 韶關學院『韶關學院學報(社會科學)』第二十六卷第十期(二〇〇五年一〇月) 二八頁。
- (37) 瀋陽師範大學『瀋陽師範大學學報(社會科學版)』二〇〇八年第二期(二〇〇八年三月) 七九—八五頁。
- (38) 前掲注(37) 王論文八二頁。
- (39) 前掲注(37) 王論文八五頁。
- (40) 西北大學『西北大學學報(哲學社會科學版)』第四十卷第二期(二〇一〇年三月) 四三—四八頁。



(41) 前掲注(40) 張論文四五頁。

(42) 深圳大學『深圳大學學報(人文社會科學版)』第二十八卷第一期(二〇一一年一月) 九三―九九頁。

(43) 王家琪『王維接受史―以唐宋爲主』(文津出版社、二〇一二年五月初版)。なお、「效果史」は「作家/作品在歷代讀者的閱讀、批評中產生的審美效應的變化史」、「闡釋史」は「歷代闡釋的現代思考和重新分析」、「影響史」は「研究作家受到藝術原型或母題的影響啓發、形成文學系列的歷代作品史」(二二頁)と述べる。しかし、この三者は實際には相互に重なり合い、王氏のように分けることは困難であると考えられる。

(44) 參照：前掲注(43) 王著書三四四・三四五頁。

(45) 二宮美那子「唐代園林連作組詩考―王維「輞川集」を源として」(京都大學)中國文學會『中國文學報』第八十一冊、二〇一一年一〇月)は、本論文の初出を挙げたうえで、錢起や中唐後期などの「唐代において園林の風景を短詩で描く連作が廣がりを見せていたことを示す」(二頁) 作品を論じる。

(46) 參照：北京大學古文獻研究所編『全宋詩 第一五冊』(北京大學出版社、一九九三年九月第一版) 卷八六四。

### 第三節 本論文の構成

本論文の構成を挙げるとともに、研究の内容と意義を述べることによって本論文の全体像を示したい。

序章は「第一節 本論文の研究対象」「第二節 これまでの研究とその課題」「第三節 本論文の構成」「第四節 使用する王維の別集の版本」からなり、本論文における研究に必要な基礎的事項を確認するとともに、本論文が何をどこまで明らかにし、いかなる獨創性を持つかについて説明した。第一節は本論文の研究対象が王維の「代表作」とされる『輞川集』であることを明示し、『輞川集』における詩歌と園林との関係への考察と唐宋期の文人がそこに繪畫を加えた関係を如何に見ていたかについての検討が本論文における二つの主要な研究方法であることを述べた。特に『輞川集』の場合、成立後すぐに王維の「代表作」となったわけではないことを挙げ、後者のような受容史・評價史研究が『輞川集』そのもの研究にも影響を與え得ることを説明した。第二節では、まず『輞川集』に關する基礎的問題「『輞川集』に見える詩歌と園林の関係」「『輞川集』を中心にした詩歌と繪畫・園林との関係への評價と受容」に分けて先行研究の所論とその課題を指摘した。第三節は第二節を承けて、本論文の構成を示して、各章・各節間の関係を明らかにし、各章や節で何を問題としたのかを述べた。第四節は、本論文では底本として清の趙殿成注『王右丞集箋注』を採用することとその理由を述べ、あわせて各種の校本について列挙した。

第一章「王維の詩と園林」は「第一節 「終南別業」詩について―「輞川」に連なるものとして―」と「第二節 「待儲光義不至」詩について―初盛唐期の園林における詩人の交遊を中心に―」の二節からなる。本章は『輞川集』における詩歌と園林の関係を考えるための前提として、王維の詩歌と輞川莊以外の園林の関係について検討した。王維は輞川莊以外にも(同時に複数所有していたかは不明なもの)別莊を持っていた可能性が高く、また、その規模や面積、施設などは未詳ではあるが、彼自身の居宅にも庭園を備えていたと考えられる。さらには皇族や寺院、他の人々の園林に赴き詩を作ることもあった。それらの園林で作られた詩歌の王維の文學における位置を確認することによって、『輞川集』における詩と園林の関係もより客觀的に明らかにできると考えられる。

第一節では、輞川莊における作品とともに著名である「終南別業」詩について、その成立時期や場所について論じるとともに、それが王維の文學においてどのように位置づけら

れるかを考察した。第二節では、「待儲光義不至」詩と儲光義からの答詩に着目し、「友人と約束したが、その相手が来ない」という詩と園林の關係の展開を考察し、この王儲の詩の應酬の意味を明らかにしようとした。

第二章「輞川莊と詩」は「第一節 王維の輞川諸詠における田園の風景」と「第二節 『輞川集』における王維の風景認識―「遊止」の典故を手がかりに―」からなる。本章は第一章を承けて輞川莊という園林と『輞川集』をはじめとするこの地で作られた詩歌、特にその風景を中心に考察し、『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との關係がどのようなものであったのかを明らかにした。

序章第二節で確認したように、そもそも輞川莊、あるいは『輞川集』の世界とはどのようなものであったのか、という問題は多くの研究者によって論議されてきたが、いまだ統一的見解を見ない。本論文では、この問題を従来とは異なる方法、具體的には王維が輞川莊においてどのような風景を認識し、それをどのような形で『輞川集』として言語化していったのかを考察することで明らかにした。

そもそも、詩に風景表現が見られる以上、その詩がたとえば「抒情詩」「叙景詩」「叙事詩」であったとしても、そこに描かれた風景は詩人によって認識され、表現されたものである。そして、風景表現の差違は、時代や地域、詩人、詩型などに見られる外面的な差違から、一人の詩人における内面的な差違まで、結局は風景認識の差に由来する。したがって、王維自身によって輞川の他の作品とは區別されて創作され、また、そのようにして讀まれてもきた『輞川集』の風景表現を考察することによって、王維が認識し、『輞川集』として言語化した風景、―言い換えれば、それは現實の輞川莊の風景そのものというよりも、詩歌『輞川集』の世界そのものである―を明確にすることができるのではないか。

この『輞川集』における風景という問題は、後世、詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」の流行とそれに對する評價への考察という本論文におけるもう一つの研究方法にも大きく関わってくる。原初の「輞川圖」の構圖は既に不明であり、王維自身が『輞川集』と「輞川圖」の關係をどのように見ていたかを理解することは困難である。しかし、後に詩畫を一體のものとする價值觀が『輞川集』を王維の詩の「代表作」としたならば、その當時に傳來した「輞川圖」の描寫と『輞川集』の風景表現は一定程度の連關があったに相違ない。それゆえに、まず『輞川集』の風景表現とその機能について考察する必要があるだろう。

第一節では『輞川集』以外の輞川諸詠について考察した。この點については、『輞川集』と他の輞川莊における作品との間を區別するべきという入谷氏の所論(序章第二節を参照)

を繼承しつつ、特にその田園風景に關する表現に着目し、その意味を指摘した。第二節では、『輞川集』の各「遊止」の名稱の典故を調査することで、王維が認識し、『輞川集』として言語化した風景とは何か、という本論文の中核的問題について直接に考察した。「遊止」の名稱の典故については、本論文が底本とする『王右丞集箋注』の注釋者である清の趙殿成や陳鐵民氏、あるいは石川忠久氏などによつてすでに詳しい研究があり、本論文ではそれらの成果をも参照しつつ、さらにそれらの典故と各詩の本文とがどのような關係を有するのか、またそれぞれの詩の「遊止」やその名稱の典故が相互にどのような有機性、關連性を持っているのかを調査した。また、これらの調査によつて明らかになった風景表現が第一節で明らかにした輞川莊におけるその他の作品の風景表現とどのような共通性を持ち、そして何が異なるかについて論じた。

第三章「詩と繪畫」は「第一節 唐詩における「詩人」と「畫家」——王維詩を手がかりに——」からなる。本章は王維における詩歌と繪畫との關係について新たな方法から論じる。これまでの多くの論考はいわゆる蘇軾の「詩中有畫」「畫中有詩」という有名な評から王維の詩の繪畫性を議論している。しかし、既に述べたように、王維の手になる原初の「輞川圖」は失われてその本來の構圖が不明であること、また王維の眞筆とされる繪畫そのものも少なく、たとえ存在したとしても直接に王維の詩と關わる作品を見出すことができない。また色彩表現が豊かであったとしても、それを王維詩における繪畫性と認めることも難しい。つまり、實際には王維の詩歌そのものの繪畫性を論じることは資料的にも方法論的にも限界があるのではないか。

それでは、王維における詩歌と繪畫の關係を論じることは全く不可能なのか。本論文では、その關係を考えるための新たな試みの一つとして、作品としての詩歌と繪畫ではなく、創作者としての詩人と畫家に着目し、特に詩歌における「畫家」の言及とその意味について検討した。なぜならば、このような言及が北宋後期、士大夫による詩人と畫家が「文人」へと融合するための基本的前提の一つと考えられるからである。本章では、詩歌における「畫家」の言及が盛唐期に始まること、そして王維が杜甫とともに重要な位置にあることを論じ、その要因について考察した。

第四章「輞川集」の評價」は「第一節 唐代宗による「天下文宗」評について——王縉の『王維集』獻上との關係を中心に——と「第二節 『輞川集』と「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷——文人による詩畫評價の視點から——」からなり、『輞川集』という詩歌と繪畫、園林の關係を唐宋の文人がどのように評價、受容したのかについて考察した。

先行研究も指摘する<sup>(3)</sup>ように、宋代、王維その人や詩歌に対する評価は必ずしも高いものではなかった。それにもかかわらず、それまでほとんど論じられなかった『輞川集』がこの時期に王維の「代表作」として認められるようになる。したがって、その「代表作」化の過程を明らかにすることなく、従来のように王維の「代表作」として『輞川集』を研究することは困難であるといわざるを得ない。そして、その過程に詩歌と繪畫を一體のものとする認識が大きく関わっていると考えられる。そうであるならば、やはり『輞川集』の研究上、それ自體に繪畫性があるか否かという問題よりも、後世の文人が『輞川集』から詩歌と繪畫との關係をどのように見出したかという課題が重要であろう。

このような問題意識を踏まえ、本論文はどのように『輞川集』を中心にした詩歌と繪畫、園林の關係への評價と受容を考えるのか。まず、確認しなければならないのは、唐代には『輞川集』に關する直接的な言及はなかった、ということである。したがって、まずは王維に關する重要な評價を見る必要がある。そこで、第一節では、王維の没後、最初の王維評價とも言うべき文宗皇帝による「天下の文宗」評と王縉による『王維集』の獻上について、兩者の上奏文と答敕の内容を詳細に検討し、その意味について論じた。

第二節では、詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷について直接に論じた。考察の時期を宋代にまでに限定した理由は、『輞川集』の「代表作」化が宋代にまでに完了すること、そしておそらくはそれを承けて宋末元初頃から『輞川集』を佛教の視点から論じる、あるいは評價しようとする動きが始まるからである。<sup>(4)</sup>序章第二節でも述べたように、『輞川集』が描く世界が佛教の世界であるとは斷言できず、またかりにそうであったとしても、それをたとえば「禪」で説明できるのか疑問である。したがって、そういういた考え方が生まれる前で、かつ『輞川集』が王維の代表作となる時期までを本論文の考察の範圍とすることは妥當であろう。具體的には、『輞川集』への言及が行われなかった唐代から繪畫「輞川圖」が詩に詠われるようになる北宋前中期を経て、北宋後期の蘇門による『輞川集』の「再發見」という過程を検討するとともに、『輞川集』のような連作組詩の創作についても調査することによって、『輞川集』への關心の高まりとその理由について考察した。

結語では、本論文でのこれまでの所論について改めて要點を整理し、本論文の論旨および今後の課題について論じた。

なお、末尾に主要参考文献と初出一覽を載せる。

### 序章第三節注

- (1) 古原宏伸『中國畫論の研究』（中央公論美術出版、二〇〇八年八月再版）所收「輞川圖卷」（初出は一九七五年）四五頁。
- (2) 趙殿成注については、『王右丞集箋注』（上海古籍出版社排印本、一九九八年八月第一版）に依據した（序章第四節を参照）。その他、陳鐵民『王維集校注』（中華書局、一九九七年八月第一版）四一三―四二九頁および石川忠久「王維輞川集校注」（岡村繁教授退官記念論集刊行會『中国詩人論 岡村繁教授退官記念論集』（汲古書院、一九八六年一〇月發行）を参照。
- (3) 葛曉音『漢唐文學的嬗變』（北京大學出版社、一九九〇年一月第一版）「王維・神韻説・南宗畫―兼論唐代以後中国詩畫藝術標準的演變」（初出は一九八二年）二八〇頁および王祥「宋人論王維述評」（瀋陽師範大學『瀋陽師範大學學報（社會科學版）』二〇〇八年第二期、二〇〇八年三月）八五頁を参照。
- (4) たとえば、劉辰翁評『須溪先生校本唐王右丞集』（四部叢刊初編、上海商務印書館景上海涵芬樓藏元刊本）卷四「辛夷塢」に劉辰翁は「其意不欲着一字、漸可語禪」と評する。

#### 第四節 使用する王維の別集の版本

本論文において使用する版本を確認しておきたい。本論文では、清の趙殿成注『王右丞集箋注』<sup>(1)</sup>を底本とし（以下、本節では趙注本とし、第一章以降は原則として巻数のみを掲げる）、後述の各種の別集を校本とする。

趙注本は王維の詩文への古典的注釋の集大成ともいえ、本論文が底本とした最大の理由もここにある。本論文では『輞川集』の典故から王維の風景認識を検討する。したがって、歴代の解釋や詩語の典故を把握するために趙注本を用いるのが最適であると考えられる。また、多くの校記を付していることも底本とした理由の一つに挙げられる。唐宋の頃の『輞川集』の受容が必ずしも王維の別集だけではなく、選集などによる可能性もあったと考えられる。その點において、校記の豊富な趙注本は適切な版本といえよう。さらに、將來において本論文を基礎に明清期の『輞川集』や王維の受容史を想定するにあたっても影響力の大きい趙注本で予め統一しておくことが望ましいと思われる。

ただし、王維の文學、特にその詩文そのものを研究する場合、趙注本より前の版本についても確認しておく必要がある。本論文で校本として用いた版本を次に示す。なお、その他の資料を用いる場合、もしくはここに挙げた諸本に特に言及する必要がある場合は該當箇所<sup>(2)</sup>に注記する。

- ① 宋蜀本『王摩詰文集』十卷<sup>(2)</sup>
- ② 北宋末刊南宋遞修本『王右丞文集』十卷<sup>(3)</sup>
- ③ 元・劉辰翁評『須溪先生校本唐王右丞集』六卷<sup>(4)</sup>
- ④ 明・顧可久注『王右丞詩集』六卷<sup>(5)</sup>
- ⑤ 明・顧起經注『類箋唐王右丞詩集』詩集十卷文集四卷外編一卷等<sup>(6)</sup>
- ⑥ 『全唐詩』<sup>(7)</sup>（王維は卷百二十五より百二十八、裴迪は卷百二十九）

前述の通り、本論文は趙注本を底本とし、宋版は校本として扱う。その理由については、他に、宋版における明らかな誤刻の存在を挙げることができる。しかし、いずれも原初のテキスト、もしくは唐宋期に伝えられていたテキストを反映している可能性は高い。そのため、本論文で用いた王維の詩文の兩宋本における収録箇所を示して検索の便に供したい

(題は趙注本により、檢索に不便なもののみ當該本における題名を補足した)。

宋蜀本『王摩詰文集』

卷一 贈徐中書望終南山歌

卷二 山中與裴秀才迪書

卷三 謝除太子中允表、責躬薦弟表、請施莊爲寺表、迴前任司職田粟施貧人粥狀

卷四 同盧拾遺韋給事東山別業二十韻給事首春休沐維已陪遊及乎是行亦預聞命會無車馬不果斯諾、酬諸公見過、酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作、喜祖三至留宿、故人張諲工詩善易卜兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之、答張五弟、答裴迪

卷五 贈李頎、贈劉藍田、輞川閒居贈裴秀才迪、戲贈張五弟諲、秋夜獨坐懷內弟崔興宗、贈裴十迪、終南別業

卷六 『輞川集』、歸嵩山作、歸輞川作、輞川別業、山居卽事、終南山、田園樂、田家、輞川閒居、積雨輞川莊作、春園卽事、淇上卽事田園(春中田園作二首其二)、鄭果州相過

卷八 大薦福寺大德道光禪師塔銘

卷九 送別(下馬)、送別(山中)、別弟縉後登青龍寺望藍田山、別輞川別業、崔九弟欲往南山馬上口號與別、與蘇盧二員外期遊方丈寺而蘇不至因有是作

卷十 偶然作、待儲光羲不至、題友人雲母障子、菩提寺禁裴迪來相看說逆賊等凝碧池上作音樂供奉人等舉聲便一時淚下私成口號誦示裴迪、崔興宗寫真

北宋末刊南宋遞修本『王右丞文集』

卷一 贈徐中書望終南山歌

卷二 同盧拾遺韋給事東山別業二十韻給事首春休沐維已陪遊及乎是行亦預聞命會無車馬不果斯諾、酬諸公見過、酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作、喜祖三至留宿、故人張諲工詩善易卜兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之、答張五弟、答裴迪

卷三 贈李頎、贈劉藍田、輞川閒居贈裴秀才迪、戲贈張五弟諲、秋夜獨坐懷內弟崔興宗、贈裴十迪、終南別業

卷四 『輞川集』、歸嵩山作、歸輞川作、輞川別業、山居卽事、終南山、田園樂、田家、輞川閒居、積雨輞川莊作、春園卽事、淇上卽事田園、鄭果州相過



- 卷五 送別（下馬）、送別（山中）、別弟縉後登青龍寺望藍田山、別輞川別業、崔九弟欲往南山馬上口號與別、與蘇盧二員外期遊方丈寺而蘇不至因有是作
- 卷六 偶然作、待儲光羲不至、題友人雲母障子、菩提寺禁裴迪來相看說逆賊等凝碧池上作音樂供奉人等舉聲便一時淚下私成口號誦示裴迪、崔興宗寫真
- 卷七 謝除太子中允表、責躬薦弟表、請施莊爲寺表、請迴前任司職田粟施貧人粥狀
- 卷八 山中與裴秀才迪書
- 卷十 大薦福寺大德道光禪師塔銘

#### 序章第四節注

- (1) 『王右丞集箋注』（上海古籍出版社排印本、一九九八年八月第一版）。
- (2) 『王摩詰文集』十卷（上海古籍出版社據北京圖書館藏宋蜀刻本影印本、一九九四年九月第一版）。
- (3) 本論文では、靜嘉堂藏宋本影印『王右丞文集〔複製〕』（靜嘉堂稀觀書之七、雄松堂書店販賣、一九七七年七月發行）に據る。なお、近年、『靜嘉堂文庫所藏王右丞文集』（汲古書院影印本、二〇〇五年九月發行）が改めて影印本として出版されている。なお、同書は長い間、南宋刊麻沙本とされていたが、内田誠一「靜嘉堂本『王右丞文集』刊刻年代考」（日本中國學會『日本中國學會集』第五十五冊、二〇〇三年一〇月）九二―一〇六頁は同書における原版は北宋の英宗年間以前に遡る、江西刊本である可能性が高いと論じ、前掲『靜嘉堂文庫所藏王右丞文集』の「解題」注（八）（高橋智執筆）三四九・三五〇頁も基本的には北宋末刊南宋遞修江西刊本であることを支持する。
- (4) 『須溪先生校本唐王右丞集』（四部叢刊初編 上海商務印書館景上海涵芬樓藏元刊本）。
- (5) 『王右丞詩集』（廣陵書社據廣島大學所藏本影印本、二〇一二年七月第一版）。
- (6) 『類箋唐王右丞詩集』（四庫全書存目叢書影印本集部第九冊、莊嚴文化事業、一九九七年六月第一版據中國科學院圖書館藏明嘉靖三十五年無錫顧氏奇字齋刻本）。
- (7) 『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版）。

## 第一章 王維の詩と園林

### 第一節 「終南別業」詩について

—「輞川」に連なるものとして—

#### 一 問題の所在

王維には、「終南別業」(卷三)と題する詩がある。

中歳頗好道	中歳 頗る道を好み
晚家南山陲	晩に家す 南山の陲
興來每獨往	興 來たれば 毎に獨り往き
勝事空自知	勝事 空しく自ら知る
行到水窮處	行きて到る 水の窮むる處
坐看雲起時	坐して看る 雲の起こる時
偶然值林叟	偶然 林叟に値ひ
談笑無還期	談笑して 還る期 無し

この詩は、現在、日中の王維の詩選にはほぼ必ず採録され、自らの隱逸の生活を表した王維の代表作とされる。また、この詩は宋代における畫論にしばしば引用されており、王維の文學への評價、特にその詩歌と繪畫を一體のものとしてみる、いわゆる「詩畫合一」の問題を考えるにあたって、『輞川集』とならんで重要な作品と言えよう。

ところで、この詩は、唐宋期に編纂された選集では異なる詩題で収録される。たとえば、天寶三載(七四四年)編とされる芮挺章『國秀集』卷中は「初至山中」(初めて山中に至る)、天寶十二載(七五三年)以前成立の殷璠『河嶽英靈集』卷上は「入山寄城中故人」(山に入り城中の故人に寄す)とする。<sup>(2)</sup> この二種の詞華集は、いずれも王維の存命中に編纂されたものである。兩者に共通して採録される王維の詩は他に「息夫人」「齊州送祖三」の二首のみで、王維が宮廷詩人として活動した天寶年間にこの「終南別業」詩が高く評價されていたことが窺える。これらの選集の編者は、王維と直接の交流はなかったようだが、彼らにも評價の対象とされるほどに、この「終南別業」詩は比較的知られていた。なかでも『河

嶽英靈集』収録の詩題「入山寄城中故人」という詩題は、城中、つまり長安城内の舊友に寄せたことを明示しており、この詩がその友人から周囲へとさらに広まっていった可能性を示唆している。

語句こそ平易なこの詩は、詩題の他にも、この詩の創作時期の王維の情況や王維の文學における終南山の位置づけなど、多くの検討すべき問題を抱えている。本節ではそれらを論じること、この「終南別業」詩が著名な『輞川集』を代表とする輞川莊の文學へ連なる作品であることを考察する。特に隱棲生活を詠じるといった共通性を持つ「終南別業」詩と輞川莊における文學との間の相違ないしは前者から後者への變相を検討する。それによつて、王維が隱逸を表現した詩作の多くを輞川莊で創作したことをはつきりと示す理由の一端を考えたい。

## 二 終南別業と長安

まず、この詩の創作時期を確認したい。下限は『國秀集』の樓穎の序にあるように天寶三載とするのが適當である<sup>(4)</sup>。上限は、陳鐵民「王維年譜」、張清華『王維年譜』に従うと、開元二十九年（七四一年）以降であるとされる<sup>(5)</sup>。開元二十九年當時、少なくとも四十歳以上であったこの時期、王維の隱棲とはどのようなものであったのだろうか<sup>(6)</sup>。それについて、陳鐵民「王維年譜」は次の二詩をあげて論じる。

答張五弟 張五弟に答ふ（卷六）

終南有茅屋 終南 茅屋有り

前對終南山 前に對す 終南山

終年無客常閉關 終年 客無く 常に關を閉ざし

終日無心長自閒 終日 心無く 長く自から閒たり

不妨飲酒復垂釣 妨げず 酒を飲み 復た釣を垂るるを

君但能來相往還 君 但だ 能く來たり 相ひ往還せよ

戲贈張五弟諠三首 其三 戲れに張五弟諠に贈る 三首 其三（卷二）

設置守龜兔 置を設けて 龜兔を守り

垂釣伺游鱗 釣を垂れて 游鱗を伺ふ

此是安口腹	此れ是れ 口腹を安んじ
非關慕隱淪	隱淪を慕ふに關するに非ず
吾生好清靜	吾 生まれて 清節を好み
蔬食去情塵	蔬食して 情塵を去る
今子方豪蕩	今 子は 方に豪蕩
思爲鼎食人	鼎食の人と爲るを思ふ
我家南山下	我家家す 南山の下
動息自遺身	動息 自から身を遺る
入鳥不相亂	鳥に入るも 相ひ亂れず
見獸皆相親	獸を見るも 皆な相ひ親しむ
雲霞成伴侶	雲霞 伴侶を成し
虛白侍衣巾	虛白 衣巾に侍す
何事須夫子	何事か 須ひん 夫子の
邀予谷口眞	予の谷口の眞たるを邀ふるを

陳鐵民氏はこの二首をもとに、王維が開元二十九年に「知南選」の職務を終了した後、終南山の麓に隱居した状態、あるいは翌天寶元年に左補闕に就任するまでの待機している状態、いわゆる「休官待命」の状態における作品の可能性を指摘する。<sup>(8)</sup>

陳氏の引用するこの二首の詩およびそれらの詩と同時期の作品と考えられる「終南別業」詩に、「終南 茅屋有り」「我家家す 南山の下」「晩に家す 南山の陲」とあり、当時、王維は恰も終南山の山中、あるいは麓に粗末な家を構え、常に住んでいたかのように解釋できる。しかし、現存する二種類の王維の別集の宋刊本では、「戲贈張五弟諱三首」の題下に、

時在常樂東閣走筆成。

(時に常樂の東閣に在り、筆を走らせて成る。)

という注が附されている。<sup>(9)</sup> 王維自身、もしくはごく近い人物のみが知りうる情報を記すこの注は原注である可能性が高い。<sup>(10)</sup> その常樂とは、長安城の東部、東市の東に位置する常樂坊を指すと考えられるが、このままでは終南山に住むことと矛盾する。この矛盾を解決するには、――王維の常樂坊滞在が一時的なものであることを示す根拠がないとすれば、――

王維は実際には、通常は長安の常樂坊の居宅に居住しており、終南山にあった別荘に時折、訪れていた、と考えるべきではないか。

ところで、北宋の宋敏求『長安志』巻九「道政坊」の項の「寶應寺」の割注は、<sup>(1)</sup>

『代宗實錄』與『會要』曰、本王縉宅。縉爲相溺於釋教。妻李氏實妾也。大曆四年、以疾請捨宅爲寺。……『酉陽雜俎』曰、韓幹、藍田人。少時、常爲酒家送酒。王右丞兄弟未遇、每貰酒漫遊。幹嘗徵債于王家、戲畫地爲人馬。右丞精思丹青、奇其意趣、乃歲與錢二萬令幹畫十餘年。今寺中釋梵天女、悉齊公妓小小等寫眞也。寺禰勒殿、卽齊公寢堂。

（『代宗實錄』と『會要』とに曰く、本と王縉の宅なり。縉、相と爲り釋教に溺る。妻の李氏は實は妾なり。大曆四年、疾を以て宅を捨て寺と爲すを請ふ。……『酉陽雜俎』に曰く、韓幹は、藍田の人なり。少き時、常に酒家の爲に酒を送る。王右丞の兄弟未だ遇はず、毎に酒を貰りて漫遊す。幹、嘗て債を王家に徴し、戯れに地に畫きて人馬を爲す。右丞は丹青に精思し、其の意趣を奇とし、乃ち歳どしに錢二萬を與へ幹をして畫かしむること十餘年なり。今、寺中の釋梵・天女、悉く齊公の妓の小小等の寫眞なり。寺の禰勒殿、卽ち齊公の寢堂なり。）

と記す。この記事の前半は、道政坊に所在した寶應寺が王維の弟である王縉（＝齊公）のかつての邸宅であり、宰相にまで昇進した王縉が大曆四年（七六九年）に喜捨したものであることを記す。後半では、その寶應寺の佛畫を描いた畫家の韓幹が若い頃、王維に畫才を認められたことを述べる。この韓幹は、杜甫も彼の描く馬の繪に贊を與え、詩において繪畫の高い技能を認めた著名な宮廷畫家として知られる。唐の朱景玄『唐朝名畫錄』は、韓幹が天寶期に翰林供奉に召されたことを記している。<sup>(2)</sup>したがって、それ以前、すなわち韓幹が王維の家の門を出入したのは、開元の末から天寶初年頃までのことと考えられ、それは「終南別業」詩の創作時期とも重なる。

王縉の嘗ての邸宅で、宮廷畫家の韓幹も佛畫を描いた寶應寺の位置するこの道政坊は、「戲贈張五弟諱三首」詩の自注にあった常樂坊の北に隣接している。この事實は、王維と王縉の住居が近隣にあった可能性があることを意味している。以下に引用する『太平廣記』巻二百五十五所引『盧氏雜說』<sup>(4)</sup>は小説とはいえ、あるいはそれを傍證するかもしれない。

唐宰相王維好與人作碑誌。有送潤筆者、誤扣右丞王維門。維曰、「大作家在那邊。」  
（唐の宰相の王維、人の與に碑誌を作るを好む。潤筆を送る者有り、誤りて右丞王維の門を扣く。維曰く、「大作家は那邊に在り」と。）

この記事は王維兄弟が近邊に居住していたことを示唆する。『酉陽雜俎』も韓幹が酒を送ったのは王維王縉兄弟としており、開元末年から天寶初年頃に王維が常樂坊に住んでいた可能性は高いと考えられる。

次に、王維の母である崔氏について考えたい。王維が晩年に輞川莊の喜捨を願ひ出た上表文「請施莊爲寺表」（莊を施し寺と爲すを請ふの表）（卷十七）には「師事大照禪師」とある。大照禪師とは、北宗禪の代表的僧侶の普寂を指す。『舊唐書』卷百九十一<sup>（15）</sup>は開元年間以降の彼の事蹟を次のように記す。

開元十三年、敕普寂於都城居止。時王公士庶、競來禮謁、普寂嚴重少言、來者難見其和悅之容、遠近尤以此重之。二十七年、終於都城興唐寺、年八十九。

（開元十三年、普寂に敕して都城に於いて居止せしむ。時に王公士庶、競ひて來りて禮謁するも、普寂嚴重にして言少し、來者は其の和悅の容を見難く、遠近尤も此を以て之を重んず。二十七年、都城の興唐寺に終はる、年八十九。）

「請施莊爲寺表」に、

（崔氏）樂住山林、志求寂靜。臣遂于藍田縣營山居一所。

（崔氏は）山林に住むを樂み、寂靜を求むるを志す。臣遂に藍田縣に于いて山居一所以營む。）

とあることからわかるように、王維が輞川莊を經營した理由の一つは、母崔氏の佛教信仰であった。しかし、その崔氏は女性でかつ高齢であるため、終南山や輞川などの長安の城外から城内の寺院を頻繁に訪れて、普寂に師事することは難しいのではないか。したがって、彼女は熱心な信者として、普寂が寂滅する開元二十七年（七三九年）までは長安城内に住んでいたと思われる。

この年の夏、王維が長安にいたことは、王維の「大薦福寺大德道光禪師塔銘」（卷二十五）

により確認できる。また、前述の二種類の「王維年譜」は翌開元二十八年に殿中侍御史に就き、その年の秋から冬に「知南選」として長安を離れたとされる。<sup>(16)</sup>一年ほどの短いこの期間に長安城内の住居を整理し、母や弟妹など一家をあげて完全に隱居し、さらには復官することは困難ではないだろうか。また孝心の篤い王維が長安に母を残して、獨り山中へ行くというのも理解しがたい。

この長安と終南別業の關係は、「終南別業」詩の第三句「興 來たれば毎に獨り往き」と第八句「談笑して 還る期 無し」の解釋にとつても重要である。この第三句の「往」(および第八句の「還」)には、次の二つの解釋が可能である。

A. 「終南別業」(終南山の陲の「家」)から周圍の山中に行き、(元の終南別業へ歸ることがない。)

B. 長安城内の居宅(常樂坊)から「終南別業」へ行き、(元の長安城内の家へ歸ることがない。)

ただ『國秀集』の「初至山中」、『河嶽英靈集』の「入山寄城中故人」という詩題はいずれも他の場所から山中に入ったことを示し、前者Aの解釋とはやや符合しないように思われる。また前者の解釋では、終南山の別業は、山中のすばらしい風景に距離的に接近していることにしか、その價值を見いだせない。さらに、最後に現れる林叟にも注目したい。この詩において、王維が元の場所に歸らない理由は林叟、すなわち樵夫に會つたからである。林叟とは俗世と交わりを絶つた隱者である。その林叟と談笑したことを理由に、「道を好み」隱棲を行うために構えたはずの終南山の別業へ歸ることがない、というAの解釋は論理的に問題がある。したがって、Bの解釋のように、王維は自らの住む長安を世俗の世界とみなして、そことは對蹠的な場所である終南山へ向かい、林叟に會つたために長安に歸ることがないと考えるのが適當である。

実際には長安に居宅を所有し、折々に終南山の別業へ行くという行動は、たとえ「休官待命」という待機状態であつたとしても成立しえよう。「終南別業」という詩は、その終南山の別業での隱棲を詠んだ作品である。そして、この終南別業がかの有名な輞川莊と同一か否かはひとまずおくとしても、別莊における隱棲生活を詩に表現する點で、輞川莊における王維の作品と「終南別業」と題するこの詩とは同様の性格を持つと言える。

ところで、この詩の創作時期については明確な記載がないため、その上限を通説の開元

二十九年よりも廣げ、王維が長安に戻った開元二十七年から天寶三載まで（「知南選」の時期を除く）の作品とするのが穩當であろう。「終南別業」詩を考察する上で、この期間は重要な意味を持っている。この時期、開元二十五年に左遷させられた張九齡は開元二十八年に死没し、これによって李林甫の派閥の勝利は確定したと言える。したがって、中央政界がこのような動きを見せる開元末から天寶初年に作られたことが明確である。「終南別業」詩は、同様に「隱逸」を詠じる輞川莊における王維の文學の先行的作品と位置づけることができよう。

### 三 「終南別業」の位置について

既に述べたように、「終南別業」詩は、世俗を離れた別業で隱棲生活を描く點において、輞川莊における文學と共通性が確認される。ゆえに、終南別業は輞川莊と同一であるのか否かという問題を改めて検討する必要がある。同一説<sup>(1)</sup>については、李浩『唐代園林別業考録』<sup>(2)</sup>が、陳允吉氏の説を繼承しつつ、さらに輞川莊の王維の前の所有者である宋之間の「別之望後獨宿藍田山莊」（之望に別れし後、獨り藍田山莊に宿す）<sup>(2)</sup>詩に

爾尋北京路　　爾は尋ぬ　　北京の路  
予臥南山阿　　予は臥す　　南山の阿

と詠むのを根據に、終南別業が輞川莊であることを指摘する。

ところで、この問題は、従來の研究では主に輞川莊を中心とした視點から論じられていた。本論では、従來の方法とは異なり、長安の側から望む風景を詠じた王維の詩を檢證したい。

次の詩は、中書省のある大明宮に近い場所に位置する寺院から終南山を望んで作られた作品と思われる。

贈徐中書望終南山歌　　徐中書に贈る　　終南山を望む歌（卷一）  
晚下兮紫微　　晩に紫微より下り  
悵塵事兮多違　　塵事の多く違ふを悵む  
駐馬兮雙樹　　馬を雙樹に駐め



望青山兮不歸 青山を望むも歸らず

これは城内から終南山を望んだ詩ではあるが、徐中書に贈呈した作品であり、その終南山が輞川莊を含む作者王維自身の園林を指すとは考えにくい。

この終南山に關して、宋の計有功『唐詩紀事』卷十六には、王維は裴迪や妻の弟の崔興宗とともに「終南山」に所在していたことが記されている。王維には、その内弟の崔興宗に與えた「崔九弟欲往南山馬上口號與別」(崔九弟の南山に往かんと欲するに、馬上に口號して別れに與ふ)詩(卷十三)がある。この詩の「南山」とはどこを指すのか。この絶句は、

城隅一分手 城隅 一たび分手し

幾日還相見 幾日か 還た相ひ見ん

と書き起こす。この第一句の「城隅」は、おそらく長安城の東南隅である可能性が高い。しかし、その地は曲江であり、送別の場所としてはあまり適當ではない。曲江に最も近い城門は長安の南門のなかで東に位置する啓夏門である。この啓夏門が實際の送別の場所ではないだろうか。この詩と對になる崔興宗の「留別王維」(王維に留別す)詩(『唐』卷百二十九)は次のように記す。

駐馬欲分襟 馬を駐めて 襟を分かつたんと欲す

清寒御溝上 清寒 御溝の上

前山景氣佳 前山 景氣 佳く

獨往還惆悵 獨り行き 還た惆悵す

この詩では終南山を「前山」と表現しているが、啓夏門(または延興門)より見て前方の山と呼ぶことができるのはどこであるのか。唐の李吉甫『元和郡縣圖志』卷一には、「終南山、在(萬年)縣南五十里」と記録する。長安城の南にあり、雄大な姿を見せるこの「狭義」の終南山こそ前山と呼ぶのにもっとも適當ではなからうか。

一方、實弟の王縉との別離の後に詠んだ次の詩は、詩題において長安から東南に位置する藍田山を望んだことを明示する。

別弟縉後登青龍寺望藍田山 弟の縉に別れし後、青龍寺に登り藍田山を望む

(卷四)

陌上新離別 陌上 新たに離別し

蒼茫四郊晦 蒼茫として 四郊 晦し

登高不見君 登高すれども 君を見ず

故山復雲外 故山 復た雲外

遠樹蔽行人 遠樹 行人を蔽ひ

長天隱秋塞 長天 秋塞に隱る

心悲宦游子 心に悲しむ 宦游の子

何處飛征蓋 何れの處にか 征蓋を飛ばさん

詩中の「故山」は通常「故郷」の意であるが、この詩では藍田山を指し、そこは輞川莊の位置する地である。作者が藍田山を眺望する青龍寺は長安の高處である樂遊原の南斜面に位置し、藍田山だけではなく、當然、狹義の終南山をも望むことができる。もし王維に終南山と藍田山という山の名を使い分ける理由がないとするならば、藍田山より広く知られた名稱であり、多くの山峰を含む總稱としての終南山という言葉を用いることの方が一般的であろう。つまり、王維があえて藍田山という個別的名稱を用いたことには、彼にとつてその山を述べるのに、終南山という名稱では代替できない、ないしは藍田山と述べざるを得ない理由があったのではないだろうか。その理由とは、他のどの場所でもない藍田山中に自らの別莊、輞川莊が存在することであると考える他はないであろう。したがって、この詩における藍田山は終南山の單なる別稱ではなく、輞川莊を指し示すために用いられたと考えられる。

このように、王維は終南山と輞川とを使い分けていた、と言えよう。そうであるならば「終南別業」もまた、輞川莊の單純な別名ではないことになる。ところで、終南山（終南別業）と輞川とを使い分けた理由は、當然、一つには両者がもともと異なる場所であることがあげられる。その蓋然性は高いように思われる。それには、それぞれの別莊の入手時期の相違も關連するかもしれない。しかし、より検討しなければならないのは、王維が終南山と輞川とを使い分けていたとすれば、その両者は王維の隱逸の詩歌においてどのような意味を持つのか、という問題である。これについて次に考察したい。

#### 四 輞川諸詠と「終南山」

王維の隱棲生活を支え、その中心的な場所であった輞川を訪れた人々は現存する作品および元の辛文房『唐才子傳』<sup>(29)</sup>によると次のように確認できる。

裴迪「輞川集二十首」(卷十三)、「輞川閒居贈裴秀才迪」(卷七) 他

王縉「別輞川別業」(卷十三)

蘇氏(名は未詳)「酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作」(卷七)

儲光羲? 「藍上茅茨期王維補闕」(『唐』卷百三十九)

錢起「中書王舍人輞川舊居」(『唐』卷二百三十八)

丘丹・崔興宗(『唐才子傳』卷二)

この結果からは、親類やごく親しい友人だけが輞川莊を訪れることのできる数少ない存在だったといえよう。つまり、輞川莊における文學に「隱逸」志向を表現した王維にとって、その輞川莊自體も隱棲の地として自分と親類、ごく近い友人のみに共通に理解される特殊な場所であったと考えられる。<sup>(30)</sup>

ところで、終南山も同じく隱棲の地という明確なイメージを有する。「終南別業」詩にも見られるそのイメージは、王維の他の作品でも否定されない。前述の張譚に贈る詩もそうであり、「終南山」(卷七)にも

欲投人處宿 人處に投じて宿らんと欲し

隔水問樵夫 水を隔てて樵夫に問ふ

と、脱俗の樵夫が現れる。自送の詩とされる次の「送別」詩<sup>(31)</sup>(卷三)も、

下馬飲君酒 馬を下りて 君に酒を飲ましむ

問君何所之 君に問ふ 何れの所にか之く

君言不得意 君 言ふ 意を得ず

歸臥南山陲 歸りて南山の陲に臥す

但去莫復問　　但だ　去れ　復た問ふこと莫けん  
白雲無盡時　　白雲　盡くる時　無し

と、隱逸の地を示すのに「南山」の語を用いる。つまり、王維は終南山の持つイメージそのものは否定していない。それは、「終南別業」「送別」などの詩に示される終南山の隱棲と輞川莊における隱棲とが、世俗からの隱逸という點で軌を一にしていることを意味する。それにもかかわらず、王維が輞川莊にて創作した文學作品において終南山に言及するのは、裴迪「輞口遇雨憶終南山因獻絶句」（輞口にて雨に遇ひ、終南山を憶ひ、因りて絶句を獻ず）（卷十三）に對する答詩の「答裴迪」（裴迪に答ふ）（卷十三）の一首のみである。さらに、裴迪は『輞川集』「北垞」詩でも

南山北垞下　　南山　北垞の下  
結宇臨欹湖　　宇を結んで　欹湖に臨む

と詠む。終南別業の位置を考證する上で、終南山（南山）を歌ったこの三首はほぼ必ず取り上げられてきた。しかし、逆にこの三首以外には終南山が現れないことの意味はほとんど考えられてこなかった。しかも、王維に限定すれば、終南山そのものを詠む裴迪の詩に答える形で終南山に觸れるか、「南山」「北垞」という對語を用いた裴迪の詩を『輞川集』に収録するだけで、彼自身積極的に終南山に言及することはなかったのである。陳允吉氏が述べるように、<sup>32</sup>一般的な地理として、輞川を抱く藍田山を終南山の山系に含めることは全く問題ない。その輞川で、王維が終南山にほとんど觸れないことには、何らかの意味を持つと考えるべきではないか。

輞川莊の王維の前の所有者である宋之問の「別之望後獨宿藍田山莊」詩では前述したように、南山という語を明確に記す。また輞川において陸渾莊（現在の河南省嵩縣）を追憶した作品とされる「陸渾水亭」詩にも、<sup>33</sup>

更以沈痼日　　更に沈痼の日を以て  
歸臥南山陲　　歸りて南山の陲に臥す

とある。つまり、宋之間にとって、藍田山莊（後の輞川莊）と終南山は、一定の相關關係

があつたと認めることができる。つまり、宋之間が眞に歸隱を願っていたかはともかく―彼は前に述べたような終南山の持つ隱逸の場としてのイメージを無名の藍田山莊に與え、その地が彼自身の隱逸の場所であることを示そうとしたのであろう。

初唐後期の詩人である宋之間が王維の記憶にないはずがない。宋氏の藍田山莊を購得したこと自體はあるいは偶然かもしれないが、それを契機に王維の宋之間に對する關心はより強くなつたであらう。しかし、王維は、輞川莊にて終南山を詠じることによつて自らの隱棲を自發的に表明することはほとんどなかつた。それは、輞川の先人である宋之間とも方法を異にするものであつた。したがつて、それは單なる偶然ではなく、何らかの意圖によると考へるべきである。

その意圖とは何か。上述したように、終南山には隱棲の地という明確なイメージがある。「終南別業」詩にも明らかのように、王維も充分にそれを認めている。特に「終南別業」詩に限つて言えば、終南山の持つイメージによつて王維の隱逸志向が讀者に明確に傳わつたことは、この詩が王維の存命中に高く評價されたことの一つの理由でもある。ところで、この終南山は對象となる範圍も廣く、また人によく知られてもいる。一方、當時の輞川は文學的にはせいぜい宋之間の詩に見えるのみで、藍田縣内の狭い地域を示す地名ではなかつた。王維は、いわば知る人ぞ知る輞川をあえて自らの詩に用いることで、その輞川こそが他の場所とは異なる、自分だけの隱棲の場所であることを示そうとしたと考へられる。王維にとつて輞川が自らの隱棲の場所であることは自分だけ、もしくは裴迪や崔興宗などといった周囲の小さな集團に理解されれば充分であつたのではないか。逆に言えば、宮廷詩人として既に名聲のあつた王維が、隱逸の場の代名詞ともいえる終南山の語を用いて自らの歸隱を述べる必要はなかつたのではなからうか。したがつて輞川を自分あるいは親しい友人のみの聖域にしようとする王維にとつて、誰もが知る終南山の名を積極的には用いながつたと推測できる。<sup>34)</sup>

## 五 小結

開元末の張九齡の死去に伴う李林甫派の政治的な勝利以降、王維の「隱」の中心こそ輞川莊であり、それは彼の文學にとつて樞要の地であつた。その開元末年から天寶初年に王維は「終南別業」という詩を著した。王維は實際には長安に住宅を有しながら、この詩では終南山下の別業における隱逸を詠んだのであつた。このように、隱逸という内容では輞

川莊における作品と基本的に一致するこの詩は、創作時期の點からみても、輞川における王維の文學の先行的作品と言えるだろう。

しかし、それだけではこの詩の理解として不充分である。王維は、自らの詩で終南山と輞川とを使い分けていた。その理由に両者がそもそも異なる場所であることも考えられ、その可能性は高いであろう。ただ、より重要なことは王維の文學において両者は意味するものが異なる、ということである。終南山は誰もが知っており、對象となる範圍も廣大である。對して輞川は、當時はほとんど無名の狭小な場所ではなかった。その輞川の莊園を購入した王維は、詩という方法で、そこを自分のためだけの純粹に隱逸を追求する場所にしようとした。そのため、輞川の作品では終南山の語を用いることをできるだけ避けようとしたのではないか。したがって、創作時期を考えれば、開元末年以降の王維の隱棲を詠じた詩には、廣大な終南山から狭小な輞川へ、誰もが知る終南山から自分及び周囲のものだけの輞川へ、といった變化があると言わなければならない。つまり、終南山から輞川への変遷を経ることによって、換言すれば、輞川をいわば「發見」することによって、『輞川集』をはじめとした輞川の詩作が花開いた。この變化の過程を把握して、はじめて「終南別業」詩が輞川諸詠へ連なる作品であることを本質的に理解できると考えるのである。

## 第一章第一節注

(1) この詩の頸聯は、郭熙『林泉高致』（臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本）・『宣和畫譜』卷十（兪劍華註譯、人民美術出版社、一九六四年一月第一版）に引用される。韋賓『唐朝畫論考釋』（天津人民美術出版社、二〇〇七年五月第一版）第二章 王維 考論「一八頁を参照。

(2) 『國秀集』『河嶽英靈集』については、傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社、一九九六年七月第一版）を参照。ただし、呂光華『今存唐人選唐詩考』（花木蘭文化工作坊、二〇〇五年十二月）六五―七八頁は、『國秀集』の序は「天寶十三載」の誤りであるとし、編纂年代を至德二載（七五七年）とする。なお、宋代の選集である『文苑英華』卷二百五十、『唐文粹』卷十六の詩題は『河嶽英靈集』と同一である。

(3) 芮挺章は、『國秀集』に北宋の曾彥和が附した跋に『國秀集』三卷、唐人詩總二百二十篇、天寶三載國子生芮挺章撰、樓穎序之」とあり、國子監の學生であったようである。殷璠について、前掲注(2) 傳著書『河嶽英靈集』前記「一〇一頁は、彼が「丹陽の進士」で、その官は潤州の文學であつたとする。

(4) 王輝斌『唐代詩人探蹟(外一種)』(貴州人民出版社、二〇〇五年一月第一版)「王維的隱居問題」(初出は二〇〇三年)七八頁は「王維『終南別業』之入『國秀集』者、當爲宋、明人所妄爲」とするが、賛同できない。この問題も含め、王輝斌氏と陳鐵民氏の間に數次の論争があるが、陳鐵民「再談考證古代作家生平事蹟易犯的幾種錯誤——答王輝斌同志」(南京師範大學文學院『南京師範大學文學院學報』二〇〇七年第二期、二〇〇七年六月)の後、「終南別業」詩の『國秀集』への収録に關する王氏の再反論はない。

(5) 參照：陳鐵民『王維論考』(人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版)「王維年譜」(初出は一九八二年)一九・二〇頁、張清華『王維年譜』(學林出版社、一九八九年九月第一版)八六・八七頁。

(6) 王維の生年については複数の説が提出されているが、清・趙殿成「右丞年譜」(卷末)による長安元年(七〇一年)がもっとも遅い。

(7) 王輝斌『王維新考論』(黃山書社、二〇〇八年五月第一版)一二二頁—一二五頁は、「王維亦官亦隱說質疑」を中心に王維の「半官半隱」を否定する。しかし、「半官半隱」という制度がなかったという王氏の立論はあまり意味がない。また、休暇に關する問題提起は興味深いが、たとえば「職分田」(四三頁)について「施迴前任司職田粟施貧人粥狀」(卷十八)に言及しないなど、問題點も多い。なお、この點に關して、潘良熾・劉孔伏「裴迪與王維交游考」(四川文理學院『四川文理學院學報』第二十卷第四期、二〇一〇年七月)四七頁は、裴迪と王維との交往を考察するなかで、「裴回(裴迪の父。紺野注)……於天寶二年『正月十二日』不治身亡。……此時正逢王維回終南別業休年暇、……」と述べている。

(8) 陳鐵民「王維生平五事考辨」(前掲注(5)『王維論稿』所收。初出は一九八七年)の「三 關於隱居終南與輞川」六〇頁を參照。就任については、前掲注(5)陳論文一一〇頁、張著書八九頁を參照。

(9) 原文は靜嘉堂藏宋本影印『王右丞文集〔複製〕』(靜嘉堂稀觀書之七、雄松堂書店販賣、一九七七年七月發行)卷三に據った。『王摩詰文集』(上海古籍出版社據北京圖書館藏宋蜀刻本影印本、一九九四年九月第一版)卷五は「閣」を「園」に作る。

(10) 劉飛濱「王維詩題注小議」(『王維研究』編輯部『王維研究』第三輯(陝西人民教育出版社、二〇〇一年一月第一版))三二四・三二五頁も同様の指摘をする。

(11) 參照：『長安志』(乾隆五十二年刊經訓堂叢書本)。類似の記述は、北宋・王溥『唐

- 會要』(中華書局排印本、一九五五年六月第一版) 卷四十七、唐・段成式『酉陽雜俎』(中華書局排印本、一九八一年一月第一版) 續集卷五「寺塔記上」にも見える。
- (12) 参照：清・仇兆鰲『杜詩詳注』(中華書局排印本、一九七九年一月第一版) 卷二十四「畫馬讚」及び卷十三「丹青引」詩の「弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相」の句。
- (13) 原文は次の通り。「韓幹、京兆人也。明皇天寶中、召入供奉」(臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本)。
- (14) 『太平廣記』(中華書局排印本、一九六一年九月第一版)。原文は「璵」とするが、北宋・王讜『唐語林』(周勳初『唐語林校證』(中華書局、一九八七年七月第一版) 卷五四八六頁) に従い改める。
- (15) 本稿は中華書局排印本(一九七五年五月第一版) に據った。
- (16) 参照：前掲注(5) 陳論文一六・一七頁、張著書七五―八三頁。
- (17) 参照：釋清潭『淵明・王維全詩集』(日本圖書センター、一九七八年八月復刻版。原書は一九二九年) 八九頁、王啓興主編『王維孟浩然名篇欣賞』(巴蜀書社、一九九九年八月第一版) 一二二頁(周茂君執筆)。
- (18) 参照：都留春雄『王維』(岩波書店、一九六八年七月第八刷。初出は一九五八年) 一二七頁、入谷仙介『王維』(筑摩書房、一九七三年一月第一刷) 一三二頁。
- (19) 別個説を唱えるものに陳貽焮『唐詩論叢』(湖南人民出版社、一九八〇年九月第一版) 「王維生平事蹟初探」(初出は一九五八年) 一〇五頁―一〇七頁、前掲注(8) 陳鐵民「王維生平五事考辨」の「三 關於隱居終南與輞川」五三頁―五九頁がある。なお、王輝斌氏は前掲注(7) 『王維新考論』「關於王維生平中的幾個問題」陳鐵民「再談一文駁評續篇」(三六三頁―三六六頁) などで、王維が藍田に二箇所の莊園を所有したとするが、王氏の「終南別業」詩の『國秀集』収録に對する理解の誤り、『舊唐書』卷百九十下の王維傳を王氏のように「晚年長雨……得宋之間藍田別墅」と讀む他に、「晚年長齋、不衣不綵。得宋之間藍田別墅、……」(中華書局排印本) のように輞川莊購得を晚年に限定しない句讀も可能であること、引用する杜甫「崔氏東山草堂」詩についての二種類の文獻、つまり『杜詩詳注』卷六所引の「顧注」(實際には清・顧宸『杜甫註解』七言律卷一) 及び聞一多「少陵先生年譜會箋」(『唐詩雜論』所收) 乾元元年條がいずれも『舊唐書』の王維傳を元にする可能性が高い(特に顧注は「按舊史」と記す) ことなど、論據に問題が多く、賛同しかねる。

(20) 参照：李浩『唐代園林別業考錄』(上海古籍出版社、二〇〇五年一月第一版) 五九・



六〇頁。

(21) 参照：陳允吉『佛教與中國文學論稿』（上海古籍出版社、二〇一〇年一月第一版）「王維『終南別業』即『輞川別業』考」（初出は一九八三年）二五三―二七一頁。

(22) 宋之問の詩は陶敏・易淑瓊『沈佺期宋之間集校注』（中華書局、二〇〇一年一月第一版）「宋之間集校注」卷一による。

(23) 参照：王仲鏞『唐詩紀事校箋』（中華書局、二〇〇七年一月第一版）卷十六「裴迪」條。原文は次の通り。「迪初與王維・興宗俱居終南。……興宗姓崔」。なお、前掲注（7）所引の潘良熾・劉孔伏「裴迪與王維交游考」四六頁は、天寶二年正月に父の裴回の没した裴迪は「在家庭經濟困難的情況下、……在此之前根本沒有富餘財力另置房產、與王維・崔興宗同隱終南山」と指摘する。また、陣内孝文「裴迪生年考」（九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十四号、二〇〇四年一月）六四頁は「天寶二載にはまだ物事を理解するに及ばない幼い子供であった、と解するのが妥當である」と考證する。内田誠一「『輞川集』に關する二三の問題（上）―裴迪同詠はなぜ稚拙か―」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十三集、二〇〇四年一月）も、裴迪が裴回の息子である蓋然性が高いことを認めたくえで、「裴迪は王維よりも二十歳以上年少となる」（二九頁）と論じる。裴迪の年齢についてはなお定説がないものの、いずれにせよ、王維が開元末から天寶初年に「終南別業」詩を創作したという本論の主旨には大きく影響しない。

ところで、後述するように、輞川における裴迪の作品には「南山」の文字が見える。もし、右の諸説に従い、裴迪と王維との實質的な詩作の交往が―王維が「終南別業」詩を詠んだ當時ではなく―王維の輞川莊購得後にのみ行われたとするならば、本論が指摘する王維における終南山と輞川との區別について、裴迪はあるいはその若さゆえに、充分には理解せず、輞川における詩に終南山を詠ってしまったとも考えられる。したがって、これら裴迪の年齢に關する諸説は（王維と裴迪の終南山での交遊を述べた『唐詩紀事』の説こそ否定するもの）、むしろ、王維はその詩作において終南山と輞川とを使い分けていた、前者から後者への變遷があつたという本論の主要な論旨を補強するものである。

(24) 他に、次に曲江に近い長安城東門で最南の延興門も考えられる。

(25) 『唐』は『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版）を示す。

(26) 本論文は中華書局排印本（一九八三年六月第一版）に據った。

(27) 参照：植木久行「唐都青龍寺初探」(秋月觀暎編『道教と宗教文化』(平河出版社、一九八七年三月第一版))一三〇・二三二頁及び同「唐都長安樂遊原詩考―樂遊原の位置とそのイメージ」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第六集、一九八七年六月)五六頁。

(28) この詩の場合、この詩の第一の讀者たる弟の王縉にとつても、實母が輞川莊で晩年を過ごし、死後は葬られている以上、より廣い地域を指す「終南山」よりも「藍田山」のほうが適當であつたと考えられる。

(29) 本論文は傅璇琮主編『唐才子傳校箋』(中華書局、一九八七年五月第一版)に據つた。

(30) 入谷仙介『王維研究』(創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年)四六七頁は「ごく少数の肉親および、裏切られる恐れのない目下の、あるいは無官の警戒する必要のない氣心の知れた友人と小さなグループを作り、その中で信仰と藝術にひたることにより、疎外に傷めつけられた魂を癒す道である。……長安の方へたどる道の人ごみに疲れた王維は輞川の方へわずかな友と逍遙することに安らぎを見出したのである」と論じる。ところで、内田誠一「王維の自閉的志向」(松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』、二〇〇六年三月第一版)三八〇頁は「友人であれ、親族であれ、王維との高次の精神交流を行い、かつ王維を啓發せしむるほどの人間は殆ど存在しなかつたであろう。その結果、王維は現實の人間との交流を斷絶して自分の世界に閉じこもるといふ、(自閉的志向)をとらざるを得なかつたのではあるまいか」と指摘する。ただし、このような指摘、すなわち文學を含む王維の藝術をも友人・親族が理解できたかどうかという問題は、輞川莊という場所自體を王維の隱棲の地として彼等が認識していたことと嚴密には區別して考へる必要がある。

(31) 参照：松原朗『中國離別詩の成立』(研文出版、二〇〇三年六月第一版)「自送の詩―王維「送別」詩論考―」(初出は二〇〇一年)三二七頁―三五二頁。

(32) 前掲(21) 陳著書二五八頁は、終南別業と輞川別業が同一であることを論じる前提として、輞川別業と終南山の地理關係について「可以推定王維藍田「輞川別業」具體的地理位置、當在終南山之東緣北麓(藍田山在縣城之東南、雖然不在輞谷内、但從整體終南山大範圍來說、它基本上是屬於此山的東部邊緣)、應當和終南山相當靠近」と記す。

(33) この詩は前掲注(22)『沈佺期宋之間集校注』「宋之間集校注」卷一所收。なお、こ

の詩については前掲注(31) 松原著書三三九頁を参照。ただし同書の引用する儲光羲「同王十三維偶然作十首、其二」詩に「伊闕」の語があり、洛陽周邊を詠むと考えられることから、宋之間の詩も陸渾の作である可能性はなお残る。

(34) さらに言えば、終南山の持つ隱棲のイメージが明確なため、王維の生きた玄宗の治世には、仕官運動に作用して「終南捷徑」(『新唐書』(中華書局排印本、一九七五年二月第一版) 卷百二十三「盧藏用傳」)の故事をも生み出した。このことも王維が終南山の語を積極的に用いなくなった理由であるかもしれない。

(35) 前掲注(23) 内田論文三〇頁は『輞川集』成立を天寶四・五載より前とする。もし、内田説に従う場合、嚴密に言えば「終南別業」詩と『輞川集』はほぼ同時期の作品の可能性も想定される。ただし、内田説が『輞川集』成立時の裴迪の年齢を「十代前半より半ば」とする以上、天寶四載を大きく遡ることはないと思われる。したがって、実際には内田説を是とした場合でも、『輞川集』は開元二十七年から天寶三載までの間に創作された「終南別業」詩よりもやや後の成立であるというのが真相であると考えられる。

## 第二節 「待儲光羲不至」詩について

### ―初盛唐期の園林における詩人の交遊を中心に―

#### 一 問題の所在

王維の「待儲光羲不至」詩（卷九）は、この詩に對する儲光羲の答詩とともに、彼らの傳記研究及び兩者の交往を考える上で不可缺の作品である。

そもそも中國の詩歌と詩人を考えるとき、詩人が誰と交遊し、どのような作品の交往があつたのかを検討することは最も基礎的な研究方法の一つである。唐代の詩歌については、著名な詩人における交遊や特定の文學集團などの研究が活發に行われているのみならず、唐五代の交往詩の網羅的な索引も作成されている<sup>(1)</sup>。

そのような詩人の交流において、莊園や庭園、別莊などの總稱である「園林」は重要な場所として機能していた。言い換えれば、當時、詩人や文人の生活・遊覽の場でもあつた園林にしばしば他の詩人たちも集い、詩歌が創作・受容されていっただのである<sup>(2)</sup>。したがって、園林における詩人の交遊と詩歌の創作との具體的關係、特にその時代的變遷を考察することは、單に詩人個人の傳記研究に資するのみならず唐代文學全般の研究にとつても意義があるのではなからうか。

本節ではその一つの試みとして、「待儲光羲不至」詩を園林でしばしば創作された「友人」と約束したものの、「友」が來ない」という一羣の詩作の一つと捉え、これらの作品の展開について盛唐期までを対象に考察する。それは、この實際には「交遊」が果たされない、という逆説的な詩の誕生と展開を追うことで、かえって唐代園林における詩人の交流とそこにおける詩作の一面が見えてくると考えられるからである。さらに言えば、それによつて、王維と裴迪の交往に生まれた『輞川集』の王維の文學ならびに唐代園林文學における位置もより明確にならう。

#### 二 六朝期における情況 ―先行研究とそれに對する検討―

この「友人」と約束したが、その「友人」が現れない」という詩とその文學史的位<sup>(3)</sup>置について指摘したのは石川忠久氏による二篇の論文である。

石川氏は、まず、東晉・謝混の「遊西池」(西池に遊ぶ)詩(『文選』卷二十二<sup>(4)</sup>)に着目する。

悟彼蟋蟀唱	彼の蟋蟀の唱を悟り
信此勞者歌	此の勞者の歌を信ず
有來豈不疾	來ること有り 豈に疾からざらんや
良遊常蹉跎	良遊 常に蹉跎す
逍遙越城肆	逍遙として 城肆を越え
願言屢經過	願ひて言に屢しば經過せんと
回阡被陵闕	回阡 陵闕に被り
高臺眺飛霞	高臺 飛霞を眺む
惠風蕩繁囿	惠風 繁囿を蕩かし
白雲屯曾阿	白雲 曾阿に屯る
景昃鳴禽集	景昃きて 鳴禽 集まり
水木湛清華	水木 清華を湛ふ
褰裳順蘭沚	裳を褰げて蘭沚に順ひ
徒倚引芳柯	徒倚して芳柯を引く
美人愆歲月	美人 歲月を愆つ
遲暮獨如何	遲暮 獨り如何せん
無爲牽所思	思ふ所に牽かるるを爲す無けん
南榮誠其多	南榮 其の多きを誠む

特に末尾四句をもとに「かくして、「友と楽しまんとて西池のほとりに待つが、友は約束通りに來ない、思い患うことはやめよう」という詩が成り立ったわけである」と、石川氏はこの詩の文學史的位置を論じ、さらに「この、友と約束したが來なかつた、というのは、「約不至」とか「期不至」とかの詩題を生み、後世に繼承される」と結論づける。<sup>(6)</sup>

石川氏は、次に南朝宋・謝靈運「南樓中望所遲客」(南樓中に遲つ所の客を望む)詩(『文選』卷三十)に言及する。<sup>(7)</sup>

杳杳日西頽 杳杳として 日は西に頽れ

漫漫長路迫	漫漫として	長路	迫る
登樓爲誰思	樓に登りて	誰が爲にか思ふ	
臨江遲來客	江に臨みて	來客を遅つ	
與我別所期	我と別れて期する所あり		
期在三五夕	期は三五の夕に在り		
圓景早已滿	圓景	早已に滿つるも	
佳人猶未適	佳人	猶は未だ適らず	
卽事怨睽攜	事に卽しては	睽攜するを怨み	
感物方悽戚	物に感じては	方に悽戚す	
孟夏非長夜	孟夏	長夜に非ず	
晦明如歲隔	晦明	歳の隔つるがごとし	
瑤華未堪折	瑤華	未だ折るに堪えず	
蘭苕已屢摘	蘭苕	已に屢しば摘む	
路阻莫贈問	路は阻たりて	贈問する莫し	
云何慰離析	云何ぞ	離析を慰めん	
搔首訪行人	首を搔いて	行人を訪ひ	
引領冀良覲	領を引いて	良覲を冀ふ	

石川氏はこの謝靈運の詩をもとに「ここに、〃約束したが友は來ない。來ないことによつて却つて妙味がかもし出される」という逆説的な命題が形成し、「期不至」（期して至らず）として定型化する」と指摘する。

石川氏の論旨そのものは明確であるが、なお検討すべき課題が含まれるように思われる。第一に、謝混と謝靈運の二首の詩が詠う「西池」「南樓」の場所の問題である。謝混詩の「西池」については、『文選』李善注が、

西池、丹陽西池。混思與友朋相與爲樂也。

（西池は、丹陽の西の池なり。混友朋と相ひ與に樂しみを爲すを思ふなり。）

と記しており、西池とは丹陽郡（現在の江蘇省南京市）西郊の景勝地であつたと考えられる。それでは西池にはどのような風景が廣がつていたのだろうか。謝混詩は、その中間に

西池の景觀を描寫する。その「回阡 陵闕に被り、高臺 飛霞を眺む。惠風 繁囿を蕩かし、白雲 曾阿に屯る」の部分は、西池が單に美しい山水の廣がる景勝地ではなく、曲がりくねった道や高殿が造營された人工的な景勝地であったことを示してはいないだろうか。つまり、東晉の時代、丹陽西池はすでに園林となっていた、少なくとも園林化していたと見てよいだろう。一方、謝靈運詩の舞臺である南樓はかの有名な始寧別墅（現在の浙江省嵯州市の北）にあつた。<sup>(8)</sup> いうまでもなく、始寧別墅は謝靈運が自ら造營した廣大な園林である。したがって、この友人を待つもののその友が來ない詩というのは、その成立當初から景勝地、特に人工的に作られた園林で創作されたと考えられる。

第二の課題は、石川氏のいう「期不至」詩の定型化の時期がいつか、ということである。「約束した『友』が來ない」詩について、少なくとも現存し、かつ同時代ないしは後世に影響力を持つ作品は『文選』に收められる謝混「遊西池」に始まるという石川氏の指摘は重要である。しかし、それに續く謝靈運の詩の登場のみをもって「定型化」したといつてよいのだろうか。

定型化を考えるにあたって、本論文では一つの指標として「詩題」に注目したい。もし、詩題に「期不至」、あるいはそれに類するような詩題を持つ詩が一定數、存在すれば、その時期には「期不至」詩はすでに定型化していたとみなすことができるだろう。

しかし、六朝期の作例を見た場合、「期不至」が詩題に見える作品は姚翻の次の詩が確認されるのみである。

有期不至 期有るも至らず

姚翻（『玉臺新詠箋注』卷十）<sup>(9)</sup>

黄昏信使斷 黄昏 信使 斷え

銜怨心悽悽 怨みを銜みて 心 悽悽

回燈向下榻 燈を回して 下榻に向かひ

轉面闇中啼 面を轉じて 闇中に啼く

また類似する作品に對象を擴げた場合、（約束の有無が定かではないが）次の沈約の詩を含めることができる。

爲鄰人有懷不至 鄰人の爲に懷ひ有るも至らず 沈約（『玉臺新詠箋注』卷十）

影逐斜月來 影は斜月を逐ひて來たり

香隨涼風入

香は涼風に隨ひて入る

言是定知非

是を言うも 定めて非を知る

欲笑翻成泣

笑はんと欲して 翻つて泣くを成す

しかし、かりにこの沈約の詩を含めたとしても、「約束した人物が来ない」ということを詩題に明示する詩は謝靈運以降の六朝期では多くとも二首であり、定型化したと考えるには作例があまりにも乏しい。<sup>10</sup> そもそも、この二首はいずれも『玉臺新詠』所收の閨怨詩<sup>11</sup>であり、男性の來訪がないことを悲嘆する女性を描くため、謝混等の詩とは内容上、徑庭があると云わざるを得ない。また、かりに謝混や謝靈運の詩から影響があつたとすれば、彼らの詩のように約束した場所についての敘景表現も繼承されるはずだが、この姚翻・沈約の詩にはそのような敘景表現は全く見られない。したがって、「期不至」詩は謝混にはじまり、謝靈運がそれを繼承したものの、六朝後期においてはそれ以上の展開を見せず、いわば孤立した作例となつているといえよう。<sup>12</sup>

### 三 初唐における變化 — 宋之間詩について —

謝靈運以降、六朝期にこのような「友人」と約束したが、その「友人」が現れない」という詩の作例が確認されない以上、その定型化は次の唐代以降にはじまるとみるべきである。

まず、注目されるのは初唐後期の宋之間の詩であろう。

見南山夕陽召鑿師不至 南山の夕陽を見て鑿師を召すも至らず

宋之間(『唐』<sup>13</sup> 卷五十一)

夕陽黯晴碧

夕陽 黯として晴碧

山翠互明滅

山翠 互ひに明滅す

此中意無限

此の中に 意は無無限

要與開士說

開士と説かんと要す

徒鬱仲舉思

徒らに鬱たり 仲舉の思

詎迴道林轍

詎ぞ迴らん 道林の轍

孤興欲待誰

孤興 誰をか待たんと欲す



待此湖上月　此の湖上の月を待たん

越州（現在の浙江省紹興市）で作られたとされるこの詩は、南山の夕陽に感銘を受けた宋之問が僧侶である鑿師（一七〇）を招き、おそらく佛教の眞理を語らおうと考えたにもかかわらず、その鑿師が來ないことを詠う。鑿師と南山に會う約束が以前よりなされていたとは斷言できなないが、夕陽という極めて短時間の景勝を鑑賞するという情況から判断すれば、事前は何らかの約束、あるいは勧誘があつたことは充分に推測できる。

この推測が當を得ているとすれば、この宋之問の詩は謝混や謝靈運と同様、または類似する作品と言えよう。しかし、宋之問の詩が謝混や謝靈運と大きく異なるのは、詩題に鑿師を招こうとしたが、相手が應じずに來なかつたという詳細な情況が明示されている點にある（一七〇）。

謝混詩の詩題は景勝地である「西池」に遊覽したことを述べるのみで、その遊覽が單獨で行われたのか、それとも同遊する相手があつたのかは全く知ることができない。そして、作品を読み進めても、結局、その待っていた友が何者であるかを理解することは不可能である。さらには、その友人に關係する個別的事情がほとんど捨象された結果、「約束した友人が現れない」という情況そのものに新たな文學的價值が生じているのである（一七〇）。また、謝靈運詩の詩題には「友人を待つ」謝靈運自身の姿を確認し得るが、その相手が誰なのかはやはり定かではない（一七〇）。要するに、彼らの詩において待つべき相手はほとんど曖昧な、いわば匿名的存在なのである。

一方、宋之問の詩では、詩題に「鑿師」と明示されている。尾聯に「孤興　誰をか待たんと欲す、此の湖上の月を待たん」とあるように、謝混や謝靈運と同様、宋之問は結局、南山という形勝の地において、單獨でその風景を觀賞しているにもかかわらず、詩題には鑿師という一個の具體的な僧侶の名が見えている。つまり、宋之問にとって佛僧の鑿師が眞實、重要な存在であつたかは別にして、少なくとも特定する必要がある人物だつたということになる。

この時、特定される相手が佛僧であつたことは示唆的である。佛教は特に清淨な境地を必要とする。したがって、詩人が自らの遊覽の地に佛僧を招くという行爲はその場所が僧を招來するのに相應しい清澄な場であることを示すことになる。さらに、それは詩人自身がそのような場に遊んだこと、ひいては自らがそういった境地を好む人物であることをも意味する。そのため、宋之問は匿名ではなく、明確に特定の僧侶を招いたということを書き

す必要があつたのではないだろうか。

#### 四 盛唐期の情況

このように六朝の謝混・謝靈運と初唐の宋之間の間には、約束した相手の情報の記述の有無という点において大きな相違がある。その理由について考える前に、つづく盛唐期の情況を確認する。

まず、孟浩然の二首から見たい。

宿業師山房期丁公不至 業師の山房に宿し、丁公と期すも至らず

孟浩然(『唐』卷百五十九)

夕陽度西嶺	夕陽	西嶺に度り
羣壑條已暝	羣壑	條として已に暝たり
松月生夜涼	松月	夜涼を生じ
風泉滿清聽	風泉	清聽を滿たす
樵人歸欲盡	樵人	歸りて盡きんと欲し
烟鳥棲初定	烟鳥	棲みて初めて定まる
之子期宿來	之子	宿來を期し
孤琴候蘿逕	孤琴もて	蘿逕に候つ

この詩は、業師という僧侶の「山房」に宿泊した孟浩然が、同宿を約束した丁公、すなわち丁鳳（トウボウ）が現れないことを述べる。この山房が實際にどのようなものであったかは判然としない。しかし、頷聯でその風景を清澄な場として描寫する孟浩然にとって、この山房は佛僧が住むに適當な清淨な場所であるのと同時に、友と連れだつて遊賞するにふさわしい行樂の場でもあつた。

注目したいのは、この詩が「期不至」という内容を詩題に明示する點である。「詩題」における明記を定型化の指標とするならば、謝混によって成立した「期不至」詩は孟浩然の生きた盛唐期に至つてようやく定型化したといつてよいだろう。

孟浩然の次の詩はどうであろうか。

上巳日潤南園期王山人陳七諸公不至

上巳の日、潤南園に王山人・陳七諸公と期すも至らず

孟浩然（『唐』卷百六十）

搖艇候明發	搖艇	明を候ちて發し
花源弄晚春	花源	晚春を弄す
在山懷綺季	山に在りては綺季を懷ひ	
臨漢憶荀陳	漢に臨みては荀陳を憶ふ	
上巳期三月	上巳	三月に期し
浮杯興十旬	浮杯	十旬に興す
坐歌空有待	坐歌	空しく待つ有り
行棄恨無鄰	行樂	鄰無きを恨む
日晚蘭亭北	日は晩る	蘭亭の北
烟開曲水濱	烟は開く	曲水の濱
浴蠶逢姹女	蠶に浴して	姹女に逢ひ
採艾值幽人	艾を採りて	幽人に値ふ
石壁堪題序	石壁	序を題するに堪へ
沙場好解神	沙場	好しく神を解すべし
羣公望不至	羣公	望めども至らず
虛擲此芳晨	虚しく此の芳晨を擲つ	

この詩はおそらく孟浩然の故郷、襄陽（現在の湖北省襄樊市）にあった彼の園林、潤南園に上巳の遊覧を行ったものの、本來約束した王山人、すなわち王廻（20）や陳七は結局訪れることがなかったことを詠う。そして、宋之間の作品や同じ孟浩然の「宿業師山房期丁公不至」詩と比較して、この作品は園林において創作された「期不至」詩であることをより明確に示しているだろう。

ところで、この詩は王山人という隠者との約束であり、かつ祓禊に由来する上巳についての言及が多く見られるものの、本質的な意味での宗教性は確認できない。それにもかかわらず、王山人・陳七という名が詩題に明示されている点は注目に値するだろう。上述したように、唐代に至って、おそらく約束の場所が清浄であることを示すために、僧侶の名を詩題に記す「期不至」詩が出現した。その結果、「期不至」詩において、「誰と」、「どこ

で」會う約束をしたかを容易に示すことが可能となり、佛教以外の場合においても擴大して用いられるようになったと考えられる。つまり、「期不至」詩が約束した相手の名を記すという様式を得た、すなわち記名性を持ったのである。そして、それによって、この「期不至」詩は定型化していったといえよう。<sup>\*</sup> 宋之間・孟浩然の「期不至」詩はまさにその變化の様を示してはいないだろうか。

\*あえていえば、「期不至」詩が定型化したことによって、記名性を持ったと考えるのは必ずしも正確ではない。事實はその逆である。確かに後述するように、一旦、定型化が完成すれば、それぞれの作品の個別化を圖るためにも、「誰と」「どこで」會う約束をしたかを明示することが「期不至」詩の典型としてより定着していったことに誤りはないだろう。しかし、まさに「期不至」詩が定型化へと向かう段階にあったのは、そのための様式が必要であった。その様式こそ約束した相手の名を記すことだったのである。

孟浩然以降、このような「期不至」詩はまとまった數量で存在する。以下、關係する詩を列挙しておく。

A 與蘇盧(21)二員外期遊方丈寺而蘇不至因有是作

蘇・盧二員外と方丈寺に遊ぶを期するも蘇は至らず、因りて是の作有り

王維（卷十二）

共仰頭陀行	共に仰ぐ	頭陀の行	
能忘世諦情	能く忘る	世諦の情	
迴看雙鳳闕	迴りて看る	雙鳳の闕	
相去一牛鳴	相ひ去ること	一牛の鳴	
法向空林説	法は空林に向かひて説き		
心隨寶地平	心は寶地に隨ひて平らかなり		
手巾花氎淨	手巾	花氎	淨く
香帔稻畦成	香帔	稻畦	成る
聞道邀同舍	聞道らく	同舍を邀ふるを	
相期宿化城	相ひ期す	化城に宿するを	

安知不來往　　安くんぞ知らん　來往せずして  
翻以得無生　　翻つて以て無生を得るを

B　龍門西峯曉望劉十八不至　　龍門の西峯にて曉に劉十八を望むも至らず  
李頎〔唐〕卷百三十二

春臺臨永路　　春臺　永路に臨み  
跂足望行子　　足を跂ちて　行子を望む  
片片雲觸峯　　片片として　雲　峯に觸れ  
離離鳥渡水　　離離として　鳥　水を渡る  
叢林遠山上　　叢林　遠山の上  
霽景雜花裏　　霽景　雜花の裏  
不見攜手人　　見ず　手を攜へるの人を  
下山采綠芷　　山を下りて　綠芷を采る

C　宿京江口期劉賚虛不至　　京江口に宿し、劉賚虚と期するも至らず  
王昌齡〔唐〕卷百四十二

霜天起長望　　霜天　起ちて長望すれば  
殘月生海門　　殘月　海門に生ず  
風靜夜潮滿　　風靜かにして　夜潮滿ち  
城高寒氣昏　　城高くして　寒氣昏し  
故人何寂寞　　故人　何ぞ寂寞  
久已乖清言　　久しく已に　清言に乖る  
明發不能寐　　明に發すれば　寐ぬる能はず  
徒盈江上尊　　徒らに盈す　江上の尊

D　虢州南池候嚴中丞不至　　虢州の南池に嚴中丞を候つも至らず  
岑參〔唐〕卷二百<sup>(2)</sup>

池上日相待　　池上　日び相ひ待つも  
知君殊未回　　君の殊に未だ回らざるを知る  
徒教柳葉長　　徒らに柳葉をして長からしめ

謾使梨花開 謾りに梨花をして開かしむ  
駟馬去不見 駟馬 去りて見えず  
雙魚空復來 雙魚 空しく復た來る  
相思不解說 相思するも 説く解はず  
孤負舟中杯 孤負す 舟中の杯に

E 東谿待蘇戸曹不至 東谿に蘇戸曹を待つも至らず 張萬頃『唐』卷二百二  
洛陽城東伊水西 洛陽城東 伊水の西  
千花萬竹使人迷 千花 萬竹 人をして迷はしむ  
臺上柳枝臨岸低 臺上の柳枝 岸に臨みて低れ  
門前荷葉與橋齊 門前の荷葉 橋と齊し  
日暮待君君不見 日暮 君を待つも 君見えず  
長風吹雨過青溪 長風 雨を吹きて 青溪を過ぐ

F 西閣三度期大昌嚴明府同宿不到  
西閣に三度、大昌の嚴明府の同宿するを期するも到らず

杜甫『唐』卷二百二十九

問子能來宿 子に問へば 能く來宿せんと  
今疑索故要 今 疑ふ 故要を索むるを  
匣琴虛夜夜 匣琴 虚しく夜夜  
手板自朝朝 手板 自から朝朝  
金吼霜鐘徹 金吼えて 霜鐘徹し  
花催臘炬銷 花催して 臘炬銷す  
早鳧江檻底 早鳧 江檻の底  
雙影漫飄飄 雙影 漫りに飄飄たり

G 崔評事弟許相迎不到應慮老夫見泥雨怯出必愆佳期走筆戲簡

崔評事弟の相ひ迎ふるを許すも到らず、應に老夫の泥雨を見て出づるを怯れ、  
必ず佳期を愆るを慮るべし、筆を走らせて戯れに簡す

杜甫『唐』卷二百二十九

江閣邀賓許馬迎	江閣	賓を邀ふるに	馬迎を許す
午時起坐自天明	午時	起坐すること	天明よりす
浮雲不負青春色	浮雲	負かず	青春の色
細雨何孤白帝城	細雨	何ぞ孤かん	白帝の城
身過花間霑濕好	身は花間を過ぎ	霑濕好く	
醉於馬上往來輕	醉ひて馬上に於いて	往來輕し	
虛疑皓首衝泥怯	虚しく疑ふ	皓首	衝泥を怯るるか
實少銀鞍傍險行	實に少く	銀鞍の險に傍ひて行くを	

このように盛唐期に限っても孟浩然以降、八首の作品が確認され、「期不至」詩は盛唐という一時期に定型化が完成するとともに多作されていった、つまり一般化したといつてよ<sup>24</sup>かるう。また、これらの詩の詩題には特定の場所がほとんど明記されている（明記されていないGはそれぞれ詩人の住居が舞臺である）。そして、その多くが景勝地、遊覽の地であるとともに、虢州南池、（洛陽）東溪、方丈寺、西閣などは、園林やそれを備えるような住居・寺院なのである。

とりわけ、これらの詩にはすべて約束した相手が特定されていることは注目に値する。既に述べたように、宋之間・孟浩然の「期不至」詩、もしくはそれに類する作品には「誰と」約束したかが明示されていた。AとGの作品は、そのような「期不至」詩の記名性が宋之間や孟浩然における偶然的事情によつてのみ成立したのではなく、「期不至」という作品における一つの傾向であったことを示している。つまり、唐以降、特に盛唐の詩人にとつて「約束したが来ることのない」相手は、六朝のような匿名の人物ではなく、最も目につく詩題に明記されるべき存在だった。さらに言えば、相手を特定することがもはや一般的なこととなっていたのである。

##### 五 王維「待儲光羲不至」詩——「期不至」詩とその答詩——

盛唐におけるこのような情況において、特に注目に値するのは、王維「待儲光羲不至」詩である。

重門朝已啓 重門 朝に已に啓き

起坐聽車聲　起坐して　車聲を聽く  
要欲聞清佩　清佩を聞かんと欲要し  
方將出戸迎　方に將に戸を出でて迎ふ  
晚鐘鳴上苑　晚鐘　上苑に鳴り  
疏雨過春城　疏雨　春城を過ぐ  
了自不相顧　了に自ら相ひ顧みず  
臨堂空復情　堂に臨みて　空しく復た情あり

開元十四年（七二六年）春もしくは翌年の春の作とされるこの詩はおそらく洛陽の自宅にて豫め約束して儲光羲の訪問を待ったものの、結局、彼が現れなかったことを詠ったものである。この詩に注目する理由の第一は、「期不至」詩のなかではじめて答詩が存在することである。それが次の儲光羲の「答王十三維」（王十三維に答ふ）詩である。

門生故來往　門生　故より來往す  
知欲命浮觴　觴を浮かべるを命ぜんと欲するを知る  
忽奉朝青閣　忽ち奉じて青閣に朝し  
回車入上陽　車を回して上陽に入る  
落花滿春水　落花　春水に滿ち  
疏柳映新塘　疏柳　新塘に映ず  
是日歸來暮　是の日　歸來　暮る  
勞君奏雅章　君をして雅章を奏せしむるを勞す

このような「答詩」の出現は、盛唐期に「期不至」詩の詩題において約束した相手特定することが重要となった、もしくは一般的なになったことと無縁ではなく、むしろその必然の結果であっただろう。約束した相手の特定という行爲は、當然、詩によって友情や思慕など相手への何らかの思いを傳達しようとする容易に結びつく。その場合、儲詩の末句が記すように、その詩を違約した相手に贈ることは十分に想定できる。そして、王維からそのような詩を受け取った儲光羲がさらに返答の詩を贈ることも自然なことであると考えられる。

したがって、儲詩が頷聯で約束を果たすことができなかつた理由を記したことは、「答詩」



という性格上、一見ほとんど違和感がない。しかし、その理由として儲光義が急な公務で上陽宮に参内したことを記すことはやはり看過できないように思われる。そもそも、このような出仕や公務は詩人等による園林などの遊覧、交流を妨げる要因の一つであった。そうであるならば、儲光義がそれを理由に王維と同遊することができなかったことを詩にわざわざ記すことで、逆に王維とその園林を含む邸宅が出仕などに代表される俗事とは對照的な位置にあることを暗に示すことになるのではなからうか。<sup>(27)</sup>

この儲光義の答詩について、もう一つ、検討すべき問題は頸聯に見える敘景表現である。これは洛陽のどこの風景を詠ったものであるか。もし、この部分を儲光義が當日、参内した上陽宮の風景であると假定するならば、彼が実際に目睹した風景であり、かつ美しい敘景ではあるものの、王維とはほとんど没交渉のこととなる。しかし、それが王維の園林を含む邸宅もしくはその周辺の景物を想像したものであるならば、それは本来、主人である王維と客である儲光義がともに觀賞することができたはずの景色である。王維と儲光義という詩人間の交流を考えるならば、後者のように考えるのがより適切に思われる。この推定に誤りがないとすれば、王維の「待儲光義不至」詩とそれに對する儲光義の答詩は、園林を備える一つの邸宅をそれぞれ實景表現と想像という二つの方法によって描いたことになるだろう。

これまで「待儲光義不至」詩とそれに對する答詩は、従來のほとんどの研究では彼ら自身ごらみの生涯、ならびに王儲の交流を考察する資料、あるいは單純に二人の友情を示すものとして扱われるのみだった。しかし、唐代における園林とそこにおける詩人の交流や詩作という視点からいえば、この王維と儲光義の唱和は、やや大袈裟に言えば文學史的に重要な作品であると思われる。つまり、王維と裴迪によるかの『輞川集』が園林において唱和された「連作組詩」の嚆矢であるのに對し、これら王儲の兩詩は實際には同遊が行われていない園林における唱和についての現存する最も早い作例なのである。

## 六 小結

本稿は「期不至」詩の展開について、先行研究のある六朝期から再検討を行うとともに、盛唐期の情況までを確認した。

その結果については次のようにまとめることができよう。

①東晋の謝混によつて成立した「期不至」詩はつづく謝靈運に引き継がれたものの、六朝期においては、この二首はいわば孤立的作例であった。

②初唐の宋之間、盛唐の孟浩然によつて「期不至」詩の詩題に特定の佛僧の名が見える詩歌が出現した。

③それに伴い、盛唐期には特定される相手が佛僧以外に拡大したことで（Ⅱ記名性の獲得）、「期不至」詩が定型化、一般化した。

④相手の特定化に伴い、さらに「期不至」詩の答詩が登場した。

⑤「期不至」詩は當初より、園林を中心とした景勝地・遊覽地と深い関係を有する。

最後に、なぜ盛唐期に「期不至」詩の詩題において相手を特定するようになったのかという問題について検討してみたい。

その理由として、前述したように、相手の人物の名を記した詩を作ること、友情や思慕など相手への思いを示そうとしたことが考えられる。さらに言えば、作詩人口が増加し、詩人間の交往がそれまでよりも増加するだけでなく、より重要となった盛唐期にはそのようにすることが通例ともなっていたのではないか。

そもそも、園林における詩人の交往そのものは遅くとも、晋代には既に行われていた。かの有名な石崇の金谷園や王羲之の蘭亭の例を挙げれば充分であろう。そして、そのように友人等とともに園林を觀賞し、詩を作ることが一種の典型となつたのではないか。『輞川集』もそれまでにはなかった「連作組詩」、特に唱和詩で構成されている点を除けば、表面上はその典型に則っているといつてよい。

したがって、謝混や謝靈運の詩はその典型を逆轉したおもしろさがあったわけである。ただ、おそらくは典型の強い影響力によつて、その手法が繼承されることはほとんどなかった。なぜならば、單に「期不至」詩が定型化・一般化した場合、それらはいずれも美しい風景とその場における相手の不在が題材となり、約束した相手が誰であろうがまさに千篇一律の内容に陥る可能性があったからである。

しかし、相手の名が特定されていれば、たとえ内容が極めて類似したものであったとしても、他の誰でもないある特定の人物を待ち續けることを意味するため、容易に、また効率的に個別性を手に入れることができる。一方、讀者の側、とりわけ約束したにもかかわらず現れなかつた人物にとつても、詩人の思いを充分に汲み取ることができた、少なくともそのように見える詩を受け取ることができたのである。詩人間の交往がより重要と

なつた盛唐期には、そのような個性がおそらく重視されたのではないだろうか。

もともと「期不至」詩は詩題に約束した相手の名を記すことで定型化した<sup>29</sup>が、一旦、それが完成すると、今度は定型化とそれに伴う一般化によって内容が同一・陳腐になることを回避し、個性を獲得する最も有効かつ簡単な方法として、それまで以上に相手の名が記されるようになった、と考えられる。かくして、詩題において記名することが「期不至」詩の典型的な様式としてより定着していったのだらう。

そうであるならば、園林などの景勝地が詩題で特定されていることも軌を一にしていると言えよう。特定の景勝地を明示することによって、その詩は単なる「友人」のいない風景ではなく、特定の場所の風景を描くこととなり、やはり個性を獲得できるからである。そして、この園林などの景勝地で約束した相手を待つということ自体は『文選』所收の謝混や謝靈運の作品の手法でもあり、盛唐期の詩人にとっても好都合であつたのではなからうか。

このようにして個性を得た「期不至」詩には、それゆえに、必然的に返答の詩も生まれることとなつた。現存するその最も早い例こそ、おそらく園林を備える自らの邸宅で作つた王維「待儲光羲不至」詩と儲光羲の答詩なのである。そして、この二首の詩は公務などによって同遊することが叶わない場合においても、「期不至」詩（實景）とその唱和（想像）という形で、詩を介した園林の交遊を保証できる方法を提示している。園林での詩人の交流と詩歌創作の關係の變遷を考えた場合、この王維の詩は王維と裴迪の唱和からなる『輞川集』とともに劃期的な作品であると言えよう。つまり、いずれもそれまでの手法を繼承しつつも、新たな方法を示しているのである。

そして、盛唐に定型化・一般化した「期不至」詩はその後の中唐以降にも多く作られ、儲詩のような唱和の作品も増加していく。文學集團の成熟や次韻詩の整備など、むしろ詩作の環境は唱和を求める方向に推移しており、その結果、そもそも約束とは無關係の詩人等による唱和詩も中晩唐には生み出されていったのである。

## 第一章第二節注

(1) 吳汝煜主編『唐五代人交往詩索引』（上海古籍出版社、一九九三年五月第一版）。

(2) たとえば、李浩『唐代園林別業考録』（上海古籍出版社、二〇〇五年一〇月第一版）

「前言」六頁は「園林別業爲士夫文人的交遊酬唱提供了一個重要的空間」と端的に記す。

(3) ①「謝混と「遊西池」詩―東晉文學研究簡記(三)―」(櫻美林大學『櫻美林大學中國文學論叢』第八號、一九八二年三月)二八―五五頁、および②「尋隱者不遇」詩の生成について」(小尾博士古稀記念事業會『小尾博士古稀記念中國學論集』(汲古書院、一九八三年一〇月發行)三六五―三八七頁)。

(4) 本章では、『文選』の引用は唐・李善注『文選』(上海古籍出版社排印本、一九八六年六月第一版)による。

(5) 前掲注(3) ①論文四七頁。

(6) 前掲注(3) ①論文四九頁。ただし、唐代まで用例を確認しても「約不至」という詩題を見出すことはできない。

(7) 前掲注(3) ②論文三七二・三七三頁。

(8) 李善注は、謝靈運「遊名山志」の「始寧又北轉一汀七里、直指舍下園南門樓。自南樓百許步、對橫山」を引く。

(9) 『玉臺新詠』の引用は清・吳兆宜注、程琰刪補『玉臺新詠箋注』(中華書局排印本、一九八五年六月第一版)による。

(10) 前掲注(3) ②論文は、「送不及」など「宋から齊・梁へと、逆説的な命題がいろいろ創出された」(三七八頁)と指摘する。しかし、それにもかかわらず、原点であるはずの「期不至」詩について、その後の六朝期にほとんど作例がない點は興味深い。

(11) 姚翻詩には「一作徐悱妻」という校注があり、それにしたがえば、女性自身による閨怨的作品となる。

(12) 梁・鍾嶸『詩品』は謝靈運を上品、謝混を中品に置くだけでなく、二詩とも『文選』に収録されており、六朝期の詩人が知らなかったとは考えにくい。そのようななかで、「期不至」詩が繼承されなかったのは、偶然ではなく、意圖的なものであったと推測される。

(13) 『唐』は『全唐詩』(中華書局排印本、一九六〇年四月第一版)を指す。

(14) 陶敏・易淑瓊校注『沈佺期宋之間集校注』(中華書局、二〇〇一年一月第一版)「宋之間集校注」卷三の當該詩注解(一)では「越州僧」とする。

(15) 佛教、特に『感無量壽經』のいわゆる日想觀と中國文學における夕陽・落日の關係については、小川環樹「詩における比喻―工拙と雅俗―」(『小川環樹著作集 第三卷』(筑摩書房、一九九七年三月一刷)、初出は一九五五年)一四九・一五〇頁、および同「落日の觀照―都留春雄『王維』への跋」(『小川環樹著作集 第二卷』(筑摩書房、一

九九七年二月一刷)、初出は一九五八年)三四一―三四三頁に言及がある。

- (16) 宋之間には、他に「使往天兵軍約與陳子昂新鄉爲期及還而不相遇」詩(『唐』卷五十二)があり、前掲注(14)「宋之間集校注」は陳子昂「征東至淇門答宋十一參軍之間」(『唐』卷八十三)をその答詩とする。上記の詩は豫め約束をしたにもかかわらず會えなかった點は「期不至」詩に類似しているものの、宋詩の末句に「知君心許國、不是愛封侯」とあるように、宋之間は新郷(現在の河南省)到着時には陳之昂不在の理由を知っており、彼を待っていたわけではない。また、陳詩の第二句に「將子涉清淇」とあり、この時、宋之間と陳子昂はともに淇門に行こうとしたと考えられる。したがって、謝混等の作品とは様相を異にすると見えよう。

- (17) 前掲注(3)①論文四九頁は「約束したけれど來なかつたことを歎くより、來ない友を待つ間の清興を詠うのに主眼がある、という詩になっているのである。……結果的には、その境地を最も効果的に詠うために、水邊で來ぬ友を待つ、舞臺装置を考え出したことになる」と指摘する。

- (18) 金牛江・金向銀『謝靈運山居賦詩文考釋』(中國文史出版社、二〇〇九年三月第一版)一六九頁は「未點何人、但必有特定對象、一般認爲從弟謝惠連」と述べるが、実際には謝惠連と斷定する根據は乏しい。森野繁夫譯注『謝康樂詩集 卷上』(白帝社、一九九三年九月初版)二九八頁は「約束を待ちわびる梯子を詠ったものであるが、それが實際のことかどうか、よくわからない感じもする。或は「賞心」の人を待ち續ける心境を詠じたかもしれない」と述べる。森野氏がそのような感じる理由は、當然、この謝靈運の詩が約束した相手が誰であるということを一切、明らかにしないことにある。

- (19) 參照：徐鵬『孟浩然詩集校注』(人民文學出版社、一九八九年八月第一版)卷一。

- (20) 參照：前掲注(19)卷二。

- (21) 陳鐵民『王維集校注』(中華書局、一九九七年八月第一版)卷四は、盧員外を虛象とする。

- (22) 陳鐵民・侯忠義『岑參集校注』(上海古籍出版社、二〇〇四年九月修訂第一版)卷三は、嚴中丞を嚴武とする。

- (23) この詩は、杜甫がもともと迎えを待ったのち、崔評事のもとにいくことを約束したという、今までにない複雑な作品である。このような變相の登場も「期不至」詩の定型化・一般化によるものと考えられる。なお、杜甫には「渝州候嚴六侍御不到先下峽」詩があるが、この詩は嚴侍御とともに長江を下ろうとしたことを詠ったもので、詩が

作られた渝州が目的地ではない點で前掲(16)の宋之間・陳子昂の情況に類似する。

(24) 李白の「春日獨坐寄鄭明府」(『唐』卷百七十二)は、詩題には「期不至」とは記さないものの、尾聯に「情人道來意不來、何人共醉新豐酒」とあり、「期不至」詩に連なる作品の一つとみることも可能かもしれない。

(25) この詩および儲光羲の答詩の繫年については、芳村弘道『唐代の詩人と文獻研究』(中國藝文研究會發行・朋友書店販賣、二〇〇七年六月發行)「儲光羲の田園詩について」(初出は一九八四年)六八頁注②の考證を參照。問題は、この時、王維が洛陽にであったか否かであるが、陳鐵民『王維論稿』(中華書局、二〇〇六年一月第一版)「王維年譜」(初出は一九八二年)八頁・張清華『王維年譜』(學林出版社、一九八八年九月第一版)四三頁のいずれも、王維が洛陽もしくは長安に滞在したことを考證している。

(26) すでに入谷仙介『王維研究』(創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年)三七六頁に言及がある。

(27) 王維「同盧拾遺韋給事東山別業二十韻給事首春休沐維已陪遊及乎是行亦預聞命會無車馬不果斯諾」詩(卷二)は、韋濟(もしくは弟の韋恆)における東山別業の詩會に約束していたものの、車馬が整わなかったために参加できず、そこで列席した盧拾遺の詩に唱和した作品である。いわば王維と儲光羲の唱和の關係とは逆轉した形となっている。この詩では、(以前に訪れたことのある)東山別業の美しさを想像して述べた後、同遊できない自らの情況を「蹇步守窮巷、高駕難攀援」と對比的に表現する。

(28) たとえば、陳貽焮『杜甫評傳』(北京大學出版社、二〇〇三年七月第一版。初出は一九八八年)下冊九七〇頁は「唐詩中寫待人不至失望心情的佳作」の例として、王維詩を擧げる。また、賴賢傳「王維詩思想性和藝術美初探」(嘉應學院『嘉應大學學報』一九九八年五期)六三頁が「這是一首友誼的頌歌、友靖之厚、感人至深」という印象批評を述べる。

(29) この時期、他の主題の詩でも詩題に記名する情況が増加していた。松原朗『中國離別詩の成立』(研文出版、二〇〇三年六月第一版)「何遜と六朝離別詩の歸着―六朝期における離別詩の形成(下)―」(初出は一九九二年)一三八頁注(22)は、唐代、離別詩について、「詩題次元においても例えば、∴「何處で」「誰が」「何故に」「何處へ赴く」という離別の事件を取り巻く情況が、努めて具體的に表示されている」と指摘する。

## 第二章 輞川莊と詩

### 第一節 王維の輞川諸詠における田園の風景

#### 一 問題の所在

王維は、とりわけ「自然詩」において、高い評価を従来受けてきた。そして、その彼の自然詩の由來が、南朝宋の謝靈運を起源とする山水詩とともに、東晉の陶淵明にはじまる田園詩にあることも、多くの人々によって、既に指摘されている。<sup>(1)</sup>しかし、田園の風景が、いわゆる「田園詩」に分類される作品のほか―たとえば、羈旅詩や贈答詩とされる作品など―にも、しばしば描寫されることは、王維の詩歌に限らず、中國古典詩に廣く見られる現象である。したがって、中國古典詩における田園風景の描寫を考察する場合、「田園」を「題材」<sup>(2)</sup>とする作品は対象とすべきであろう。つまり、いわゆる「田園詩」のように、田園が「主題」と關わる作品のみばかりでなく、田園の風景を「素材」としている作品も考察する必要がある。そして、田園の風景を描寫する王維の詩歌のなかで、最も多くの作品が創られた場所が輞川である。本節ではこれら輞川において創作された作品における田園の風景について論じたい。

いうまでもなく、輞川の風景を王維は實際に目睹している。したがって、その地における作品にはそれを王維が認識し、言語化したものである<sup>(3)</sup>と言ってよい。それならば、これら輞川における作品の田園風景は、同じ輞川莊で詠じられた『輞川集』の風景を考えるにあたって、重要な比較材料となり得るであろう。

#### 二 輞川諸詠における田園風景

輞川莊は、王維の自適の場であるとともに、おそらくは經濟的基盤ともなっていた。<sup>(4)</sup>これこそ、彼の詩歌にしばしば描寫される別業のなかの田園である。

ところで、本節は、既に述べたように、王維の詩歌に見える輞川の田園風景について論じるが、單に「田園風景」といつても、やや漠然としている。そこで、

- ・ 生産・農業活動に關わる行爲の描寫
- ・ その活動の場として存在する村落・集落の描寫

を「田園風景」の描寫と定義して、論を進めたい。

王維の輞川における作品のなかで、この定義のいずれかを満たす作品を以下に示す。

A 酬諸公見過 諸公の過ぎらるに酬ゆ（卷一）

挿内註、平岡  
（題下注）

四言、時官出、在輞川莊。

嗟余未喪	嗟あ余は未だ喪せず
哀此孤生	此の孤生を哀しむ
屏居藍田	藍田に屏居し
薄地躬畊	薄地 躬畊す
歲晏輸稅	歲晏れて 稅を輸し
以奉粢盛	以て粢盛を奉ず
晨往東阜	晨に東阜に往けば
草露未晞	草露 未だ晞かず
暮看煙火	暮れに煙火を見れば
負擔來歸	負擔して來歸す
我聞有客	我 客有るを聞く
足掃荊扉	荊扉を足掃す
簞食伊何	簞食 伊れ何ぞ
副瓜抓棗	瓜を副き 棗を抓く
仰廁羣賢	羣賢に仰ぎ廁るは
皤然一老	皤然たる一老
媿無莞簞	媿づらくは莞簞無くして
班荊席藁	荊を班き藁を席くを
汎汎登陂	汎汎として陂に登り
折彼荷花	彼の荷花を折る
淨觀素鮪	素鮪を淨觀し
俯映白沙	白沙を俯映す
山鳥羣飛	山鳥 羣飛し
日陰輕霞	日は輕霞に陰る
登車上馬	車に登り 馬に上り



倏忽雨散 倏忽として 雨散ず  
雀噪荒村 雀は荒村に噪ぎ  
鷄鳴空館 鷄は空館に鳴く  
還復幽獨 還復た幽獨にして  
重歎累歎 歎きを重ね歎きを累ぬ

B 贈劉藍田 劉藍田に贈る（卷二）  
籬中犬迎吠 籬中 犬 迎吠し  
出屋候荊扉 屋を出でて 荊扉に候つ  
歲晏輪井稅 歲晏れて 井稅を輪し  
山村人夜歸 山村 人 夜に歸る  
晚田始家食 晚田 始めて家食し  
餘布成我衣 餘布もて 我が衣を成す  
詎肯無公事 詎ぞ肯て 公事無からん  
煩君問是非 君を煩はして 是非を問ふ

C 酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作  
虞部蘇員外の藍田別業に過ぎるも留まらざるの作に酬ゆ（卷七）  
貧居依谷口 貧居 谷口に依り  
喬木帶荒村 喬木 荒村に帶す  
石路枉迴駕 石路 枉げて駕を迴らすに  
山家誰候門 山家 誰か門に候たん  
漁舟膠凍浦 漁舟 凍浦に膠し  
獵火燒寒原 獵火 寒原を燒く  
惟有白雲外 惟だ有り 白雲の外に  
疎鐘聞夜猿 疎鐘と夜猿を聞くと

D 輞川閒居贈裴秀才迪 輞川閒居、裴秀才迪に贈る（卷七）  
寒山轉蒼翠 寒山 轉た蒼翠  
秋水日潺湲 秋水 日び潺湲

倚杖柴門外 杖に倚る 柴門の外  
臨風聽暮蟬 風に臨んで 暮蟬を聽く  
渡頭餘落日 渡頭 落日 餘し  
墟里上孤烟 墟里 孤烟 上る  
復值接輿醉 復た接輿の醉ふに値ひ  
狂歌五柳前 狂歌す 五柳の前

E 輞川別業 (卷十)

不到東山向一年 東山に到らざること 一年に向なんとす  
歸來纔及種春田 歸來して纔かに及ぶ 春田に種うるに  
雨中草色綠堪染 雨中の草色 綠 染むるに堪へ  
水上桃花紅欲然 水上の桃花 紅 然ゆんと欲す  
優婁比丘經論學 優婁比丘 經論の學  
傴僂丈人鄉里賢 傴僂丈人 鄉里の賢  
披衣倒屣且相見 衣を披き屣を倒しまにして 且つ相ひ見  
相歡語笑衡門前 相ひ歡び語笑す 衡門の前

F 田園樂七首 (卷十四)

出入千門萬戶 出入す 千門萬戶  
經過北里南鄰 經過す 北里南鄰  
蹀躞鳴珂有底 蹀躞として珂を鳴らすは底か有らん  
崆峒散髮何人 崆峒として髮を散らすは何人ぞ  
再見封侯萬戶 再び見えて 封じらる 侯萬戶  
立談賜壁一雙 立ち談じて賜る 壁一雙  
詎勝耦耕南畝 詎ぞ勝らんや 南畝に耦耕するに  
何如高臥東牕 何ぞ如かんや 東牕に高臥するに

(其一)

採菱渡頭風急 菱を採るの渡頭 風急にして  
策杖村西日斜 杖を策くの村西 日斜めなり

(其二)

杏樹壇邊漁父  
桃花源裏人家

杏樹壇邊 漁父あり  
桃花源裏 人家あり

(其三)

萋萋芳草春綠  
落落長松夏寒  
牛羊自歸村巷  
童稚不識衣冠

萋萋たる芳草 春綠にして  
落落たる長松 夏寒し  
牛羊 自から村巷に歸り  
童稚 衣冠を識らず

(其四)

山下孤烟遠村  
天邊獨樹高原  
一瓢顏回陋巷  
五柳先生對門

山下の孤烟は遠村  
天邊の獨樹は高原  
一瓢の顏回は陋巷  
五柳の先生は對門

(其五)

桃紅復含宿雨  
柳綠更帶春烟  
花落家僮未掃  
鶯啼山客猶眠

桃紅にして 復た宿雨を含み  
柳綠にして 更に春烟を帶ぶ  
花落つるも 家僮 未だ掃はず  
鶯啼くも 山客 猶ほ眠る

(其六)

酌酒會臨泉水  
抱琴好倚長松  
南園露葵朝折  
東谷黃梁夜春

酒を酌みて 會たま泉水に臨み  
琴を抱きて 好しく長松に倚るべし  
南園の露葵 朝に折り  
東谷の黃梁 夜に春く

(其七)

ところで、これらの詩に共通する特徴として、隱棲や歸隱に關係する用語や人物が詩中に見られることをあげることができる。以下、二首を具體的に見ていきたい。

G 輞川閒居 (卷七)

一從歸白社 一たび白社に歸るより  
不復到青門 復た青門に到らず

時倚簷前樹	時に倚る	簷前の樹
遠看原上村	遠く見る	原上の村
青菰臨水映	青菰	水に臨みて映じ
白鳥向山翻	白鳥	山に向ひて翻る
寂寞於陵子	寂寞たる	於陵子
桔槔方灌園	桔槔もて	方に園に灌がん

この詩は、第四句と第八句に本論文における「田園風景」の描寫の定義を満たす表現が見られる。ところで、この詩の第一句に見える「白社」は、『晉書』卷九十四「隱逸傳」所載の董京の傳にある語に基づく。王維は「市隱」たる董京の歸隱の場所である「白社」の名をこの詩に用いることにより、詩人自らのいる輞川莊が隱棲の場所であることを明確にしている。また、第七句の「於陵子」は、『孟子』「滕文公下」に見える齊の隱者、陳仲子を指す。

H 積雨輞川莊作 積雨輞川莊の作（卷十）

積雨空林烟火遲	積雨	空林	烟火遅く
蒸藜炊黍餉東菑	藜を蒸し黍を炊ぎて	東菑に餉る	
漠漠水田飛白鷺	漠漠たる水田に	白鷺飛び	
陰陰夏木嘯黃鸝	陰陰たる夏木に	黃鸝嘯る	
山中習靜觀朝槿	山中の習靜	朝槿を觀	
松下清齋折露葵	松下の清齋	露葵を折る	
野老與人爭席罷	野老	人と席を爭ひ罷め	
海鷗何事更相疑	海鷗	何事か更に相ひ疑はん	

この詩も第二句と第三句に「田園風景」の描寫が見られる。そして、この詩の第七句の「爭席」と第八句の「海鷗」はそれぞれ『列子』「黃帝篇」に基づく語である。これらの語は老莊思想・道家思想のもとに生まれたものであり、隱逸と密接に關わる語であると言えよう。

そのほかの詩にも、隱棲に關わる語として、

- A 屏居、荊扉
- B 荊扉
- C 貧居
- E 東山（『晉書』「謝安傳」）、衡門
- F 桃花源（陶淵明「桃花源記」）

などが見られ、また隱棲や歸隱と關わる人物、または彼等の行爲については、

- D 接輿（『論語』「微子」）、五柳（陶淵明「五柳先生傳」）
- F 崆峒散髮（『莊子』「在宥」）、耦耕南畝（『論語』「微子」）、高臥東牕（陶淵明「與子儼等疏」）、漁父（『莊子』「漁父」）、顏回（『論語』「雍也」）、五柳先生

などがある。

ところで、これらの作品を検討していくと、その隱棲や歸隱が、王維にとって肯定的なものであったかどうかについては、それぞれの作品の間に大きな差違が認められる。たとえば、「嗟あ今は未だ喪せず、此の孤生を哀しむ……還復た幽獨にして、歎きを重ね歎きを累ぬ」とある「酬諸公見過」詩と、「衣を披き屣を倒しにして且く相ひ見、相い歡び語笑す 衡門の前」という「輞川別業」詩とを比較した時、この兩詩の隱棲、ひいては作品の性格が同一のものではないことは明白である。しかし、このような差違が存在するにも關わらず、輞川という同一の場所で詠まれたこれらの作品は、いずれも「出仕」とは異なる方向を示していること、すなわち隱棲や歸隱への志向を持った作品であることは認めてよかるう。よって、これらの作品に描寫された輞川の田園風景は王維にとっての隱棲や歸隱の場所を示していることになる。

ところで、宋之問の舊所有であった輞川莊を王維が入手した時期について、多くの先行諸説が開元末年から天寶年間の初期としている。<sup>(7)</sup>この時期以降について、王維は、天寶元年（七四二年）に左補闕に就任した<sup>(8)</sup>後、母の崔氏の服喪の時期と安史の亂の混亂期を除けば中央官僚でありつづけた。すなわち、遅くとも天寶初年より後の王維は、朝廷の官僚でありながら、隱棲、歸隱を志向して、折々に輞川莊に滞在したのである。そして、中央官僚として長安の朝廷に身におく自身の存在そのものがいわば裏地となることによつて、王維にとつて、その隱棲や歸隱への志向はより明瞭なものとなつたと考えられる。<sup>(9)</sup>そうであ

るならば、この時期の作品中に描寫された田園風景は、單に輞川が俗世間と離れているという程度の、漠然とした隱棲や歸隱の場所であることを示しているのではない。これらの作品の田園風景は、輞川の地を官僚の世界、すなわち出仕の場である長安という都市と明確に隔絶させ、それによって、輞川を長安よりも、精神的充足を得る場、あるいは高い價値を持つ場であることを保障する機能を持っていると言える。<sup>(10)</sup>

これらの作品の詩型（句型）は興味深い事實を示しているのではなからうか。これらの作品には四言詩、五言詩、六言詩、七言詩があり、王維における齊言の句型を網羅している。これらの句型に存在するリズムが韻律形式自體としてそれぞれの表現感覺を具えていることは既に指摘されている。<sup>(11)</sup>しかし、輞川の「田園風景」を表現する詩において多様な句型が用いられているということは、各句型のそれぞれのリズムが持つ表現感覺―たとえば、五言の典雅・重厚、七言の通俗・輕快といったような感覺の影響と「田園風景」の表現およびその意味との間に直接の關係がないことを示している。これは、各句型におけるリズムの表現感覺の存在を否定したり、微弱なものとするものではない。むしろ、表現感覺自體は別に確固として存在し、一方で輞川の「田園風景」の表現とその意味は、それぞれの句型の持つ表現感覺とは別の次元のものであったということではなからうか。そして、輞川の田園風景の表現とその意味が表現感覺の違いに直接的には左右されないということこそ、その風景の描寫が輞川莊を都市（長安）とは隔絶された精神的充足を得る場であることを強く保障しているという本論文の主張を傍證しよう。つまり、王維は、各句型の表現感覺の違い―場合によっては、前述のように、それは作品の性格の相違にまで影響する―を超えてでも、輞川諸詠に田園風景を描くことで輞川莊を都市（長安）とはつきりと隔絶しようとしたと考えられる。

### 三 類似の作品について

次に掲げる作品は、前節で検討した作品に類似している。つまり、これらの作品にも、前節で規定した。「田園風景」が描寫され、また隱棲や歸隱に關する用語や人物が確認される（以下、傍點部は隱棲や歸隱に關わる部分を指す）。

#### I 贈裴十迪 裴十迪に贈る（卷二）

風景日夕佳 風景 日夕に佳く

與君賦新詩

君と與に 新詩を賦す

澹然望遠空

澹然として 遠空を望み

如意方支頤

如意もて 方に頤を支へん

春風動百草

春風 百草を動かし

蘭蕙生我籬

蘭蕙 我が籬に生ず

曖曖日暖閨

曖曖として 日は閨を暖め

田家來致詞

田家 來りて詞を致す

欣欣春還阜

欣欣として 春 阜に還り

澹澹水生陂

澹澹として 水 陂に生ず

桃李雖未開

桃李 未だ開かずと雖も

萸萸滿芳枝

萸萸 芳枝に滿つ

請君理還策

君に請ふ 還策を理めよと

敢告將農時

敢て告ぐるに農時を將てせん

K 山居卽事

山居卽事（卷七）

寂寞掩柴扉

寂寞として 柴扉を掩ひ

蒼茫對落暉

蒼茫として 落暉に對す

鶴巢松樹徧

鶴は松樹に巢ひて徧く

人訪葦門稀

人は葦門を訪ふこと稀なり

嫩竹含新粉

嫩竹 新粉を含み

紅蓮落故衣

紅蓮 故衣に落つ

渡頭燈火起

渡頭 燈火起り

處處採菱歸

處處 菱を採りて歸る

J 春園卽事

春園卽事（卷七）

宿雨乘輕屐

宿雨 輕屐に乗じ

春寒著弊袍

春寒くして 弊袍を著る

開畦分白水

畦を開きて 白水分れ

閒柳發紅桃

柳に閒りて 紅桃發す

草際成棋局

草際に 棋局を成し

林端舉桔槔  
還持鹿皮几  
日暮隱蓬嵩  
林端に 桔槔を舉ぐ  
還りて持す 鹿皮の几  
日暮 蓬嵩に隠る

L 鄭果州相過 鄭果州の相ひ過ぎらる(卷七)

麗日照殘春 麗日 殘春に照り  
初晴草木新 初めて晴れて 草木新たなり  
牀前磨鏡客 牀前 鏡を磨くの客  
林裏灌園人 林裏 園を灌ぐの人  
五馬驚窮巷 五馬 窮巷を驚かし  
雙童逐老身 雙童 老身を逐ふ  
中厨辦麤飯 中厨 麤飯を辦じ  
當怨阮家貧 當に阮家の貧を怨るさるべし

M 田家 田家(卷十一)

舊穀行將盡 舊穀 行きゆきて將に盡きんとし  
良苗未可希 良苗 未だ希むべからず  
老年方愛粥 老年 方に粥を愛し  
卒歲且無衣 卒歲 且く衣無し  
雀乳青苔井 雀は乳す 青苔の井  
雞鳴白板扉 雞は鳴く 白板の扉  
柴車駕羸豸 柴車 羸豸に駕せられ  
草屨牧豪豸 草屨 豪豸を牧す  
多雨紅榴拆 多雨 紅榴拆き  
新秋綠芋肥 新秋 綠芋肥ゆ  
餉田桑下憩 田に餉りて 桑下に憩ひ  
旁舍草中歸 舍に旁りて 草中に歸る  
住處名愚谷 住む處 愚谷と名づく  
何煩問是非 何ぞ是非を問ふを煩せん



これらの詩が創作された年代や場所を厳密に考證することは、現存の資料からでは困難である。しかし、これらの作品に描寫された田園風景に上述の作品のそれと同様の傾向が確認される。つまり、これらの詩における田園が王維にとつての隱棲や歸隱の場所であることを示していると言えよう。したがって、これらの作品は、王維が隱棲した場所、―具體的には洪水・嵩山・終南山等<sup>(13)</sup>の地、そして、あるいは輞川莊で創作された可能性がある。このなかで、王維の隱棲や歸隱への志向が最も高まったのは、一方で中央において官僚として生きていた時期ではなからうか。洪水・嵩山に隱棲した時期は、王維は中央の官職には就いておらず、また期間としても短い。そうであるならば、これらの詩は天寶年間以降、輞川莊で制作された可能性が最も高いのではなからうか。

#### 四 小結

本節では、輞川莊における作品に見える田園風景とその意味について検討してきた。その結果は以下のようにまとめられよう。

- ① これらの作品には隱棲や歸隱に關わる語や人物が確認される。
- ② したがって、輞川諸詠の田園風景は、隱棲、歸隱の場所の風景を示している。
- ③ それだけでなく、田園風景を描くことによつて、この輞川を出仕の場である都市としての長安と明確に隔絶させ、それによつて、その地が精神的充足を得る場であることを保障しようとしている。
- ④ 王維のいくつかの詩は、そこにおける田園風景の描寫の特徴から、輞川莊で制作された作品である可能性が高い。

ところで、入谷氏はこれら輞川諸詠と『輞川集』の田園風景の描寫の有無を指摘している<sup>(14)</sup>。しかし、まずは③にまとめたとように、これらの作品に田園風景を描くことで、王維は出仕の場である長安と輞川莊とを明確に隔絶しようとしたことは確認しておく必要がある。なぜならば、それによつて、『輞川集』の風景の意味もより明確にできると思われるからである。

#### 第二章第一節注

(1) 参照：入谷仙介『王維研究』（創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年）五二八頁。葛曉音『山水田園詩派研究』（遼寧大學出版社、一九九三年一月第一版）二五一頁。

(2) 「題材」「主題」「素材」という語の概念規定については、松浦友久『李白研究―抒情の構造』（三省堂、一九七六年三月第一版）「抒情の構造的性について」二六頁を参照。

(3) この點に關連して、王維の「公的送別詩」は、沿路の情景を「文獻に立脚する類型的表現を選択した」ことが指摘されている。松原朗『中國離別詩の成立』（研文出版、二〇〇三年六月第一版）「盛唐期の臺閣詩人と送別詩の確立―張説から王維へ―」（初出は一九九五年）二〇八頁を参照。

(4) 輞川莊が經濟的基盤であったことを證明するものとして、王維の詩のなかに税を納めることに言及した箇所がある。後文A、Bを参照。

(5) 宋・蔡正孫『詩林廣記』（中華書局排印本、一九八二年八月第一版）前集卷五には、「田園樂」其六を「輞川六言」としており、輞川別業における作品である可能性がある。

(6) 「爭席」の故事は、『莊子』「寓言」にも見える。

(7) 早い時期に比定する説に、小林太市郎『王維の生涯と藝術（小林太市郎著作集4）』（淡交社、一九七四年四月發行。初出は一九四四年）三一頁の開元十四年（七二六年）、道上克哉「王維の輞川莊について」（中國藝文研究會『學林』第十二號、一九八九年三月）一三頁の流寓期などがある。しかし、輞川別業の入手時期（この點については本論文序章第二節を参照）にかかわらず、筆者はこれらの作品は王維の左補闕就任以降であると考えている。なお、輞川莊の入手時期を早める根據である「酬諸公見過」詩が妻の死の服喪中に創作されたという説についても、著者にはわかには首肯しかねる。假に従うと、母の存世中に、二句目の「孤生」の語を用いることになり、王維とその母の關係からみて違和感を覚えるためである。

(8) 参照：陳鐵民『王維論考』（人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版）「王維年譜」（初出は一九八二年）二〇頁および張清華『王維年譜』（學林出版社、一九八八年九月第一版）八八―九〇頁。

(9) F「田園樂」其一、其二、G「輞川閑居」の首聯等を参照。

(10) この點について、道上克哉氏は「王維詩における自然情景句の一側面」（中國藝文研究會『學林』第三號、一九八四年一月）七八頁で「これらの詩における自然・田園は、

俗界と對置してとらえることができると述べている。本稿では、それを更に進めて、  
輞川別業における作品の風景が、出仕の場である長安との世界の隔絶を意味すると主  
張する。

(11) 松浦友久『中國詩歌原論』(大修館書店、一九九六年三月第三版)「中國古典詩のリ  
ズム―リズムの根源性と詩型の變遷―」(初出は一九八一年)一七〇―一七二頁を参照。

(12) 『列仙傳』(叢書集成初編、商務印書館、一九三六年二月第一版)卷下「負局先生」  
には「負局先生者、不知何許人也。…常負磨鏡局、徇吳市中、銜磨鏡一錢、因磨之、  
…吳人乃知其眞人也」とある。

(13) 終南山隱棲に關して、「終南別業」の位置について議論がある(本論文第一章第一節  
を参照)が、王維の「終南別業」の詩には田園風景が見られないので、本節の議論と  
は直接の關係を持たない。

(14) 前掲注(8) 陳論文八・九頁および張著書四五―四七頁は、「偶然作」(卷六)其三  
を根據として微官に就いたとする。

(15) 入谷氏はその理由を『輞川集』の中に…もつとも基本的な人間的現實である、農  
業生産労働が入りこんではならなかった」ことに求めている。前掲注(1) 入谷著書  
六二五頁を参照。

## 第二節 『輞川集』における王維の風景認識

### ― “遊止” の典故を手がかりに ―

#### 一 問題の所在

王維は、宋之間がかつて所有していた藍田別業を入手し、自らの別荘とした。兩『唐書』<sup>(1)</sup>にも記載されるこの輞川莊における一連の詩文が、質量ともに王維の文學の中核とされている。なかでも、親友裴迪の唱和詩を附した『輞川集』(卷十三)は、現在、多くの研究や鑑賞において王維の“代表作”として論じられている。

しかし、その『輞川集』に表現されている風景が、輞川莊の現實の風景そのものであるかどうかは、実際にはよくわからない。また、現實の風景そのものでなければならぬ必然性もなからう。ただ、そこに表現されている風景が、現實の輞川莊において、王維が認識し、「詩」という手法によって言語化した風景であることにはちがいない。そして、その風景認識が王維の思考や價值観に起因していることも改めていうまでもない。

『輞川集』における王維の風景認識を考察するにあたり、各作品の詩題ともなっている輞川莊の景勝、すなわち「序」<sup>(2)</sup>にいう“遊止”に着目することが有効な方法となり得るのではないかと考えられる。なぜならば、この“遊止”は、それぞれの名稱がほとんど『輞川集』だけに見えるものであり、いわば『輞川集』独自の存在といえるからである。<sup>(3)</sup>

#### 二 『輞川集』の“遊止”

『輞川集』は、二十箇所の“遊止”とよばれる景勝を、王維と裴迪が五言絶句によって一首づつ詠じた作品である。そして、これらの“遊止”は、いずれも王維の命名によると考えられる。その名稱の典故について、従来、幾つかは個別に指摘されているものの、系統的な研究ははまだ十分には行われていないように思われる。しかし、この二十箇所の“遊止”は一體のものとして理解してはじめて風景認識など『輞川集』全體の問題を考察することができるのではないか。したがって、『輞川集』における王維の風景認識を考えるために、本論文は“遊止”相互の關係にもふれながら、それぞれの“遊止”について、特にその名稱の由來となった典故を具體的に検討したい。

a、孟城坳

新家孟城口 新たに家す 孟城の口  
古木餘衰柳 古木 衰柳を餘す  
來者復爲誰 來たる者は復た誰とか爲さん  
空悲昔人有 空しく悲しまん 昔人の有るを

(王維)

結廬古城下 廬を結ぶ 古城の下  
時登古城上 時に登る 古城の上  
古城非疇昔 古城 疇昔に非ず  
今人自來往 今人 自から來往す

(裴迪)

裴迪詩に見える「古城」の語から、この「孟城」は少なくとも王維が輞川莊を手に入れる以前に建造された物であろう。そこで、この「孟城」を『元和郡縣圖志』卷一「關内道」の「思郷城」とする説が近年提出されている。その「思郷城」の記述には、

思郷城、在(藍田) 縣東南三十三里。宋武帝征關中、築城於此。南人思郷、因以爲名。<sup>(5)</sup>

(思郷城は(藍田)縣の東南三十三里に在り。宋の武帝、關中を征め、城を此に築く。南人、郷を思ひ、因りて以て名と爲す。)

とあり、後に南朝宋の武帝となる劉裕が關中へと北伐し、後秦を滅ぼした際に築いた城だという。つまり、ここに見える「南人」、すなわち南方の人間とは、劉裕に代表される東晉(南朝)側の人間を指す。そして、劉裕が曾祖父の代に長江を渡って以降、江南(晉陵郡丹徒縣(現在の江蘇省鎮江市の東南))に住んだように<sup>(6)</sup>、「南人」の「郷」は長江流域以南にあつたと考えられる。ここにいう「長江流域以南」とは、現在の湖北省・湖南省の長江中流から江蘇省・浙江省などの長江下流域及びそれ以南の地域を指し、歴史的には、おおよそ南朝の版圖に含まれる地域にあたる。

ところで、ここ輞川の地に彼ら「南人」が郷里の長江流域以南の地を思いおこすことができたのは、この輞川に類似した風景が展開していたためであろう。その具體的な風景と

して、たとえば王維「積雨輞川莊作」(卷十)の「漠漠たる水田に 白鷺 飛び、隱隱たる夏木に 黃鸝 轉る」に見える「水田」があげられる。一般に、水田は長江流域以南、少なくとも「秦嶺Ⅱ淮河綫」以南により多い風景であることは言うまでもない。その水田を經營し得ることから、輞川には水の豊かな風景が存在していた、と考えられる。乾燥地帯に屬する輞川にこのような風景が広がっていたからこそ、ここに至った南人が郷里を思いおこすことが可能であったのであろう。

ところで、『輞川集』の「孟城」が「思郷城」であるとすれば、かつてこの地に南人が居住した<sup>(8)</sup>こと、—より具體的には、「南人」がこの城を建築、所有し、故郷である長江流域以南の風景を思いおこしていたことを王維は意識していたと考えられる。それゆえに、「南人」ではない王維もまた同じように、この「孟城坳」の風景を水に恵まれた長江流域以南のものとして認識していたのではなからうか。

b、華子岡

飛鳥去不窮 飛鳥 去りて窮まらず

連山復秋色 連山 復た秋色

上下華子岡 上下す 華子岡

惆悵情何極 惆悵 情何ぞ極まらん

(王維)

落日松風起 落日 松風起り

還家草露稀 家に還れば 草露稀なり

雲光侵履跡 雲光 履跡を侵し

山翠拂人衣 山翠 人衣を拂ふ

(裴迪)

この「遊止」は、既に指摘<sup>(9)</sup>されているように、謝靈運の「入華子岡、是麻源第三谷」(華子岡に入る、是れ麻源の第三谷なり)詩(『文選』<sup>(10)</sup>卷二十六)を典故とした名稱である。ところで、謝靈運の詩には、

……

險逕無測度 險逕 測度する無く

天路非術阡 天路 術阡に非ず

遂登羣峯首 遂に群峯の首に登れば

邈若升雲烟 邈かなること 雲烟に升るがごとし

……

と、非常に險阻な山嶽が表現されている。一方、王維・裴迪の詩にはそのような山は表現されていない。したがって、「谷」という共通點(1)こそあるものの、王維は「華子岡」の詩において、その名稱の典故である謝靈運の詩の世界をそのまま再現したものではないと判断されよう。そして、おそらく「華子岡」という名稱をこの景勝に自ら與えたにもかかわらず、王維はこの地において謝靈運「入華子岡、是麻源第三谷」の詩の世界を、眼前の風景としては認識していなかったのではないか。

しかし、この「華子岡」という名稱の典故である「入華子岡、是麻源第三谷」という詩が王維の風景認識と全く關係していないということではない。そうであれば、そもそも「遊止」としてそのような名稱を與えなかったはずである。したがって、むしろ、王維にとつては典故となっている「華子岡」(現在の江西省)が長江流域以南にあるという事實そのものが重要だったのではなからうか。この推測がさほど當を失っていないとすれば、この謝靈運「入華子岡、是麻源第三谷」の詩題に見える「華子岡」を「遊止」の名稱とした意味は、その詩の世界の忠實な再現にあるのではなく、詩題による風景の想起にあると考えられよう。つまり、この「華子岡」を『輞川集』のなかの作品の一つとしたという事實は、謝靈運の詩題から想起される長江流域以南の風景を王維が認識し、それを『輞川集』という形で表現したことを示しているのではないだろうか。(2)

### c、文杏館

文杏裁爲梁 文杏 裁ちて梁と爲し

香茅結爲宇 香茅 結びて宇と爲す

不知棟裏雲 知らず 棟裏の雲の

去作人間雨 去りて人間の雨と作るを

(王維)

迢迢文杏館 迢迢たる文杏館

躋攀日已屢 躋攀すること 日に已に屢しばなり

南嶺與北湖 南嶺と北湖と

前看復迴顧　　前看し　復た迴顧す

(裴迪)

この「文杏館」なる「遊止」の名稱は、趙殿成の注に見える前漢・司馬相如「長門賦」  
『文選』卷十八)に

刻木蘭以爲榱兮、飾文杏以爲梁。

(木蘭を刻みて以て榱と爲し、文杏を飾りて以て梁と爲す。)

とあるのを典故としている。しかし、『輞川集』では、漢の武帝の寵愛を失った陳皇后の宮怨を解くという「長門賦」の内容それ自體は、全く等閑視されている。

「長門賦」に由来する「文杏」が用いられている理由は、その「長門賦」が司馬相如によつて著され、『文選』に收められているという事實だけに依據しているようである。すなわち、その事實によつて保障される古典性や典雅性を持った世界を築こうとしたため、王維は「文杏」の名を用い、「遊止」の名稱としておしか考えられない。一般的に、典故とは、古典に典據を持つ表現法であり、文人や詩人がそれを用いるということは、それが醸し出す世界や雰圍氣を自らの詩文に賦與することである。そして、「文杏館」という「遊止」も、「文杏」をその「遊止」の名稱の典故に用いること、言い換えれば『文選』に收められている賦、なかでも賦の大家として知られる司馬相如の作品をその名稱の由来とすることによつて、高い古典性・典雅性を持つ世界になっている。つまり、王維は、「文杏」という典故を用いることによつて、現實の風景のなかに古典的で、典雅な性質を持つ世界の風景を見いだし、さらにそれを詩によつて表現したのであろう。

それは王維詩の「文杏　裁ちて梁と爲し、香茅　結びて宇と爲す」に示されている。對句として「文杏」とともに見える「香茅」の語は、西晉・左思の「吳都賦」(『文選』卷五)を典故とする語である。つまり、『文選』所收の賦を典故とする「文杏」「香茅」という詩語によつて表現される「文杏館」において―現實にいかなる建造物があつたにせよ―、王維は古典性や典雅性を持った世界の風景を認識しようとしたのであろう。

d、斤竹嶺

檀欒映空曲　　檀欒　空曲に映じ

青翠漾漣漪　　青翠　漣漪に漾ふ



暗入商山路 暗に商山路に入れば  
樵人不可知 樵人すら知るべからず

(王維)

明流紆且直 明流 紆にして且つ直なり  
綠篠密復深 綠篠 密にして復た深し  
一逕通山路 一逕 山路に通じ  
行歌望舊岑 行歌して 舊岑を望む

(裴迪)

この「遊止」の名稱が謝靈運の「從斤竹澗越嶺溪行」(斤竹澗より嶺を越えて溪行す)詩  
『文選』卷二十二(一)を典故としていることも既に指摘されている。<sup>13)</sup> その詩には、

…  
逶迤傍隈隩 逶迤として隈隩に傍ひ  
蒼漣陟陁峴 蒼漣として陁峴を陟る  
過澗既厲急 澗を過ぎて 既に急を厲り  
登棧亦陵緬 棧を登りて 亦た緬を陵ゆ  
…

とあり、険しい山道を登る描寫が見られる。一方、『輞川集』の「斤竹嶺」詩にはそのような描寫がないのみならず、王維は「檀樂 空曲に映じ、青翠 漣漪に漾ふ」、裴迪は「明流 紆にして且つ直なり、綠篠 密にして復た深なり」と歌い、謝靈運の詩の本文には全く見られない竹を描く。このような竹の描寫が謝靈運詩の詩題の「斤竹澗」に由来することは明らかである。それにもかかわらず、王維と裴迪が謝靈運の詩に描かれている険阻な山行の描寫をせず、一方で詩題に字が用いられているだけの竹を描いている事實は、この「斤竹嶺」という「遊止」においても、王維は謝靈運の詩の世界の風景をそのままには認識していないことを示している。つまり、王維は謝靈運の詩の詩題から想起し、意識した「斤竹澗」の風景をこの詩において表現しているのではなからうか。そして「斤竹澗」が長江流域以南(「斤竹澗」は現在の浙江省にある)にあることから、王維はこの「斤竹嶺」という景勝において、長江流域以南の竹の生える風景を認識し、その風景を『輞川集』という形で表現したと考えられよう。

e、鹿柴

空山不見人 空山 人を見ず  
但聞人語響 但だ聞く 人語の響くを  
返景入深林 返景 深林に入り  
復照青苔上 復た照らす 青苔の上

(王維)

日夕見寒山 日夕 寒山を見  
便爲獨往客 便ち獨往の客と爲る  
不知松林事 知らず 松林の事  
但有麝麝跡 但だ有り 麝麝の跡

(裴迪)

この「鹿柴」は、諸説がほぼ一致して指摘するように、實態としては鹿を飼う場所であっただろう。なぜならば、裴迪の詩に「知らず 松林の事、但だ有り 麝麝の跡」と見え、鹿の存在が明らかだからである。しかし、この景勝において、王維は單に鹿を飼っている場所と考えていただけではなく、謝靈運の「山居賦」に基づいた風景を認識していたのではなからうか。「山居賦」<sup>(15)</sup>には、

……敬承聖誥、恭窺前經。山野昭曠、聚落羶腥。故大慈之弘誓、拯羣物之淪傾。豈寓地而空言、必有貨以善成。欽鹿野之華苑、羨靈鷲之名山。企堅固之貞林、希菴羅之芳園、雖絳容之緬邈、謂哀音之恆存。建招提於幽峯、冀振錫之息肩。庶鑑王之贈席、想香積之惠餐。事在微而思通、理匪絶而可温。……

(……) 敬んで聖誥を承け、恭しく前經を窺ふ。山野昭曠、聚落羶腥たり。故に大慈弘誓は、羣物の淪傾するを拯ふ。豈に地に寓して而して言を空しくし、必ず貨有りて以て善く成る。鹿野の華苑を欽ひ、靈鷲の名山を羨む。堅固の貞林を企ひ、菴羅の芳園を希ふ、絳容の緬邈なりと雖も、哀音の恆に存するを謂ふ。招提を幽峯に建て、振錫の息肩たるを冀ふ。鑑王之席を贈るを庶ひ、香積の餐を恵むを想ふ。事は微に在りて而して通ずるを思ひ、理は絶ゆるに匪ずして而して温むるべし。……)

とあり、謝靈運が「山野」において「鹿野の華苑を欽ひ、靈鷲の名山を羨」んでいたこと

が表現されている。つまり、この賦において「山野」と釋迦が四眞諦を説いた「鹿野苑」との間には明確な関係が存在している。そして、「鹿柴」という「遊止」もまた、輞川という「山谷」のなかの鹿を飼育している場所であり、「山居賦」に確認された関係が同様に存在しているのではないか。<sup>(16)</sup>「山居賦」が中國古典文學において「鹿野苑」に言及した最も早い、いわば源泉的作品であることも考慮すれば、この一致は單なる偶然によるものではなく、「鹿柴」が「山居賦」の影響を受けたことによるものと判断されよう。そうであるならば、「鹿柴」という景勝において、王維が認識した風景は「山居賦」をもとにした世界ではないだろうか。

では、「鹿柴」という「遊止」において、王維が認識した風景が「鹿野苑」そのものであった可能性はないのだろうか。このことを考える上で、佛教語の使われかたが注目される。「山居賦」には、「鹿野苑」、「靈鷲山」の他にも「堅固林」、「菴羅園」、「招提」、「振錫」、「鎧王」、「香積」など佛教語が直接用いられているのに對し、「鹿柴」の詩には、王維・裴迪とともにそのような佛教語は全く見られない。もちろん、佛教語の有無のみによって單純に結論することは困難であり、また王維の「鹿柴」の詩中にも「返景」や「青苔」といった間接的に佛教の世界、すくなくとも宗教的空間を暗示する語が見られる。<sup>(17)</sup>しかし、佛教の影響を顯著に示す標識の一つである佛教語を直接には用いていない以上、「鹿柴」の詩において佛典からの直接的な影響は多くはないのではないか。<sup>(18)</sup>少なくとも、この景勝に王維が直接的に認識した風景は、「鹿野苑」と「山野」とが結びついた謝靈運の「山居賦」の世界であったと考えられる。

それでは、その「山居賦」の風景とは、具體的にはいかなるものだっただろうか。謝靈運はこの山居を自らの別墅のあった「始寧」に營んでいる。既に述べたように、始寧の地は現在の浙江省にあり、長江流域以南の地であった。したがって、王維は「鹿野苑」を意識しつつも、やはりこの「鹿柴」においても謝靈運の始寧別墅を中心とした長江流域以南の風景をより強く認識していたと考えられる。

#### f、木蘭柴

秋山斂餘照	秋山	餘照を斂め
飛鳥逐前侶	飛鳥	前侶を逐ふ
彩翠時分明	彩翠	時に分明らか
夕嵐無處所	夕嵐	處所無し

(王維)

蒼蒼落日時　　蒼蒼たる落日の時  
鳥聲亂溪水　　鳥聲　溪水に亂る  
緣溪路轉深　　溪に緣りて　路轉た深し  
幽興何時已　　幽興　何れの時にか已まん

(裴迪)

「木蘭柴」は、「鹿柴」と同様に、木蘭を植えている場所、具體的には、木蘭を柵で圍った場所であると考えられる。

「木蘭柴」の風景を考えるに際しては、「楚」との關連が注目される。「木蘭」という語は中國古典文學史上、まず『楚辭』<sup>(20)</sup>に見える。

朝搴阨之木蘭兮　　朝に阨の木蘭を搴り  
夕攬洲之宿莽　　夕に洲の宿莽を攬る

(「離騷」)

朝飲木蘭之墜露兮　　朝に木蘭の墜露を飲み  
夕餐秋菊之落英　　夕に秋菊の落英を餐ふ

(同上)

桂櫂兮蘭枻　　桂櫂と蘭枻と  
斲冰兮積雪　　氷を斲り雪を積む

(王逸注) 枻、船旁板也。(枻は、船の旁板なり。)  
(「九歌　湘君」)

桂棟兮蘭橈　　桂棟と蘭橈と  
辛夷楣兮葯房　　辛夷の楣と葯房と

(王逸注) 以木蘭爲橈也。(木蘭を以て橈と爲すなり。)  
(「九歌　湘夫人」)

擣木蘭以矯蕙兮　　木蘭を擣いて以て蕙を矯ぜ  
繫申椒以爲糧　　申椒を繫げて以て糧と爲す

これらの『楚辭』の用例は、後世の詩文における「木蘭」の基本的な典故となっている。そのため、「木蘭柴」という名稱をつけるにあたって、王維も「楚」、特に『楚辭』を意識していたと考えられる。

また、王維詩「夕嵐處所無し」の「處所」は、趙殿成が注に引用するように、(朝雲と夕嵐という違いはあるもの)宋玉「高唐賦」(『文選』卷十九)に基づく。この「高唐賦」は楚王の遊賞の場所を舞臺とすることから、やはり「木蘭柴」という「遊止」において、王維は「楚」の風景を認識していたと考えてよからう。

ところで、「木蘭柴」という「遊止」は『輞川集』の他の「遊止」との密接な関わりが確認される。「遊止」相互の関係を検討することは、『輞川集』における風景認識を考える上で不可欠であると思われる。先に引用した『楚辭』「九歌 湘君」には、「木蘭」の柁によって、水に浮かぶことが述べられている。そして、この『楚辭』「湘君」のように舟(柁・櫂など)と「木蘭」とが関係する詩は盛唐期までに、

漢 鼓吹曲辭「饒歌・上陵」(『漢詩』卷四)

桂樹爲君船、青絲爲君竿。木蘭爲君櫂、黃金錯其間

梁 劉孝威「採蓮曲」(『梁詩』卷十八)

金槩木蘭船、戲採江南蓮

陳 張正見「別韋諒賦得江湖汎別舟詩」(『陳詩』卷三)

千里潯陽岸、三翼木蘭船

陳 江總「烏棲曲」(『陳詩』卷七)

桃花春水木蘭橈、金羈翠蓋聚河橋

隋 盧思道「櫂歌行」(『隋詩』卷一)

帶垂連理濕、櫂舉木蘭輕

隋 薛道衡「秋日遊昆明池詩」(『隋詩』卷四)

新船木蘭楫、舊宇豫章材

唐 崔融「吳中好風景」(『唐』卷六十八)

夕煙楊柳岸、春水木蘭橈

唐 駱賓王「晚泊河曲」

通波竹箭水、輕舸木蘭橈（『唐』卷七十九）

唐 李义 「次蘇州」（『唐』卷九十二）

夕煙楊柳岸、春水木蘭橈

「侍宴安樂公主山莊應制」（『唐』卷九十二）

回晚平陽歌舞合、前溪更轉木蘭橈

唐 李白 「江上吟」（『唐』卷百六十六）

木蘭之枻沙棠舟、玉簫金管坐兩頭

の十一首が確認され、「木蘭」を素材とする詩の一つの類型を確立している。そして、このような類型が存在することによって、『輞川集』はじめて「木蘭柴」からその先の水にゆかりのある「遊止」へと進むことができると考えられる。それは、裴迪詩の「蒼蒼たる落日の時、鳥聲溪水に亂る」に見られる水の描寫によって、水にゆかりのある「遊止」へと進むことができるのと同様であろう。

水にゆかりのある「遊止」において、王維が認識した風景については後述するとして、ここでは『輞川集』の「遊止」は單獨に存在しているのではなく、一體のものとして有機的に存在していることを指摘しておきたい。つまり、王維の風景認識は、それぞれの「遊止」において個別になされているのではなく、他の「遊止」と密接に関わり、全體として行われているのである。

g、茱萸泝

結實紅且綠 實を結びて 紅にして且つ綠

復如花更開 復た花の更に開くがごとし

山中倘留客 山中 倘し客を留むれば

置此芙蓉杯 此の芙蓉の杯を置かん

（王維）

飄香亂椒桂 香を飄せて 椒桂を亂し

布葉閒檀欒 葉を布きて 檀欒に閒はる

雲日雖迴照 雲日 迴照すと雖も

森沉猶自寒 森沉として 猶ほ自から寒し

（裴迪）

宮槐陌

仄逕蔭宮槐 仄逕 宮槐に蔭はれ  
幽陰多綠苔 幽陰 綠苔多し  
應門但迎掃 應門 但だ迎掃せよ  
畏有山僧來 山僧有りて來たるを畏る

(王維)

門南宮槐陌 門南 宮槐陌  
是向欹湖道 是れ欹湖に向かふの道  
秋來山雨多 秋來たりて 山雨多し  
落葉無人掃 落葉 人の掃ふ無し

(裴迪)

臨湖亭

輕舸迎上客 輕舸もて 上客を迎へ  
悠悠湖上來 悠悠として 湖上に來たる  
當軒對樽酒 軒に當たりて 樽酒に對す  
四面芙蓉開 四面 芙蓉開く

(王維)

當軒彌澗漾 軒に當りて 彌いよ澗漾  
孤月正徘徊 孤月 正に徘徊す  
谷口猿聲發 谷口 猿聲發し  
風傳入戸來 風傳はりて 戸に入りて來たる

(裴迪)

南垞

輕舟南垞去 輕舟もて南垞より去らんとするも  
北垞森難卽 北垞 森として卽き難し  
隔浦望人家 浦を隔てて 人家を望むも  
遙遙不相識 遙遙として 相ひ識らず

(王維)

孤舟信風泊 孤舟 風に信せて泊す  
南垞湖水岸 南垞 湖水の岸

落日下崦嵫 落日 崦嵫に下れば  
清波殊森漫 清波 殊に森漫たり

(裴迪)

欽湖

吹簫凌極浦 簫を吹きて 極浦を凌ぎ  
日暮送夫君 日暮 夫君を送る  
湖上一迴首 湖上 一たび首を迴らせば  
山青卷白雲 山青くして 白雲を卷く

(王維)

空闊湖水廣 空闊くして 湖水廣く  
青熒天色同 青熒として 天色同じ  
艤舟一長嘯 舟を艤して 一たび長嘯すれば  
四面來清風 四面 清風來たる

(裴迪)

柳浪

分行接綺樹 行を分かちて 綺樹接び  
倒影入清漪 影を倒しまにして 清漪に入る  
不學御溝上 學ばず 御溝の上の  
春風傷別離 春風に 別離を傷むを

(王維)

映池同一色 池に映じて 同一の色  
逐吹散如絲 吹くを逐ひて 散じて絲のごとし  
結陰既得地 陰を結びて 既に地を得たり  
何謝陶家時 何ぞ謝せん 陶家の時

(裴迪)

欒家瀨

颯颯秋雨中 颯颯たる秋雨の中  
淺淺石溜瀉 淺淺として 石溜瀉ぐ  
跳波自相濺 跳波 自から相ひ濺ぎ  
白鷺驚復下 白鷺 驚き復た下る

(王維)



瀨聲喧極浦 瀨聲 極浦に喧しく  
沿歩向南津 歩に沿ひて 南津に向ふ  
汎汎鳧鷗渡 汎汎として 鳧鷗渡り  
時時欲近人 時時 人に近づかんと欲す

(裴迪)

金屑泉

日飲金屑泉 日び金屑泉を飲めば  
少當千餘歲 少くも千餘歳に當る  
翠鳳翔文螭 翠鳳 文螭を翔け  
羽節朝玉帝 羽節 玉帝に朝す

(王維)

潌渟澹不流 潌渟 澹として流れず  
金碧如可拾 金碧 拾ふべきがごとし  
迎晨含素華 晨を迎へて 素華を含み  
獨往事朝汲 獨り往きて 朝汲を事とす

(裴迪)

白石灘

清淺白石灘 清淺たる白石灘  
綠蒲向堪把 綠蒲 把るに堪ふるに向なんとす  
家住水東西 家は住む 水の東西  
浣紗明月下 紗を浣ふ 明月の下

(王維)

跂石復臨水 石を跂み 復た水に臨む  
弄波情未極 波を弄して 情未だ極まらず  
日下川上寒 日下 川上寒く  
浮雲淡無色 浮雲 淡として色無し

(裴迪)

北垞

北垞湖水北 北垞 湖水の北

雜樹映朱欄 雜樹 朱欄に映ず  
逶迤南川水 逶迤たる南川の水  
明滅青林端 明滅す 青林の端

(王維)

南山北垞下 南山 北垞の下  
結宇臨欹湖 宇を結びて 欹湖に臨む  
每欲採樵去 毎に樵を採りて去らんと欲し  
扁舟出菰蒲 扁舟 菰蒲より出づ

(裴迪)

辛夷塢

木末芙蓉花 木末の芙蓉花  
山中發紅萼 山中 紅萼を發く  
澗戸寂無人 澗戸 寂として人無く  
紛紛開且落 紛紛として 開き且つ落つ

(王維)

綠堤春草合 綠堤 春草合し  
王孫自留翫 王孫 自から留翫す  
況有辛夷花 況や 辛夷の花有り  
色與芙蓉亂 色は芙蓉と亂る

(裴迪)

これらの「遊止」のそれぞれ個別の名稱の由來については不明なものもあり、今後の研究を待たねばならない。しかし、これらがいずれも「欹湖」を中心とした水邊の世界である點が重要であろう。中心に「欹湖」という湖があり、その南北に「垞」、すなわち丘<sup>23)</sup>が存在する地形配置は、謝靈運の「於南山往北山經湖中瞻眺」(南山より北山に往かんとし、湖中を経て瞻眺す)詩(『文選』卷二十二)と重なる。また、『輞川集』には「舟」や「蒲」など、この「於南山往北山經湖中瞻眺」と共通する詩語が見られる<sup>24)</sup>。したがって、水邊の「遊止」に身を置くにあたって、王維は謝靈運の「始寧」の別墅、正確に言えば、「始寧」で詠まれた「於南山往北山經湖中瞻眺」の世界の風景を認識していたと考えられる。

その傍證として、前述の「斤竹嶺」の詩を擧げることができる。「斤竹嶺」の詩において、王維は「檀欒 空曲に映じ、青翠 漣漪に漾ふ」、裴迪は「明流 紆にして且つ直なり、綠

篠 密にして復た深し」と詠じ、「歛湖」を中心とする水邊から離れているにもかかわらず、それぞれ水邊の風景を表現している。先に述べたように、「斤竹嶺」という名稱は謝靈運の始寧別墅の「斤竹澗」を典故としている。したがって、この「斤竹嶺」の水邊においても、王維は謝靈運の「始寧」の世界を風景として認識していたと考えられよう。

「於南山往北山經湖中瞻眺」詩は、『輞川集』の他の「遊止」とも密接な関わりを持つことが確認される。この詩の第十三句には、

初篁苞綠籜 初篁 綠籜に苞まれ

新蒲含紫茸 新蒲 紫茸を含む

と、「竹」の描寫が見られ、「斤竹嶺」や「竹里館」との關連が窺える。さらに、第十九・二十句の「惜しまず 去人の遠きを、但だ恨む 與に同じくする莫きを」について、李善注は、

言獨在山中、無人共遊、人謂古人也。

(言ふところは獨り山中に在り、人の共に遊ぶ無し、人は古人を謂ふなり。)

という。この注に見える「共遊」する「古人」は、逆説的に後述する「漆園」詩に現れているのではないか。具體的には、謝靈運の詩では、「共遊」する人間もない孤獨な謝靈運自身が描かれているのに對し、『輞川集』では「古人」すなわち莊子と一體化した王維自身と、その王維と「共遊」する人間としての裴迪とが描かれていると考えてよからう。これらは「於南山往北山經湖中瞻眺」詩が『輞川集』の他の「遊止」と不可分につながっていることを示している。そうであるならば、王維が「歛湖」を中心とする水邊で認識した風景とはこの謝靈運の詩の世界の風景であると判断できるのではなからうか。

#### h、竹里館

獨坐幽篁裏 獨り坐す 幽篁の裏

彈琴復長嘯 琴を弾じ 復た長嘯す

深林人不知 深林 人知らず

明月來相照 明月 來りて相ひ照らす

(王維)

來過竹里館　　來りて過ぎる　竹里館  
日與道相親　　日び道と相ひ親しむ  
出入惟山鳥　　出入するは　惟だ山鳥  
幽深無世人　　幽深　世人無し

(裴迪)

「竹里館」が水邊の「遊止」のもととなった謝靈運の「於南山往北山經湖中瞻眺」詩と關連があることは既に述べた。それでは、この景勝において王維はどのような風景を認識したのだろうか。

「竹里館」の名稱から明らかなように、「竹」が風景の中心にあることは疑う餘地がない。その竹について、王維詩には「獨り坐す　幽篁の裏、琴を弾じ復た長嘯す」と、「幽篁」の語が見える。この「幽篁」は『楚辭』「九歌　山鬼」の

余處幽篁兮終不見天　　余は幽篁に處りて終に天を見ず

路險難兮獨後來　　路險難にして獨り後れて來る

を典故としている。ところで、この「山鬼」の引用部分には「余」、すなわち自分以外の他者は見えない。この他者の不在という点において、王維詩の「深林　人　知らず、明月　來りて相ひ照らす」、裴迪詩の「出入するは惟だ山鳥のみ、幽深　世人無し」と共通するものがある。したがって、「竹里館」で王維が認識した風景は深い竹藪を持つ『楚辭』「山鬼」の世界の風景ではないかと考えられる。

『楚辭』「山鬼」には、

乘赤豹兮從文狸　　赤豹に乗りて文狸を従へ

辛夷車兮結桂旗　　辛夷の車に桂旗を結ぶ

とあり、前句には禽獸を従えている表現が見られる。これは王維「金屑泉」詩の「翠鳳　文螭を翔け、羽節　玉帝に朝す」と共通している。また、辛夷車には「竹里館」の次の「遊止」である「辛夷塢」との關係も窺える。このように、『楚辭』「山鬼」も謝靈運の「於南山往北山經湖中瞻眺」詩と同様、「竹里館」のみならず、他の「遊止」とも関わっているこ

とが確認されよう。

i、漆園

古人非傲吏 古人 傲吏に非ず

自闕經世務 自から闕く 經世の務

偶寄一微官 偶たま寄す 一微官

婆娑數株樹 婆娑たり 數株の樹

(王維)

好閑早成性 閑を好むこと 早に性と成り

果此諧宿諾 果たして此れ 宿諾に諧ふ

今日漆園遊 今日 漆園の遊び

還同莊叟樂 還た莊叟と同一に樂しむ

(裴迪)

この「漆園」という「遊止」の名稱は、趙殿成の注に指摘されるように、『史記』<sup>(26)</sup>卷六十  
三「老子韓非列傳」の「(莊)周、嘗て蒙の漆園の吏と爲る」を典故としている。

それでは、古人、すなわち莊子が王維と一體化して表現されている「漆園」において、  
王維が認識した風景は如何なるものであったのだろうか。「漆園」詩そのものの描寫は王  
維・裴迪のどちらの詩にも表現されていないため、詩中からはその風景を明らかにするこ  
とができない。しかし、その「漆園」という「遊止」にも、當然、特定の風景が存在して  
いたはずである。前述したように、この詩は「共遊」する古人を媒體にして、謝靈運の「於  
南山往北山經湖中瞻眺」と關係していることが確認される。そうであるならば、その風景  
とはやはり謝靈運の始寧別墅の世界ではないだろうか。

j、「椒園」

桂尊迎帝子 桂尊 帝子を迎へ

杜若贈佳人 杜若 佳人に贈る

椒漿奠瑤席 椒漿 瑤席に奠へ

欲下雲中君 雲中君を下さんと欲す

(王維)

丹刺冒人衣 丹刺 人衣を冒し

芳香留過客　　芳香　過客を留む  
幸堪調鼎用　　幸ひに堪ふ　調鼎の用  
願君垂採摘　　願はくは君の採摘を垂れよ

(裴迪)

この「椒園」の詩も、「漆園」詩と同様にこの景勝の具體的風景は全く描寫されていない。しかし、王維の詩に見える「雲中君」が「九歌」の題名の一つであることに端的に示されるように、この「椒園」詩は今まで指摘した「楚」と『輞川集』との關係をより力強く裏付けている。また、「椒園」の「椒」によって作られていると思われる「椒漿」、「桂尊」や「杜若」は「九歌」の「東皇太一」の「蕙肴を蒸め蘭を籍き、桂酒と椒漿と奠ふ」、「湘君」の「芳洲に杜若を采り、將に以て下女に遺らんとす」、「湘夫人」の「汀洲に杜若を擧り、特に目て遠者に遺らんとす」を典故にする。したがって、この「遊止」において意識された風景は、『楚辭』「九歌」の世界の風景であると考えられる。

以上のように『輞川集』の各「遊止」、特にその名稱の典故を検討をすると、王維は現實の輞川莊のなかに、

- ① 謝靈運の詩を主とする長江流域以南の風景
- ② 『楚辭』を主とする「楚」の風景

という二つの風景を強く認識していると考えられる。しかも、謝靈運の詩や『楚辭』などが『文選』に收められていることからすれば、王維は、その地の直接の風景ではなく、主に『文選』という古典の中の作品に描かれた、あるいは詩題や表現から想起される長江流域以南の風景を認識した、あるいは主體的に見出そうとしたといえるようである。つまり、『輞川集』とは、まさにその世界を自らの詩歌によって表現せんとしたものであったと考えられる。

なぜ、王維が認識した長江流域以南の風景には『文選』に收められている先行作品に描かれたものが多いのか。

その理由の一つには、この長江流域以南の風景に關する王維の實體驗が充分ではなかったことが考えられる。開元二十八年（七四一年）から翌年にかけて、知南選として、長江流域以南に赴いた、あるいはその地を經過した事跡が確認される。しかし、それは極めて

短期間のことである。その結果、文學の表現として堪えうる程度の、長江流域以南の風景に關する實體験を王維は得られなかったと思われる。

もう一つ、より積極的な理由として、自らの認識した風景に古典性を王維が求めたからではないかと考えられる。そもそも、實體験から得た風景には、鮮明な實感を伴うという利點もあるが、時間の経過などで希薄になってしまおうおそれもある。一方、古典に表現された風景には、その作品が時間の経過などを経ても受け継がれることに起因する安定感が存在するといえよう。つまり、王維は自らが認識し、そして表現する風景を容易には變化、消失しない、安定したものにしようとしたため、『文選』という文學作品として當時最も權威のある古典に描かれた風景が多くなったのではないだろうか。

### 三 『輞川集』の世界とその要因

ところで、輞川莊の景勝、すなわち「遊止」の總體である『輞川集』の世界とは、いかなるものであったのだろうか。

その世界については、たとえば、「極樂淨土の理想郷」<sup>(30)</sup>あるいは「佛教の美の世界」<sup>(31)</sup>などの佛教世界とする説や『楚辭』の世界とする説<sup>(32)</sup>、あるいは桃花源記の世界とするなど多くの論考が提出されている。しかし、いずれの説についても、その世界とは直接には結びつかない作品も存在していることから、にわかには賛同しかねる。そして、現實の輞川莊のなかで、『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の風景を王維が多く認識していたと考えられる以上、その風景の世界を再現したものといえるのではないだろうか。<sup>(34)</sup>

それでは、なぜ王維は『輞川集』において「主に古典に表現されている、長江流域以南の世界」を再現したのだろうか。その要因は、王維が輞川莊を外側の世界と隔絶し、自適の世界をそこに作るうとしたことにあると考えられる。

長安と輞川を往復していた王維にとって、官僚生活の場である前者よりも後者においてより精神的充足を得ていたこと、あるいは價值を認めていたことは、次の詩から看取できる。たとえば、

一從歸白社 一たび白社に帰りてより

不復到青門 復た青門に到らず

〔輞川閒居〕（卷七）

忍別青山去 青山に別れ去るに忍びんや  
其如綠水何 其れ綠水を如何せん

〔別輞川別業〕（卷十三）

出入千門萬戸 出入す 千門萬戸  
經過北里南鄰 經過す 北里南鄰  
蹀躞鳴珂有底 蹀躞として珂を鳴らすは底か有らん  
崆峒散髮何人 崆峒として髮を散らすは何人ぞ

〔田園樂〕<sup>(35)</sup> 其一（卷十四）

再見封侯萬戸 再び見えて 封じらる 侯萬戸  
立談賜壁一雙 立ち談じて賜る 壁一雙  
詎勝耦耕南畝 詎ぞ勝らんや 南畝に耦耕するに  
何如高臥東牕 何ぞ如かんや 東牕に高臥するに

（同上其二）

とある。ここでは、自適の場所である輞川莊が出仕や榮達の場よりも価値があることを述べている。輞川莊をこのような精神的充足を得る場、あるいは価値を持つ場として保障するためには、出仕の場である長安やそこにつながる場所と輞川莊とを隔絶させる必要がある。そこで、王維は『輞川集』においては、長安や長安へとつながる場所とは風景を異にする「長江流域以南の世界」を構築し、心理的にそれらの場所と隔絶せんとしたのである。また、その隔絶された世界は、容易には消失・崩壊しない、確固としたものでなければならぬ。そのために、安定感の存在する「古典（主に『文選』）に表現された世界」を再現したと考えられる。

このような「世界の隔絶」の意識は、王維の詩に「柴扉」などの「門扉」が閉じられる（あるいは既に閉じられている）表現が多出していることからも、その存在を指摘できる。たとえば、



終年無客常閉關 終年 客無く 常に關を閉ざし  
終日無心長自閑 終日 心無く 長く自から閑たり

〔答張五弟〕（卷六）

不枉故人駕 故人の駕を枉ぐるにあらず  
平生多掩扉 平生 扉を掩ふこと多し

〔喜祖三至留宿〕（卷七）

迢遞嵩高下 迢遞たる嵩高の下  
歸來且閉關 歸來 且く關を閉ざさん

〔歸嵩山作〕（卷七）

東皋春草色 東皋 春草の色  
惆悵掩柴扉 惆悵として 柴扉を掩ふ

〔歸輞川作〕（卷七）

寂寞掩柴扉 寂寞として 柴扉を掩ひ  
蒼茫對落暉 蒼茫として 落暉に對す

〔山居卽事〕（卷七）

靜者亦何事 靜者 亦た何事ぞ  
荊扉乘晝關 荊扉 晝に乗じて關さん

〔淇上卽事田園〕（卷七）

山中相送罷 山中 相ひ送ること罷め  
日暮掩柴扉 日暮 柴扉を掩ふ

〔送別〕（卷十三）

の七首に及ぶ。ここにみられる行爲は、客、特に俗世の客人を謝絶し、俗世間との交わりを絶つ意味を持っている。つまり、「門扉」が閉じられることによって、俗世間である門

の外の世界を自らにとって価値ある世界から隔絶していると考えられる。そのことは、これらの詩が洪水・高山・輞川といった王維の「隱棲」した地で創作されたことから確認される。さらに、このような「世界の隔絶」の意識が王維にとって継続的なものであったことをこれらの作品は示している。

#### 四 小結

本節では、王維・裴迪計四十首の五言絶句からなる『輞川集』の各詩題でもあり、輞川荘内の「遊止」、すなわち景勝の名稱の典故を検討した。それによって、王維が現実の輞川荘において『文選』を主とする古典に描かれた長江流域以南の風景を多く認識していた、あるいは主體的に認識しようとしたこと、さらにそれを『輞川集』という形で表現したということを指摘した。つまり、『輞川集』の世界は主に『文選』のなかの長江流域以南の世界を再現したものであったろうと判断される。さらに、そのような風景認識の要因に、精神的充足を得る場、あるいは価値ある場として保証するための「世界の隔絶」という意識があることに言及した。そして、この意識は、輞川荘を手に入れてから急に現れたものではなく、王維の生涯において、折々に顕在化する継続的なものであったと思われる。

ところで、この「世界の隔絶」という意識は前節で論じた輞川諸詠における田園風景の描寫にも確認された。つまり、長安という出仕の場から隔絶し、精神的充足を得る場であることを保障しようという目的からいえば、前節で検討した作品にせよ、『輞川集』にせよ、基本的には大きな差違はないと考えられる。

しかし、そうであるならば、『輞川集』に全く田園の風景が描寫されていないことは検討の必要な課題だろう。あるいは輞川荘の「遊止」であり、『輞川集』中の作品の題でもある「漆園」、「椒園」などは生産施設であると認めることが可能かもしれない。しかし、実際の作品中には、生産活動はもとより、その基盤となる村落の描寫なども見えない。このように『輞川集』の詩とそれ以外の輞川荘で創られた作品の間には表現の手法の點では大きな相違がある。

そのような相違が生じた理由を考えるための第一の手がかりは、「連作組詩」であるか否かということだろう。『輞川集』が一貫した創作意圖を持つ「連作組詩」であるのに對し、前節で取り上げた諸作品はほとんど單獨で詠じられた作品である。單獨で創作された作品において、外側の世界と隔絶することを明確に示すには、典故を用いることによって世界

を構築する『輞川集』のような表現手法はあまり適當ではないと思われる。なぜならば、典故による方法は、それを重層的に用いることでイメージがより明確化するという特徴があり、單獨の作品には向かない手法であると考えられるからである。一方、田園の風景によつて外側の世界と隔絶する方法は、重層的である必要は全くない。それは「都市」と「田園」のイメージの対立が比較的わかりやすいことによる。

しかし、これだけでは、『輞川集』という連作組詩には典故を用いてその独自の世界を構築していくという表現手法が向いているということを言うのみで、『輞川集』に田園風景が見えないことの理由を説明してはない。その理由とは何か。それは田園風景による世界の「隔絶」が相対的に弱いことにあると思われる。田園の風景は、都市（具體的には長安）の風景とは、イメージとして全く異なるものである。しかし、現實の田園は（輞川別業の）外の世界にも連続して広がっている。したがって、他の場所と完全に「隔絶」するためには、その世界は前節でみたような田園のような現實の、しかも輞川莊のすぐ外にも広がる世界ではあり得ず、あるいは第一章第一節に述べた「終南山」のような誰もが知る隠棲の場でも不適當であった。ほとんどの人間が知らないような世界、できれば架空の世界を作り上げることがより効果的であったはずである。あるいは王維にとつてはそういった世界を構築しなければならなかった。『輞川集』の場合、その架空の世界こそ、古典の典故を用いることによつて作られた長江流域以南の世界だったと考えられるのである。

## 第二章第二節注

(1) 『舊唐書』（中華書局排印本、一九七五年五月第一版）卷百九十下「文苑傳下」には「得宋之間藍田別墅。在輞口、輞水周於舍下、別漲竹洲花塢、與道友裴迪浮舟往來、彈琴賦詩、嘯詠終日。嘗聚其田園所爲詩、號輞川集」、『新唐書』（中華書局排印本、一九七五年二月第一版）卷二百二「文藝傳中」には「別墅在輞川、地奇勝、有華子岡、欽湖、竹里館、柳浪、茱萸泚、辛夷塢、與裴迪游其中、賦詩相酬爲樂。喪妻不娶、孤居三十年。母亡、表輞川第爲寺、終葬其西」とある。

(2) 「序」には「余別業在輞川山谷、其遊止有孟城坳、華子岡、文杏館、斤竹嶺、鹿柴、木蘭柴、茱萸泚、宮槐陌、臨湖亭、南垞、欽湖、柳浪、欒家瀨、金屑泉、白石灘、北垞、竹里館、辛夷塢、漆園、椒園等、與裴迪閒暇各賦絕句云爾」とある。

(3) 詩では、王維・裴迪共に見えない。文では、王維「山中與裴秀才迪書」（卷十八）に「華子岡」のみ確認される。また、王縉ら王維の弟や、崔興宗・儲光羲ら友人など

の詩文にも、これら「遊止」の名稱は見えない。

(4) 参照：陳鐵民『王維論考』（人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版）「輞川莊遺址與王維輞川詩」（初出は一九九七年）三六八・三六九頁。

(5) 『元和郡縣圖志』（中華書局排印本、一九八三年六月第一版）。

(6) 参照：『宋書』（中華書局排印本、一九七四年一〇月第一版）卷一「武帝紀」。

(7) 松田壽男『松田壽男著作集5 アジアの歴史』（六興出版、一九八七年五月第一版）「アジアの歴史―東西交渉からみた前近代の世界像」（初出は一九七一年）の「5 中國の北と南」四九頁。

(8) 王維詩の轉結句について、たとえば都留春雄氏の「空悲の句を『昔の所有者（宋之問）を悲しむとともに、將來自分も昔の所有者として悲しまれる身であることを悲しむ』意にとる」の解釋（小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』（岩波書店、一九七二年一〇月第一版）一〇二頁）のように、（王維から見た）昔人を宋之間に限定しているものが多い。しかし、時間の流れにおいて、王維の後の所有者、すなわち來者は一人とは限らない。むしろ、その所有者は變化していき、いわば重層的に存在していく。したがって、王維以前の所有者、つまり昔人についても、この城を築いた南人、そして宋之間、というように重層的に考える必要があるろう。

(9) たとえば、入谷仙介『王維研究』（創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年）六一五頁など。

(10) 『文選』の引用は唐・李善注『文選』（上海古籍出版社排印本、一九八六年六月第一版）による。

(11) 輞川が谷であるという認識は、『輞川集』「序」に見える。前掲注（2）を参照。

(12) 長江流域以南の風景は王維や裴迪の詩の本文に表現されていない、したがって、そもそもそのような風景を認識していないと考えることも一應は可能である。しかし、それではなぜ、謝靈運の詩の詩題（その中に現れる地名）を典故とした景勝が存在し、それが『輞川集』のなかの一作品となっているのか。もし、王維が、その詩題から長江流域の風景を認識していなかったならば、そもそも、「遊止」の名稱としてこのよ  
うな典故を用いる意味がなくなってしまうのではないか。そうであるならば、やはり、謝靈運の詩の詩題によって得られた長江流域以南の風景を王維は認識したと考えるべきであろう。

(13) たとえば前掲注（9）入谷著書五三一頁など。

(14) 前掲注(8)『王維詩集』一〇六頁の注には、『鹿柴』は鹿を飼つてある場所。言葉の意味は鹿を圍う柵、あるいは防ぐ柵」とある。

(15) 前掲注(6)『宋書』卷六十七「謝靈運傳」。

(16) この鹿を飼育する場所を「鹿野苑」とする根據として、當然の事ながら、まず、動物として「鹿」の存在を擧げることができる。その他に、轉句の「青苔」には、「宗教的な清淨空間としての意味がある」こと(澤崎久和「王維詩「青苔」考」(福井大學國語國文學會『國語國文學』第三十號村寄健一教授退官記念號、一九九一年三月)一〇六頁)もその根據となりうるだろう。言うまでもなく、釋迦が四眞諦を説いた「鹿野苑」はまさしく宗教的な清淨空間であるからである。

(17) 詩では、同じ劉宋ではあるが、時代がやや遅れる鮑照「蒜山披始興王命作詩」(遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三年九月第一版)『宋詩』卷八)の「鹿苑豈淹睇、免園不足留」が現存する最も早い例である。

(18) 「返景」と『感無量壽經』の日想觀との關係については、小川環樹「落日の觀照―都留春雄『王維』への跋」(『小川環樹著作集 第二卷』(筑摩書房、一九九七年二月一刷)、初出は一九五八年)三四一―三四三頁に言及がある。

(19) 陳允吉『佛教與中國文學論稿』(上海古籍出版社、二〇一〇年一月第一版)「王維「鹿柴」詩與大乘中道觀」三〇九頁は「對於熟解龍樹『中道觀』的王維來說、其題詠『鹿柴』一詩描繪上述圖景、…終至讓這兩句話續演並深化了上半首詩裏已曾揭示的『中觀空』境界」と記す。しかし、必ずしも「鹿」の存在意味を充分には説明していないように思われる。

(20) 『楚辭』の引用は『楚辭補注』(中華書局排印本、一九八三年三月第一版)による。なお、『楚辭補注』では、「九嘆 憂苦」の「葛藟藁於桂樹兮、鴟鴞集於木蘭」の用例も確認される。

(21) 「高唐賦」には「王曰、『朝雲始出。狀若何也』玉對曰、『……風止雨霽、雲無處所』」とある。

(22) 隋以前の詩は前掲注(17)『先秦漢魏晉南北朝詩』に、唐詩(『唐』)は『全唐詩』(中華書局排印本、一九六〇年四月第一版)に依據した。

(23) 『集韻』(上海古籍出版社影印本、一九八五年五月第一版)「平聲三麻韻」に「直加切。丘名」とある。

(24) 「舟」は「臨湖亭」王維、「南垞」王維・裴迪、「欽湖」裴迪、「北垞」裴迪に、「蒲

は「白石灘」王維、「北垞」裴迪に、「仄徑（側徑）」は「宮槐陌」王維にそれぞれ見られる。なお、「仄徑（側徑）」については、石川忠久「王維輞川集校注」（岡村繁教授退官記念論集刊行會『中國詩人論 岡村繁教授退官記念論集』（汲古書院、一九八六年一〇月發行））九八二頁を参照した。

ところで、王維「南垞」は、「輕舟 南垞に去り、北垞 森として即き難し」と、船あしのはやい輕舟で南垞へと王維が向かい、そこから北垞を遠望していると、従來解釋されている。しかし、この王維の「南垞」の詩は、「輕舟 南垞より去らんとするも、北垞 森として即き難し」とよんで、つまり王維は南垞におり、輕舟で北垞へと向かう人物を見送っていると解釋すべきであろう。なぜならば、裴迪の詩の轉句の「落日」と次の王維の「敬湖」承句の「日暮」という二つの語から、兩詩には「夕刻」という共通點が確認され、また、その「敬湖」の詩が「舟」に乗って去る「夫君」に對する送別を詩の内容とすることから、この「南垞」の詩もその人物に對する送別を示していると考えられるからである。そして、この「南垞」から「北垞」へと向かう行爲は、まさに謝靈運の「於南山往北山經湖中瞻眺」の詩題と一致している。

(25) これが單なる偶然でないと思われる根據として、王維の「贈李頎」（卷二）の第七句「文螭從赤彪、萬里方一息」に、「文螭」と「赤彪」が同時に用いられていることを舉げることができる。

(26) 参照：『史記』（中華書局排印本、一九七五年三月第一版）。

(27) 「椒園」と『楚辭』「九歌」の關係については、黒須重彦「王維作「椒園」詩と『楚辭』九歌」（栗原圭介博士頌壽記念事業會『栗原圭介博士頌壽記念東洋學論集』（汲古書院、一九九五年三月發行））四二二―四四四頁に詳細な研究がある。

(28) たとえば、本文中で言及した『楚辭』はすべて『文選』卷三十一・三十三に收められている。

(29) 参照：陳鐵民「王維年譜」（前掲注（4））陳著書所收、初出は一九八二年）一六頁―二〇頁および張清華『王維年譜』（學林出版社、一九八八年九月第一版）七七頁―八七頁。

(30) 前掲注（9）入谷著書六二四頁。

(31) 高倩藝「王維が描いた輞川―『輞川集』を中心に」（名古屋大學中國語學文學會『名古屋大學中國語學文學論集』第十一輯、一九九八年一月）裏一二頁。

(32) 小林太市郎氏は「輞川集の世界は楚辭の世界なり」と述べている（小林太市郎・

原田憲雄『王維（漢詩大系一〇）』（集英社、一九六四年八月第一版）三〇七頁、原田執筆部分脚注所引の小林ノート）。

(33) 侯迺慧『詩情與幽境―唐代文人的園林生活―』（東大圖書、一九九一年六月第一版）第二章「唐代重要文人園林」第一節「與世隔絶的天然山水園―輞川形勝」九七頁。

(34) この點について、『文選』という古典文學の詞華集が初唐から盛唐期に盛行していたことも關係しているのではないだろうか。『文選』盛行の一つの例は、太宗の顯慶三年（六五八年）の李善と玄宗の開元六年（七一八年）の五臣の二度にわたる『文選』への付注とその獻上である。これらの注を付す行爲は、いわゆる文選學における新しい形態であろう。つまり、その當時において、『文選』は、収録されている作品そのものは古典ではあるが、享受の面では新しい形態が現れるほどに盛行していたと思われる。そして、その享受の新しい形態の一つが、別業の景勝に『文選』のなかの作品に由来する名稱を與え、その先行作品の世界を認識し、それを詩歌に表現している『輞川集』であったのかもしれない。

(35) 宋・蔡正孫『詩林廣記』（中華書局排印本、一九八二年八月第一版）前集卷五には「田園樂」其六を「輞川六言」としており、輞川別業における作品である可能性がある。

(36) 閻翠榮「從王維詩的“閉門”意象看其隱逸心態」（『王維研究』編輯部編『王維研究』第二輯（三秦出版社、一九九六年八月第一版）三七頁は「這種避世的相對性使其詩中“閉門”意象帶有更多的象徵意義、即心理上對官場生活的排斥。與之相應、他的詩歌在藝術表現手法上由再現紛繁的外部人事轉向關注山水田園抒發個人情懷」と指摘する。

(37) 前掲注（9）入谷著書六二五頁は、その理由を『輞川集』の中に……もつとも基本的な人間的現實である、農業生産労働が入りこんではならなかった」ことに求めている。

(38) 「田園樂」は七首連作であり、「桃花源の一種の農民的ユートピア」と入谷氏が指摘するように（前掲注（9）入谷著書五九四頁）、一貫した創作意圖が存在する。しかし、その意圖が田園を離れない以上、他の單獨で行なわれた作品と本質的には同一であると考えてよからう。

### 第三章 詩と繪畫

#### 第一節 唐詩における「詩人」と「畫家」

—王維詩を手がかりに—

##### 一 問題の所在

北宋の後期以降、士大夫による繪畫の製作は特殊なものではなくなっていた<sup>(1)</sup>。これは、「文人畫」という分野の成熟によつて、一個の文人のなかに「詩人」と「畫家」の兩側面を持つことが可能である、ないしは望ましいという認識が當の文人間に共有されていたことを示している。

溯れば、つとに唐代において、詩歌と繪畫の接近を示す實例といつてよい、繪畫を詠じた詩歌や「題畫詩」は既に一定の水準に達していた<sup>(2)</sup>。また、唐代に、詩人が繪畫を通して風景を見るといふ認識の枠組みが廣まり、特に中晩唐期に「詩人たちの風景への對し方が、自らを畫家に擬するような形をとりつつあった」ことが指摘されている<sup>(3)</sup>。このように、繪畫藝術は確實に詩人の關心領域に浸透していった。

それでは、唐代の「詩人」は、「畫家」といったいどのような關係にあつたのか。この問題を考えるにあたり、本節は、まず、後世「文人畫」の祖とされた王維の詩を検討する。その上で、唐詩全體を俯瞰して、從來、あまり議論されてこなかつた詩における「畫家」への言及の情況を考察したい。

##### 二 王維における「詩人」と「畫家」

王維詩のなかの「畫家」への言及を考える上で、まず注目されるのは、「詩人」と「畫家」を並置する詩が見られることである。

王維の六首連作「偶然作」其六（卷五）には次のようにある<sup>(4)</sup>。

老來懶賦詩

老來 詩を賦すに懶く

惟有老相隨

惟だ老いの相ひ隨ふこと有るのみ

宿世謬詞客

宿世 謬りて詞客たるも



前身應畫師　　前身　應に畫師なるべし  
不能捨餘習　　餘習を捨つる能はず  
偶被世人知　　偶たま世人に知らる  
名字本皆是　　名字　本より皆な是なり  
此心還不知　　此の心　還た知らず

「世人」からは詩作と畫業がよく知られ、評價されているのに對し、王維自身は第七句「名（＝維）字（＝摩詰）本より皆な是なり」とあるように、佛教への歸依こそが本願であることを詠じている。しかし、王維の本願は本願として、詩人であり、かつ畫家であることが、この詩を詠じた當時の王維の實態であり、また本分であった。すなわち第二聯にあるように、現在の自己のうちに「詩人」（詞客）と「畫家」（畫師）という二つの側面が同居していることを王維は深く自覺していた。

それでは、王維は詩人と畫家のうち、どちらにより肯定的であったのだろうか。このことを考える上で、第三句の「宿世」という語が注目に値する。「宿世」は「前身」と同義であるが、これを「當代（當世）」に作るテキストがある。<sup>(5)</sup>この異文に従えば、詩人としての自己は誤りであり、畫家としての自己こそが本來的であると解釋することが可能になるとすれば、王維は詩人としてよりも畫家であることに高い價值を認めていたことになる。

ただし、本詩があえて主題の所在を曖昧にした「偶然作」という詩題を用いること、また各句の表現も韜晦的色彩の濃い、やや屈折した内容であることなどを考慮に入れると、<sup>(6)</sup>かりに「當代」に作るテキストが王維の眞意であったとしても、第二聯をもって王維に畫家を上位とする認識があったと無條件に認めることはできない。しかし、少なくとも、王維が「畫家」としての自己を、「詩人」としての自己よりも決して下位においていなかったことは、この詩から明確に看取できるのである。

續いて、他の用例を確認したい。右の例のように、詩人と畫家の關係を對比的に述べた作例はほとんどないため、少し範圍を擴大し、彼の詩歌に單獨で見える「畫家」あるいは「繪畫」を檢討の對象とする。

崔興宗寫眞　　崔興宗の寫眞（卷十三）

畫君年少時　　君が年少の時を畫く

如今君已老　　如今　君　已に老いたり

今時新識人 今時 新たに識るの人  
知君舊時好 君が舊時の好きを知らん

詩題の崔興宗は、王維の「内弟」、すなわち妻の弟にあたる。崔興宗の「寫眞」すなわち肖像畫は、誰によつて製作されたかは嚴密には不明である。ただ、崔興宗の年少の時期に實際に畫いたにせよ、あるいは年少の時期の容姿を年月が経た後に回想として畫いたにせよ、この「寫眞」の製作者として、姻戚關係にあり、崔興宗にとつて最も身近な畫家でもあつた王維を想定することは充分に可能である。この想定が當を得ているとすれば、王維の描いた「繪畫」を、詩人としての王維が再度「詩歌」によつて詠じるといふ圖式が見出せるだろう。つまり、王維が自認する畫家としての側面と詩人としての側面とが密接に關わつて、この詩は歌われている。

自己のなかに「詩人」と「畫家」としての別個の自我を認めたように、王維は他者のなかに「詩人」と「畫家」の両面を見出した作品がある。

故人張譚工詩善易ト兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之

故人の張譚は詩に工みにして易トを善くし、兼ねて丹青・草隸を能す。頃ご  
ろ詩を以て贈られ、聊か之に酬ゆるを獲たり（卷六）

不逐城東遊俠兒	逐はず 城東の遊俠兒
隱囊紗帽坐彈碁	隱囊 紗帽 坐して碁を彈つ
蜀中夫子時開卦	蜀中の夫子 時に卦を開き
洛下書生解詠詩	洛下の書生 解く詩を詠ず
藥蘭花逕衡門裏	藥蘭 花逕 衡門の裏
時復據梧聊隱几	時として復た梧に據り 聊か几に隱る
屏風誤點惑孫郎	屏風の誤點 孫郎を惑はし
團扇草書輕内史	團扇の草書 内史を輕んず
故園高枕度三春	故園 枕を高くして三春を度り
永日垂帷絕四鄰	永日 帷を垂れて四鄰を絶つ
自想蔡邕今已老	自ら想ふ 蔡邕 今 已に老いたり
更將書籍與何人	更に書籍を將て何人にか與へん

第七句は『吳錄』（『三國志』「吳書」卷六十三「趙達傳」の裴松之注所引）にある孫權と曹不興の故事を典故とした表現であり、張譚が繪畫に秀でたことを示している。詩題によれば、張譚は、詩歌・繪畫に限らず、「易卜」や「草隸」（『書法』）にも長じた多藝多才な人物であったようであり、その名は『唐才子傳』や『歷代名畫記』にも記録されている。<sup>\*</sup>この詩のなかで張譚が詩人であり、かつ畫家であることを（易や書という他の才能にも言及しつつ）王維は同時に認識し、表明している。なお、この詩においても、基本的には詩人と畫家のあいだに貴賤の序列をつけていない。

\*張譚については、王維には右の詩の他に三首連作の「戲贈張五弟譚」（戲れに張五弟譚に贈る）（卷二）が存在する。この詩の第二首の第二聯には、

……

染翰過草聖　　翰を染むれば　　草聖を過ぎ

賦詩輕子虛　　詩を賦せば　　子虚を輕んず

……

とある。張譚が能書家であったことは、前述の「故人張譚：能丹青草隸……」詩にも確認される。そして、この「戲贈張五弟譚」其二でも、王維は張譚が「詩人」であると同時に、「書家」であると認識している。つまり、王維にとって、書家は畫家とともに、詩人と並列的に認識することができることを示している。確かに、書と繪畫との間には特質の差違が存在する。<sup>(8)</sup>しかし、「詩人」と並置して認識することが可能である点において、「書家」と「畫家」は、王維にとってほぼ等價の存在なのであろう。

ここまで、王維は詩のなかで「畫家」に言及するだけでなく、詩人と畫家の兩側面を兼備することが可能と考えていたことを論じてきた。そして、その二つの側面は、序列を與えられたものではない、いわば同位の関係にあるのではないか。

ところで、詩のなかで「畫家」に言及すること、さらに「詩人」と「畫家」とを同位的に並列することは、畢竟、詩畫いずれも創作した王維にのみ見られる特異な現象であるのか、否か。次にその問題を考察したい。

### 三 唐詩における「詩人」と「畫家」

唐詩のなかで「詩人」と「畫家」はいかなる関係として描かれているのであろうか。まず、「詩人」と「畫家」の雙方に、一首のなかで同時に觸れている作例は極めて少なく、わずかに次の四首しかない。

奉陵宮人 陵に奉じるの宮人 杜牧<sup>(9)</sup>

相如死後無詞客 相如 死して後 詞客 無く

延壽亡來絶畫工 延壽 亡して來かた 畫工 絶ゆ

玉顏不是黃金少 玉顏 是れ黃金 少きがためならず

淚滴秋山入壽宮 淚は秋山に滴りて壽宮に入る

壺公山 壺公山 黃滔<sup>(10)</sup>『唐』卷七百六

畫工飛夢寐 畫工 夢寐に飛び

詩客寄林泉 詩客 林泉に寄す

……

貫休應夢羅漢畫歌 貫休 夢に應ずるの羅漢畫の歌

歐陽炯<sup>(11)</sup>『唐』卷七百六十一

西嶽高僧名貫休 西嶽の高僧 貫休と名づく

孤情峭拔凌清秋 孤情 峭拔として 清秋を凌ぐ

天教水墨畫羅漢 天 水墨をして羅漢を畫かしめ

魁岸古容生筆頭 魁岸たる古容 筆頭に生ず

……

五七字句一千首 五七の字句 一千言

大小篆書三十家 大小の篆書 三十家

唐朝歷歷多名士 唐朝 歷歷として 名士 多く

蕭子雲兼吳道子 蕭子雲 兼 吳道子

若將書畫比休公 若し書畫を將て休公に比ぶれば

只恐當時浪生死 只だ恐る 當時 浪りに生死するを  
 休公休公始自江南來入秦 休公 休公 始め江南より來りて秦に入る  
 於今到蜀無交親 今に於いて蜀に到らば 交親 無からん  
 詩名畫手皆奇絶 詩名 畫手 皆な奇絶  
 覩你凡人爭是人 你を覩れば 凡人 争でか是の人ならん  
 ……

過南城縣麻姑山其二 南城縣の麻姑山に過る 其の二

崔櫓〔唐〕卷八百八十四

詩手難題畫手慚 詩手 題し難く 畫手 慚づ  
 淺青濃碧壘東南 淺青 濃碧 東南に壘す  
 ……

第三の歐陽炯の詩は、畫僧であり、詩僧でもあった禪月大師貫休の羅漢畫を詠じたものであり、その貫休に詩人と畫家の兩側面が存在していることを示している。このような關係は、前節で検討した王維の詩のそれと基本的に類似している。

一方、他の三首は、一箇の人物の兩側面を述べた例ではない。しかし、重要なことは三首ともに、「詞客」(詩人)と「畫工」(畫家)が對句、もしくは對偶關係のなかで配置されている點である。よって、この三首の詩において「詩人」と「畫家」は同列の關係にあると判断できよう。

さらに、「詩人」と「畫家」という明確な表現ではないものの、兩者を密接な關係のものとしてとらえた例が存在する。

畫木蓮花圖寄元郎中 木蓮花圖を畫きて元郎中に寄す 白居易<sup>(12)</sup>  
 花房賦似紅蓮朶 花房 賦なること 紅蓮朶に似たり  
 艷色鮮如紫牡丹 艷色 鮮かなること 葉牡丹の如し  
 唯有詩人應解愛 唯だ 詩人 有りて應に解く愛すべし  
 丹青寫出與君看 丹青もて寫出して君に與えて看しめん

この詩は、白居易が自ら繪筆をとったかのようにも、畫工に描かせたようにも解釋でき

る。<sup>(13)</sup> いずれにせよ、白居易は木蓮の花を繪畫に描いて、詩友の元稹に送ったことを記している。この詩においては、二人の詩人を連絡する媒體として、繪畫が存在している。その繪畫は、特別に許された畫工（あるいは畫家となった白居易自身）がいて、本來であれば詩人のみが鑑賞できる景物を、その巧みな技で描き出したものなのである。ここにおいて繪畫は、美を傳達するための不可缺の媒體と位置づけられ、元稹はこの繪畫を通して、白居易と共に木蓮の花を愛でることができると期待されている。そして、畫家が詩人間の交往を補助していることに注目したい。

桃源圖 桃源圖 韓愈<sup>(14)</sup>

……

武陵太守好事者 武陵の太守 好事の者  
題封遠寄南宮下 題封 遠く寄す 南宮の下  
南宮先生忻得之 南宮の先生 之を得るを忻び  
波濤入筆驅文辭 波濤 筆を入れ 文辭を驅す  
文工畫妙各臻極 文工 畫妙 各おの極に臻り  
異境悅惚移於斯 異境の悅惚 斯に移る  
……

この詩は、直接的には作品としての詩歌と繪畫の卓絶していることを示している。しかし、そこにはそれぞれ「武陵太守」、「南宮先生」という創作者が明示されており、この詩において、「詩人」と「畫家」を同位的に認識していることが看取できる。

ところで、このように、唐詩においては、詩人と畫家とを一篇の詩中に並置する詩は、王維の作例を含めても非常に少ない。

それでは、「詩人」には觸れず、ただ「畫家」についてだけ言及する詩はどうであろうか。以下に、作者と詩題、該當箇所を示す。（以下、『全唐詩』に依據した）

張九齡 「題畫山水障」(『唐』卷四十七)

良工適我願、妙墨揮巖泉

杜甫 「奉先劉少府新畫山水障歌」

畫師亦無數、好手不可遇(『唐』卷二百十六)

「畫鵲行」〔《唐》卷二百十七〕

乃知畫師妙、功刮造化窟

「題李尊師松樹障子歌」〔《唐》卷二百十九〕

已知仙客意相親、更覺良工心獨苦

「姜楚公畫角鷹歌」〔《唐》卷二百二十〕

觀者貪愁掣臂飛、畫師不是無心學

「丹青引贈曹將軍霸」〔《唐》卷二百二十〕

先帝天馬玉花驄、畫工如山貌不同

「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」〔《唐》卷二百二十四〕

畫手看前輩、吳生遠擅場

「送鄭十八虔貶臺州司戶傷其臨老陷賊之故闕爲面別情見於詩」

〔《唐》卷二百二十五〕

鄭公樛散鬢成絲、酒後常稱老畫師

文宗皇帝「題程修己竹障」〔《唐》卷四〕

良工運精思、巧極似有神

錢起「畫鶴篇」〔《唐》卷二百三十六〕

點素凝姿任畫工、霜毛玉羽照簾櫳

竇羣「觀畫鶴」〔《唐》卷二百七十一〕

悵望沖天羽、甘心任畫師

朱灣「題段上人院壁畫古松」〔《唐》卷三百六〕

安知草木性、變在畫師手

權德輿「桃源圖」〔《唐》卷三百二十九〕

小年嘗讀桃源記、忽睹良工施繪事

韓愈「遊城南十六首 楸樹」〔《唐》卷三百四十三〕

不得畫師來貌取、定知難見一生中

劉禹錫「答東陽于令涵碧圖詩」〔《唐》卷三百六十一〕

落在尋常畫師手、猶能三伏凜生秋

元稹「畫松」〔《唐》卷三百九十八〕

流傳畫師輩、奇態盡埋沒

白居易 「病中詩十五首 自解」〔唐〕卷四百五十八)

房傳往世爲禪客、王道前生應畫師

徐凝 「觀釣臺畫圖」〔唐〕卷四百七十四)

畫人心到啼猿破、欲作三聲出樹難

姚合 「和李補闕曲江看蓮花」〔唐〕卷五百二)

畫工投粉筆、宮女棄花鈿

張祜 「題山水障子」〔唐〕卷五百十)

一見秋山色、方憐畫手稀

薛能 「碧鮮亭春題竹」〔唐〕卷五百六十)

已聞圖畫客、兼寫薛先生

賈島 「贈僧」〔唐〕卷五百七十四)

常恐畫工援筆寫、身長七尺有眉毫

皮日休 「臨頓爲吳中偏勝之地陸魯望居之不出郭郭曠若郊墅余每相訪欸然惜去因成五言十

首奉題屋壁」其十〔唐〕卷六百十二)

畫臣誰奉詔、來此寫姜肱

吳融 「壁畫折竹雜言」〔唐〕卷六百八十七)

不是從來無本根、畫工取勢教摧折

曹松 「霍山」〔唐〕卷七百十七)

直是畫工須閣筆、況無名畫可流傳

「桂江」〔唐〕卷七百十七)

如飛似墮皆青壁、畫手不強元化強

譚用之 「貽費道人」〔唐〕卷七百六十四)

吟歌雲鳥歸樵谷、臥愛神仙入畫家

貫休 「題弘式和尚院兼呈杜使君」〔唐〕卷八百三十二)

臘高雲屐朽、貌古畫師疑

齊己 「靈松歌」〔唐〕卷八百四十七)

安得良工妙圖牘、寫將偃蹇懸煙閣

前述した王維や杜牧の詩などを含めて「畫家」に關する語を直接に詩中に用いる作品は、



約五萬首の唐詩のなかにわずか三十四首ほどしかない。その他、王維の「故人張諱……」や韓愈の「桃源圖」など「畫家」の存在が確認できる詩を含めたとしても、唐詩中において畫家について言及すること自體、決して多くない。そして、全てが畫家を稱賛しているわけではないとはいえ、このような詩が盛唐期以降に現れ、特に王維と同時代の杜甫に複數の例があるのが注目される。<sup>(15)</sup>つまり、既に検討したように「詩歌」のなかで、直接に「畫家」に言及することは、王維・杜甫などの盛唐期の詩人によつて開始されたといつてよいのではないか。

ところで、北宋後期以後、詩人と畫家とを「文人」という觀念の中に意識的に融合することが廣汎かつ明確に見られ、それはしばしば詩歌のなかに表現されている。詩歌のなかにおいて「畫家」に言及することは、そのための基本的前提の一つであろう。そして、王維や杜甫はまさに詩中で「畫家」に言及した先驅的存在であった。それでは、なぜ盛唐期の彼等が先驅者たり得たのであろうか。次にその要因を考えてみたい。

#### 四 要因

何故、盛唐期の王維や杜甫が詩中において「畫家」に言及する先驅者となったのだろうか。この點をめぐつて、李亮偉氏は王維「偶然作」其六にふれるなかで、文章は「經國の大業」〔『文選』卷五十二所引、魏・曹丕「典論・論文」〕であり、從來、詩歌の地位は繪畫のそれよりも高かつたために、ある人物が詩畫ともに長じているとすれば、人々はまず詩を稱賛すると述べている。<sup>(16)</sup>しかし、その基本的情況は宋代においても變化しておらず、そうであるならば、後世、王維の畫が詩とともに高く評價された事實や、北宋後期以降に顯著になる詩人と畫家の融合という現象をどのように説明すればよいのだろうか。さらに、唐代には、

丹青之興比、雅頌之述作、美大業之馨香。宣物、莫大於言、存形、莫善於畫。<sup>(17)</sup>

（丹青の興比、雅頌の述作、大業の馨香を美みす。物を宣するに、言より大なるは莫く、形を存するに、畫より善きは莫し。）

が西晉の陸機の言葉として伝えられており、繪畫の地位が詩歌よりも低かつたとは單純には斷定できない。したがって、畫家についても、少なくとも詩人が言及することを憚るよ

うな社会的底邊の存在とは見なされていなかったはずである。

ところで、唐代の畫家の實態はいかなるものであったのだろうか。『歴代名畫記』を調査すると、六朝期では琅琊の王氏から四人、陳郡の謝氏から三人、梁の皇族である蕭氏から四人が明記されている。この數字に示されるように、繪畫は皇族・貴族も参加するにふさわしい上層の藝術領域であった。その後、唐代では、確かに専門の技巧を有する職業畫家が繪畫の主な擔い手となった。吳道玄などはその代表的人物である。しかし、『歴代名畫記』は、皇族・宗室十一名（皇帝は除く）に加えて、文官三十五名の名を記録している。皇族や宗室の参加は六朝以來の傳統であるとして、注目すべきはそれ以外の文官である。そこには閻立本や韓滉など宰相に至ったものもあり、王維もまた高官に至った一人である。これら文官は、一義的には詩文を創作する階層であるが、彼らの一部は繪畫の鑑賞者であるに止まらず、實際に繪畫の創作にも参加したのである。このように六朝から唐代の情況を考察すると、畫業そのものを卑賤なものとする意識の存在は考えられず、それゆえ、詩人が畫家に言及することがその詩歌の價値を下げる恐れは全くなかったと見るべきであろう。それでは、何故、盛唐期の王維や杜甫が先驅者となり得たのであろうか。王維について言えば、その年少期に理由が求められるだろう。王維の繪畫への關心が年少から存在していたことは、次の詩から窺える。

題友人雲母障子 友人の雲母障子に題す（卷十三）

君家雲母障 君が家の雲母障

持向野庭開 持ちて野庭に向ひて開く

自有山泉入 自から山泉有りて入る

非因彩畫來 彩畫に因りて來たるに非ず

それについて、この詩の原註に「時年十五」とあることを根據にした指摘がある。<sup>(18)</sup>「雲母障」は山水が描かれていた屏風ではない。しかし、王維がそれを「山水畫」に見立てたことが重要である。つまり、この詩は山水畫に對する濃厚な關心を前提として成立している。

ところで、この十五才という年齢は王維が科擧の豫備試験である京兆府試に應じる四年前であり、當然、科擧及第のための活動を行っていただろう。それには經史や詩賦の學習にとどまらず、新舊『唐書』が記録するように、唐朝諸王等との交遊も含まれるとみてよい。その交遊を促すためには、詩文に限らず、他の藝術にも通曉することが求められただ

ろうし、そのなかには當然繪畫も含まれていたのではないか。そうであるならば、個人的な趣味、あるいは生得的な資質だけをもって王維は繪畫に接しはじめたのではなく、現實の交遊における必要も手傳つて繪畫への造詣を深めていった可能性が高い。そして、この繪畫への造詣が、王維に繪畫創作の基礎を與え、一方でその詩において畫家に言及させる要因になったと考えられる。

一方、杜甫をめぐっては、王維のような幼少期における王侯との交遊のみならず、安史の亂以後の宮廷畫家の流出も考慮する必要がある。宮廷樂士の李龜年が安史の亂以後の混亂のなかで江南に流浪していたように、畫人も多く地方を流浪せざるを得なかった。たとえば、廣徳二年（七六四年）の成都における作品である先述の「丹青引贈曹將軍霸」では、もともと宮廷畫家であった曹霸が「即今 漂白す 干戈の際」という情況に陥つたことを述べる。また、玄宗から詩書畫の「三絶」と激賞されたものの、安史の亂後、臺州司戸に左遷された鄭虔も、畫人流出の類似例とみるべきであろう。このような宮廷畫家の民間流出は、杜甫が詩中において畫家に言及する契機の一つであるとともに、一般に詩人と畫家との接觸の機會を増加させたと考えられる。

また、唐代には、畫論が詩論とともに積極的に創出されたことも注目される。『新唐書』「藝文志」には、唐代以前の畫論は十種、詩論は十三種著録されており、畫論が詩論と同程度盛行していたことが窺える。ところで、このような畫論の盛行は、繪畫鑑賞の隆盛と密接に關係している。繪畫鑑賞が畫論を深化させ、一方、畫論が鑑賞に明確な基準を提供するという雙方向の關係が認められよう。そして、その両方に文官もしくは文人が關わることにより、本來異なる表現形式であるはずの詩歌のなかで繪畫が言及されることにもなったと考えられる。そして、このような詩歌の繪畫への接近は、また同時に詩人の畫家への接近を促進させたのではないか。

繪畫の鑑賞は、唐代において六朝以來の傳統を持つ文化であった。ただ、その風潮のなかで、詩歌において「畫家」に言及することは盛唐まで行われず、その後、唐一代を見ても普遍的な現象ではなかった。しかし、それは畫家の文化的位置が低かったことによるものでは決していない。繪畫鑑賞が文人による繪畫の創作を促進、發展させ、また畫論を盛行、進展させたことによつて、詩人と畫家との距離は短縮し、その結果、「詩人」が詩のなかにおいて「畫家」に言及することができるようになったのである。そこには宮廷畫家の流出による詩人と畫家が直接に接觸する機會が増加したことも大きく關係しているのではないだろうか。そして、これらの諸條件が整い始めたのが盛唐期であり、そのため王維や杜甫

など盛唐以降の詩人が詩中において畫家に言及する先驅者となり得たのである。

## 五 小結

唐代において、「詩人」がみずからの詩のなかで「畫家」に言及すること、まして「詩人」と「畫家」を並置することは稀有な現象であった。しかし、六朝以來の繪畫鑑賞による文人の繪畫創作の促進・發展、および畫論の盛行・進展、そして盛唐期以降の宮廷畫家の流出を契機として、「畫家」を詩歌に詠じる「詩人」が出現したのではなからうか。その時、自らは創作こそ行わなかったものの、繪畫の純粹な鑑賞者であった杜甫とともに重要な人物だったのが自ら繪筆を手にした王維であった。

唐代以降、とくに盛唐期から中晩唐期を通じて、「詩人」と「畫家」の距離は徐々にではあるが、確實に縮まっていった。結果、北宋後期以降、士大夫が繪畫を活發に創作するという現象を生んでいく。そうであるならば、唐代は詩人と畫家が融合する過程の搖籃期である。その搖籃期において、王維は詩中において「畫家」に言及し、「詩人」と並置した最初の詩人の一人でもあった。後世「南畫」（『文人畫』）の祖とされる王維の詩に果たして繪畫性があるか否か、それを論じることは實際には容易なことではない。<sup>24</sup>しかし、自らの關心や貴顯との交流などを出發點にして、王維が詩において「畫家」に言及し、また「詩人」と「畫家」を同列に置いたこと、その後、そのように詩において畫業や畫家を述べるものが徐々にではあるが、増えていったことにおそらく誤りはなからう。そして、それが廣い範囲で行われるようになった北宋後期こそ、まさに王維の手になる『輞川集』と「輞川圖」という具體的作品が、園林における詩畫合一の典型として評價されるようになった時期であった。したがって、王維が詩において畫家に言及し始めた最初の詩人の一人であることは王維の詩そのものにおける「繪畫性」よりも、重要なことなのではないだろうか。なぜならば、それは『輞川集』と「輞川圖」への評價の變遷と同様、北宋後期における詩畫合一という價值觀の形成と發展という文化史の問題に大きく關係しているからなのである。

## 第三章第一節注

(1) 參照：内山精也「宋代八景現象考」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十集、二〇〇一年一〇月）八八頁。

- (2) 参照：淺見洋二『中國の詩學認識―中世から近世への轉換―』（創文社、二〇〇八年二月初版）、「天開圖畫」の系譜―六朝より宋代に至る風景認識―の「七 中晚唐詩における風景と繪畫」（初出は一九九二年）八四頁。
- (3) 参照：前掲注(2) 淺見著書（特に七三頁―八四頁。引用は八四頁）及び同「六 假」の浸透・遍在」（初出は一九九一年）六九―七三頁。
- (4) 本詩の眞偽については、伊藤正文『王維（中國の詩人五）』（集英社、一九八三年八月第一版）二〇・二二頁が説明するように、眞作とするのが適當だろう。
- (5) 現存の王維の別集では校記を除き、「宿世」としている。「當代（世）」とする資料に、唐・張彥遠『歷代名畫記』（叢書集成初編、上海商務印書館據津逮祕書影印本、一九三六年一月第一版）卷十、宋・郭若虛『圖畫見聞志』（鄧白注本、四川美術出版社、一九八六年一月第一版）卷五、計有功『唐詩紀事』（王仲鏞『唐詩紀事校箋』（中華書局、二〇〇七年一月第一版）卷十六、『施注蘇詩』（廣文書局影印本、一九六四年七月初版）卷二十五「王維吳道子畫」注、袁文『甕牖閑評』（臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本）卷五、元・辛文房『唐才子傳』（傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（中華書局、一九八七年五月第一版））卷二がある。
- (6) 譚朝炎『紅塵佛道覓輞川 王維的主體性詮釋』（中國社會科學出版社、二〇〇四年五月第一版）二八二頁も、本詩の第三句について「或許是謙辭、或許是調侃。」とあるが、理由は示されていない。
- (7) 王維に「秋夜獨坐懷內弟崔興宗」詩（卷二）がある。
- (8) 前掲注(1) 内山論文八九頁。
- (9) 参照：清・馮集梧『樊川詩集注』（上海古籍出版社排印本、一九七八年五月新一版）卷二。
- (10) 『唐』は『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版）を指す。
- (11) 松浦友久氏は、對句・對語など、「表現としての自己完結機能」を本質とする對偶表現が「何らかの共通要素」を前提にすることを述べている。松浦友久『中國詩歌原論―比較詩學の主題に即して―』（大修館書店、一九九六年三月第三版）「中國古典詩における對偶の諸相―唐詩を中心に―」（初出は一九八三年）二六〇―二六三頁を参照。
- (12) 朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年二月第一版）卷十八。
- (13) 参照：澤崎久和「白居易と繪畫」（福井大學教育學部『福井大學教育學部紀要第一 部人文科學（國語學・國文學・中國學編）』第四十號、一九九一年七月）六頁。ただし、

南宋・王十朋「詩史堂荔枝歌」(北京大學古文獻研究所編『全宋詩 第三六冊』(北京大學出版社、一九九八年一月第一版)卷二〇三七)に「樂天會畫忠州圖 自言香味人間無」とあることなどから、白居易自身が繪畫を實作した可能性はある。

(14) 屈守元・常思春『韓愈全集校注』(四川大學出版社、一九九七年六月第一版)六二九頁。

(15) 「畫師」という語は、北宋・郭茂倩『樂府詩集』(中華書局排印本、一九七九年一月第一版)卷二十九「相和歌辭」に、隋・薛道衡「明君詞」、唐・無名氏・沈佺期・郭元振「王昭君」に見える。これらの樂府における畫師は、専ら、利益のために王昭君を陥れた小人の側面が強調されている。一方、杜牧の「奉陵宮人」詩では、司馬相如を故事とする「詞客」と對語・對句になることによって、宮廷において活躍する藝術家としての畫家の側面が中心となっている。

(16) 李亮偉『涵泳大雅——王維與中國文化』(中華書局、二〇〇三年一月第一版)三四〇頁には、「王維自己要說的就是詩和畫。而別人最稱贊的是其詩。為何人們特重其詩？簡單地說、文章乃經國之大業、從來詩的地位都高於作爲“藝”的畫地位。當一個人詩・畫都有高深造詣時、人們首先是稱說其詩」とある。

(17) 前掲注(5)『歷代名畫記』卷一。

(18) 參照：小林太市郎『王維の生涯と藝術』(小林太市郎著作集4)『淡交社、一九七四年四月發行。初出は一九四四年)八・一一六頁。

(19) 『舊唐書』(中華書局排印本、一九七五年五月第一版)卷百九十下「文苑傳下」に「(王)維以詩名盛於開元・天寶間：凡諸王駙馬豪右貴勢之門、無不拂席迎之。寧王・薛王待之如師友」とあり、『新唐書』(中華書局排印本、一九七五年二月第一版)卷二百二「文藝傳中」にも「(王)維工草隸、善畫、名盛於開元・天寶間、豪英貴人虛左以迎。寧・薛諸王待若師友」とある。

この部分については、入谷仙介『王維研究』(創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年)三三―三六頁を參照。また、繪畫とは直接の関係はないが、聞一多「少陵先生年譜會箋」(『聞一多全集』(湖北人民出版社、一九九三年二月第一版)「六唐詩編」。初出は一九三〇年)「開元十三年條」一二七・一二八頁は、「江南逢李龜年」詩を引用し、杜甫が岐王李範や洛陽の崔滌の邸宅で李龜年に逢ったのをこの年以前とする。そうであるならば、杜甫も王維と同様、年少から王侯と逢っており、目的もまた同一と考えるべきではないか。なお、聞一多の説については、長谷部剛「杜甫『江

南逢李龜年』の唐代における流傳について」（早稻田大學中國文學會『中國文學研究』第二十九期松浦博士追悼、二〇〇三年一月）一〇七頁に要約されている。

(20) 前掲注(4) 伊藤著書二四—二九頁は王維の家系を検證し、その結果として王維兄弟に「名門の猗氏房を繼承すべき責務がのしかかっていた」(四一頁)と述べる。そうであるならば、學問・教養を體得し、諸王の邸宅で名聲を得ることはなおさら必要であらう。

(21) 参照：森瀬壽三「杜詩における繪畫と畫人」(關西大學文學部中國語中國文學科編『文化事象としての中國』(關西大學出版部、二〇〇二年三月發行)) 四八頁。

(22) 前掲注(19) 『新唐書』卷五十七・五十九・六十。さらに六朝・唐の畫論については、内藤虎次郎(湖南)『内藤湖南全集 第十三卷』(筑摩書房、一九七三年一月第一版)「唐以前の畫論」(初出は一九〇二年) 三二七—三三七頁、鈴木敬『中國繪畫史上』(吉川弘文館、一九八一年三月第一版)「中國繪畫史研究概觀—中國論畫書を中心に—」(二—六頁も参照)。

(23) 一般には繪畫鑑賞が畫論の成立を促すという一方向性に考えるのが自然である。しかし、内藤虎次郎「支那繪畫史講話」(前掲注(2)) 内藤著書所収。初出は一九二六年) 四八—五〇頁、同「唐以前の畫論」三二七頁によれば、中國においては、畫論が—詩論や書論に先行して—、東晉、あるいは南齊に創出されたという。そうであるならば、その後、たとえば唐代以降においては、既に成立していた畫論によって鑑賞が促されたということも充分考えられる。

(24) いわゆる「詩中有畫」をもとにして、王維の詩の繪畫性を論じる研究は多いなか、蔣寅「對王維『詩中有畫』的質疑」(中國社會科學院文學研究所『文學評論』二〇〇〇年四期) 九三—一〇〇頁はそれを批判する。たとえば「持『詩中有畫』論者所舉的例子、本身也不能自圓其說」(九八頁)とし、「蘇東坡的話作爲一家言、作爲評論的參考固無不可、但若將它作爲王維詩的主體特徵來強調並不無誇大、就不僅是對詩歌藝術特性的漠視、也是對王維詩歌藝術價值的輕估了」(九六頁)、「詩中有畫無畫並不決定於作者是否爲畫家、強調王維『詩中有畫』及與繪畫的關係、不僅不能突出王維的獨特性、某種程度上可能適足遮蔽了形成王維詩風的更本質的東西」、「『詩中有畫』並不能代表王維山水詩的精髓、而且王維本人的創作也顯示出力圖超越繪畫性的意識」(九九頁)と主張する。

## 第四章 『輞川集』の評價

### 第一節 唐代宗による「天下文宗」評について

#### ―王縉の『王維集』献上との關係を中心に―

#### 一 問題の所在

王維は肅宗の上元二年（七六一年）七月頃、没したとされる<sup>(1)</sup>。その死後、かなり早い時期に言及された王維評は次の二點が代表的なものである。

第一は、杜甫の「解悶」詩其人にいう「不見高人王右丞」である<sup>(2)</sup>。王維の人格や藝術を端的に表現するとされるこの「高人」の語は、後に杜甫の文學的地位が高まるにつれて、よく知られるものとなる。

同様に有名なものが、代宗皇帝李豫による「天下文宗」という評價である。この評語は、王維の弟である王縉の上表文に對する答詔に見える。その上表文は、代宗の敕命に應じて『王維集』を献上した際に、あわせて奏上され、その末尾に「寶應二年（七六三年）正月七日」とあり、その献上が、王維が没して僅か一年半後に行われたことがわかる。王維の別集の祖本とされるこの『王維集』の献上をめぐる代宗と王縉の交往は、この上表文と答詔の他に、さらに新舊『唐書』王維傳<sup>(3)</sup>にも見られる。

この「天下文宗」評は、有名ではあるものの、従前の王維研究において、あまり大きな扱いを受けていなかったように思われる<sup>(4)</sup>。しかし、王維の受容史・評價史を考察する上で、その没後、最も早い時期の、しかも皇帝による最上級の評價であるこの代宗の評を軽視することはできない。そして、この代宗の治世中に盛唐から中唐へという中國古典詩史上の重要な轉換期である大暦年間があり、たとえば、王縉が二度にわたり宰相となっていた大暦年間前後において、中央文壇の主要な擔い手となった錢起は、もっぱら王維の後繼者として、その詩文を模範としていた。

しかし、次節で述べるように、中唐の後期に至ると、王維の晩年に喜捨されて清源寺となつた輞川莊を訪れる詩人等は王維あるいはその文學を想起することはほぼなく、『輞川集』についての言及も見えない。中唐のはじめに「天下文宗」とまで評された王維の、特に後世、その代表作とされる『輞川集』の文學史・文化史的位置の變遷については後に論じるが、本節ではそのための出發點として、代宗によるこの「天下文宗」評そのものとその前



提となっている『王維集』の獻上を検討してみたい。それによって、中唐初期における王維の文學に對する評價、及びその評價が果たした時代的作用を明確にすることができるとの思われるからである。

## 二 上表文と答詔における差違

王縉の「進『王維』集」表」とそれを受けて發せられた代宗の「答詔」を分析すると、兩者の間には、王維の記述に、微妙ではあるものの見過ごせない差違が見られる。<sup>(6)</sup>

臣縉言、中使王承華奉宣進旨、令臣進亡兄故尚書右丞維文章。恩命忽臨、以驚以喜、退因編錄、又竊感傷。臣兄文詞立身、行之餘力。當官堅正、秉操孤直、縱居要劇、不忘清靜、實見時輩、許以高流。至於晚年、彌加進道、端坐虛室、念茲無生。乘興爲文、未嘗廢業、或散朋友之上、或流篋笥之中。臣近搜求、尚慮零落、詩筆共成十卷。今且隨表奉進。曲承天鑒、下訪遺文。魂而有知、荷寵光於幽窆。歿而不朽、成大名於聖朝。臣不勝感戴悲歡之至、謹奉表以聞。臣縉誠惶誠恐、頓首頓首。謹言。寶應二年正月七日、銀青光祿大夫尚書兵部侍郎兼御史大夫臣縉表上。

（臣縉言へらく、中使王承華奉じて進旨を宣し、臣をして亡兄の故尚書右丞維の文章を進めしむ。恩命忽ち臨み、以て驚き以て喜び、退きて因りて編錄し、又た竊かに感傷す。臣が兄、文詞もて身を立て、之を行ふに餘力あり。官に當りて堅正、操を秉りて孤直、縱ひ要劇に居れども、清靜を忘れず。實に時輩の、許すに高流を以てするを見る。晩年に至り、彌よ道に進むを加へ、虛室に端坐し、茲の無生を念ふ。興に乗じて文を爲り、未だ嘗て業を廢せず、或ひは朋友の上に散じ、或ひは篋笥の中に流る。臣は近ごろ搜求するも、尚ほ零落を慮る、詩筆共に十卷を成す。今且く表に隨ひ奉進す。曲げて天鑒を承け、下に遺文を訪ふ。魂ありて知る有らば、寵光を幽窆に荷はん。歿して朽せず、大名を聖朝に成す。臣、感戴悲歡の至れるに勝へず、謹しんで表を奉じて以て聞す。臣縉誠に惶れ誠に恐る、頓首頓首。謹言す。寶應二年正月七日、銀青光祿大夫尚書兵部侍郎兼御史大夫臣縉表上す。）

この上表文の第一の特徴は、王維の性格や日常について多く記述されていることである。王縉はそれを「官に當りて堅正、操を秉りて孤直、縱ひ要劇に居れども、清靜を忘れず。

實に時輩の、許すに高流を以てするを見る」という。この「高流」という語は前述の杜甫の評価とも一致する。しかし、王維が安祿山より官職を受けたことも、経緯はともかく、おそらく事實であろう。著名な「菩提寺禁、裴迪來相看説、逆賊等凝碧池上作音樂、供奉人等舉聲。便一時淚下、私成口號、誦示裴迪」(菩提寺の禁に、裴迪の來りて相ひ見て説くらく、逆賊等凝碧池上に音樂を作し、供奉人等聲を擧ぐ、と。便ち一時に涙下り、私かに口號を成し、誦して裴迪に示す)詩(卷十四)の存在があつたとしても、「官に當りて堅正、操を乗りて孤直」ではない、との批判は容易に成立し得る。故に、この部分が、王維に對する社會全體の一致した評價であつたとまで言うことはできないのではないか。しかし、親族による都合の良い、肯定的評價としてとらえるのも適當ではない。

文集を編纂し、提出せよ、との敕命が發せられた以上、王維はその文藝のみならず、人格や起臥の態度まで貞操・高雅な人物として描かれることが望ましい。逆に言えば、敕命という代宗の要請に應じて亡兄の文集を奉じる王縉が、兄の負の側面、あるいはそれにながるような一面をこの上表文に公表することは、要請した側の代宗の權威を傷つけかねない。よつて、そこに現れる王維像は―もちろん實像と重なっている部分もあるのだが―、臣下である王縉が、多分に皇帝である代宗の權威を忖度した上での文言であると考えられる。

第二の特徴は、佛教に關する記述が見られることである。「晩年に至り」以降の句で、それは明瞭であり、また「清靜」の語にも佛教との關係を連想させる。王維は、母の崔氏の影響を受けて、篤い佛教信者であつた。そして、安史の亂後、信仰の性格を變えつつ、王維は従前にもまして佛教に歸依するようになったとされる<sup>(8)</sup>。安史の亂の後の文章に、

況臣夙有誠願、伏願陛下中興、逆賊殄滅、臣卽出家修道、極其精勤、庶裨萬一。

(況んや臣夙に誠願有り、伏して願はくは陛下中興し、逆賊殄滅すれば、臣卽ち出家して道を修め、其の精勤を極め、庶はくは萬が一を裨せんと。)

(「謝除太子中允表」(卷十六))

昔在賊地、泣血自思、一日得見聖朝、卽願出家修道。

(昔賊地に在り、血を泣き自ら思ふ、一日聖朝に見るを得れば、卽ち出家して道を修めんと。)

(「責躬薦弟表」(卷十七))

とあり、王維自身が自らの佛教信仰を述べていると同時に、それが、唐朝再興を願うものでもあることが示されている。ところで、王縉もまた熱心な佛教信者であり、兄の信仰へも理解があつたと推測される。しかし、王縉があえて「晩年」の語を用いた理由を、兄の佛教への歸依が實際にその晩年に深まったことのみ求めるのは、おそらく正確な理解ではなからう。

右に引用した文章や、輞川莊の寄進を願い出た「請施莊爲寺表」（莊を施し寺と爲すを請ふの表）（卷十七）はいずれも上表文である。そして、これら晩年の上表文のなかで、兄である王維がみずからの佛教信仰は唐朝の再興祈願の一環であると表明した事実が、王縉にとって重要なのではないか。亡兄自身による晩年の佛教信仰における眞意の所在の表明、そしてその次代の皇帝による文集献上の救命、この二者は王縉にとって連關しているのである。その結果、弟である王縉は「進『王維集』表」で兄の晩年の佛教信仰に、ことさらに言及したものと考えられる。よって、この佛教信仰の記述も、皇帝を意識し、あるいは皇帝の意を迎えて、王維像を形作ろうとする発言と見るべきではないか。

王維の文學、特にその内容そのものについての記述が少ないことも、この上表文の特徴と言える。<sup>\*</sup>別集の献上という本来の目的からみれば、この點に多くの言辭が費やされるべきだろう。しかし、実際には「文詞もて身を立て、之を行ふに餘力あり」と述べるに止まっている。ところで、前述の二つの特徴からもわかるように、この上表文は皇帝を意識した、政治的配慮を持っている。もし文學にのみ耽溺する王維像を臣下の側から表述した場合、そのような人物の文集を要求することが皇帝の權威にも影響する可能性がある。そのため、王維の文學への言及が抑制的なものとなつたのではないか。しかも、ここでは、王維の性格や日常の記述を通じて、杜甫の詩にいうような「高人」としての王維の人格を重點的に示すことによって、皇帝がその文集が求めるに至つた、倫理的根據を積極的に示すことができる。

\*上表文の後半に「歿して朽せず、大名を聖朝に成す」という語が見える。確かにこれは王維の詩文が永遠に顕彰されることを述べたものではある。しかし、これは文集献上の榮譽を念頭に置いた表現と見られ、王維の文學、特にその内實への言及の抑制的態度と矛盾はしないだろう。

これらの三點の特徴を総合的に考えるならば、王縉は、皇帝の『王維集』獻上の要求という事態のなかで、それをもとめた皇帝の權威を損なわないようとする配慮のもとに王維像を描いたと判断してよからう。

一方、代宗の答詔はどのようなものか。

卿之伯氏、天下文宗。位歷先朝、名高希代。抗行周雅、長揖楚詞。調六氣於終篇、正五音於逸韻。泉飛藻思、雲散襟情。詩家者流、時論歸美。誦於人口、久鬱文房、詎以國風、宜登樂府。盱朝之後、乙夜將觀。石室所藏、歿而不朽、栢梁之會、今也則亡。乃眷棣華、克成編錄、聲猷益茂、歎息良深。

（卿の伯氏、天下の文宗たり。位は先朝に歴し、名は希代に高し。周雅に抗行し、楚詞を長揖す。六氣を終篇に整へ、五音を逸韻に正す。泉は藻思に飛び、雲は襟情に散ず。詩家者の流、時論美に歸す。人口に誦せられ、久しく文房に鬱し、詎ふに國風を以てし、宜しく樂府に登るべし。盱朝の後、乙夜將に觀んとす。石室の藏する所、歿して朽せず、栢梁の會、今や則ち亡ぶ。乃て棣華を眷ひ、克く編錄を成す、聲猷益す茂り、歎息良に深し。）

この答詔は王縉の上表文を承けて發せられたのだが、その性質は上表文と大きく異なる。上表文の第二の特徴であった佛敎に關わる記述は全く見られない。第一の特徴についても、「位は先朝に歴し、名は希代に高し」と簡單に記述されるのみである。一方、上表文では抑制されていた文學への言及が、ほぼ全編に見られる。たしかに、「周雅」「詩家」「國風」などの『詩經』に關わる語彙に儒家的詩敎觀を見出すこともできないが、對句を作るための修辭としての意味合いが色濃く、王維の文學に政治的色彩を強く投射したものではないと思われる。

なぜ、兩者にこのような差違が生じるのか。第一に考えられる理由は、代宗の若き日の體験に基づく、王維の文學（詩歌）への個人的愛好であろう。それを裏付けるように、『舊唐書』卷百九十下「文苑傳下」に、

代宗好文、常謂（王）縉曰、「卿之伯氏、天寶中詩名冠代、朕嘗於諸王座聞其樂章。

今有多少文集、卿可進來。」縉曰、「臣兄開元中詩百千餘篇、天寶事後、十不存一。比

於中外親故間相與編綴、都得四百餘篇。」翌日上之、帝優詔褒賞。

(代宗、文を好み、常に(王)縉に謂ひて曰く、「卿の伯氏、天寶中に詩名代に冠し、朕は嘗て諸王の座に於いて其の樂章を聞く。今、多少の文集有らば、卿進來すべし」と。縉曰く、「臣が兄、開元中に詩百千餘篇、天寶事後、十に一も存せず。比ごろ中外の親故の間に於いて相ひ與に編綴し、都て四百餘篇を得たり」と。翌日之を上り、帝優詔して褒賞せしむ。)

とある。しかし、このような個人的な文學愛好は代宗の答詔に王維の文學に關する記述が多いことを示すだけで、王縉の上表文と代宗の答詔とが對應しないことの理由を、なお充分には説明できないであろう。

ところで、王縉の上表文に正面から對應した場合、王維の官歴に觸れなければならない。その場合、直接、それに言及するか否かにかかわらず、王維が反亂軍から「僞官」を受けたことが意識されることになる。假にそれが問題となつた場合、親族であり、現役の朝官でもある王縉の面目を汚すばかりか、王維を許した父の肅宗や文集を要求した自らの權威にも影響しかねない。このことを意識するならば、『王維集』を要求する立場の代宗にとっては、上表文の内容をひとまず無視して、その詩文に言及するだけで充分である。結果、上表文と答詔の間に微妙な齟齬が生じたのではないか。

上述してきたように、王縉の記述は『王維集』を要求した皇帝あるいは唐朝の權威保全を意識したものとなつている。一方、代宗の回答は王維の文學への愛好を示しつつ、あえて上表文と對應させないことによつて、やはり唐朝の權威を意識したものであると思われる。つまり、兩者の言う内容がかみ合わない、という事實の背後には、王縉・代宗ともに唐朝の權威に對する周到な配慮があつたことが明らかになる。

### 三 唐代における別集の獻上

ところで、唐代には、王維のように、個人の文集である別集の獻上を皇帝によつて命ぜられる例はあるのだろうか。この點は從來の研究ではほとんど指摘されなかつた。しかし、これを総合的に考察することによつて、代宗が王維に賦與した「天下文宗」という評價の性格を明確にすることができるのではないか。

筆者の調査によれば、少なくとも現存資料を見る限り、敕命による別集の獻上や編纂は數えるほどしかない、至つて特殊な例である。<sup>八一</sup>以下、その具體例を示す。

及韋庶人敗、(上官)婉兒亦斬於旗下。玄宗令收其詩筆、撰成文集二十卷、令張說爲之序。

(韋庶人の敗るるに及び、(上官)婉兒も亦た旗下に斬らる。玄宗其の詩筆を收めしめ、撰じて文集二十卷を成し、張說をして之が爲に序あらしむ。)

〔『舊唐書』卷五十一「后妃傳」〕

文宗好文、尤重(盧)綸詩、嘗問侍臣曰、「盧綸集幾卷。有子弟否。」李德裕對曰、「……」即遣中使詣其家、令進文集。(盧)簡能盡以所集五百篇上獻、優詔嘉之。

(文宗、文を好み、尤も(盧)綸の詩を重んじ、嘗て侍臣に問ひて曰く、「盧綸の集幾卷ならん。子弟有るや否や」と。李德裕對へて曰く、「……」と。即ち中使をして其の家に詣らしめ、文集を進めしむ。(盧)簡能盡く集むる所の五百篇を以て上獻し、優詔して之を嘉す。)

〔『舊唐書』卷百六十三「盧簡辭傳」<sup>(12)</sup>〕

(徐)敬業敗、伏誅、(駱賓王)文多散佚。則天素重其文遣使求之。有袁州人郟雲卿集成十卷、盛傳於世。

(徐)敬業敗れ、誅に伏し、(駱賓王)の文多く散佚す。則天、素より其の文を重んじ使を遣はして之を求めしむ。袁州の人の郟雲卿有り、集めて十卷と成し、盛んに世に傳はる。)

〔『舊唐書』卷百九十下「文苑傳下」〕

奉宣令狀、臣進來者。……臣往在弱齡、即好詞賦、性情所得、衰老不忘。……謹錄新舊文十卷進上。

(奉じて令狀を宣し、臣をして進來せしむる者なり。……臣往て弱齡に在り、即ち詞賦を好み、性情の得る所、衰老なるも忘れず。……謹んで新舊の文十卷を録し進上す。)

(李德裕「進新舊文十卷狀」<sup>(13)</sup>)

ここで注目したいのは、自己の文を献上した李德裕を除き、対象となった人物には共通

の特徴が見られることである。第一の特徴は、皇帝は対象者の政治的経歴を問わず、別集の献上・編纂を行わせている点である。たとえば、上官婉兒（昭容）や駱賓王はいわば叛逆者である。王維にも、安祿山の「偽官」を受けた事實がある。盧綸も後に元載・王縉らに連座したという大きな負的側面を持つ。しかし、別集の編纂において、彼らの負の経歴が影響したふしはない。おそらくは、皇帝の関心が第一に文學にあり、あるいは彼らの文學が皇帝の文學的志向と合っていたからであろう。

しかし、次の點に注目したい。それは、上官婉兒・王維・盧綸のいずれもが宮廷詩人の側面を持っていることである。また駱賓王は宮廷詩人でこそないが、則天武后はその文章を名文であることを認め、このような人物を用いなかったことについて宰相を叱責している。つまり、所謂宮廷詩人ではないが、文學の才能によって朝廷に呼ばれる可能性を持っていた詩人ともいえる。宮廷詩人、あるいは宮廷で登用すべきとした詩人の作品の編纂を、皇帝が命じたことは、やはり單なる個人的愛好には止まらないと思われる。彼らの作品が自身や唐朝にとって望ましいものと、文集の献上を命令する側、つまり皇帝の側が考えていたのではないか。

ところで、唐代には、書籍の蓄積は必要に應じて數次にわたり行われた。そして、宮中の藏書を増やすという現象は、いわば文教政策の一面を含んでいる。別集もその対象であるが、このような廣範圍の収集とは別に、特定の詩人について編纂、献上があえて命ぜられることは、やはり特別な意味を持つ。つまり、これらの作品が、皇帝個人の志向と合致すると共に、加えて唐朝の文教政策上においても特に収集する価値があると判断されたのではないか。その価値とは、狹義の政教的側面に限られない。國家と皇帝の權威を壯麗に飾る機能も、その文學の價値に含まれるのである。

『王維集』もそのような特殊な一例である。代宗の答詔には、「石室に藏する所、歿して朽ちず」とあり、それが宮中の書庫に永久に保存されていくものであることが表明されている。先に、「周雅」「詩家」「國風」「樂府」など儒家的詩歌觀を意識した語に必ずしも政治的色彩は強くは投射されていないと述べたが、この深層の文脈に置くとき、やはり唐という國家の文教政策と何ほどか關連していよう。このように、『王維集』の編纂、献上は、代宗個人の體驗に基づく王維詩文への愛好とあわせて、代宗朝の文教政策の一環としての側面を持つ。そして、そこに現れた「天下文宗」という評價も、大曆へと連なるこの文教政策という文脈で考えるべきものであろう。

#### 四 代宗即位前後の中央文壇の情況

ここまで、王縉の上表文と代宗の答詔の間の差違に着目し、その背後に唐朝の權威に對する、君臣雙方の配慮の存在を確認し、ついで唐代における救命による別集の編纂、獻上についての調査から、それに文教政策という重要な一面を持つていたことを推論した。それでは、なぜ、この即位間もない時期に代宗は、『王維集』を求め、「天下文宗」という評價を與えたのか。この問題を考える手がかりとして、代宗即位前後の長安における文壇の情況に着目したい。

『隋唐五代文學編年史(中唐卷)』<sup>(ハ17)</sup>は天寶十五載にはじまり、この間の情況を整理するには、きわめて都合がよい。以下、これによつて長安回復以後にこの地に居住・滞在したと思われる文人をあげておく。

至德二載 九月 (長安回復)

十月 錢起<sup>(ハ18)</sup>

十一月 杜甫

十二月 王維・杜甫

至德三載・乾元元年 正月 岑參・杜甫・王維

二月 蘇端・賈至・王維・杜甫・岑參

三月 嚴武・徐浩・王維・錢起・杜甫・岑參・司空曙・賈至(↓汝州)

六月 房琯・劉佚・嚴武・杜甫(いずれも離京)

九月 王維・李嘉祐

(本年) 李翰・徐浩

乾元二年 三月 錢起(藍田)・岑參・王維

五月 高適・岑參(↓虢州)

九月 元結・薛據・王維・李嘉祐(↓鄱陽)

上元元年 二月 元結

五月 王維

八月 顏真卿(↓蓬州)

十一月 王維

(本年) 戎昱



上元二年 七月 王維（没）

十一月 錢起

寶應元年 正月 岑參

四月 （代宗即位）

九月 嚴武・郎士元（渭南）

十二月 郎士元（渭南）

寶應二年・廣德元年 正月 岑參・（『王維集』獻上）

二月 耿湜

三月 錢起（藍田）・郎士元（渭南）

九月 岑參・嚴武・錢起

十月 錢起

十二月 賈至・張謂

ここから理解されるのは、王維の晩年のみならず、その没後も、中央に文人と呼べる存在がほとんどいなかったことである。特に王維の没後では、長安とその周邊には、岑參・錢起・嚴武・郎士元などしか確認できない。いずれにせよ、長安回復の後、代宗の即位直後まで「中央文壇」は空白と呼べるほどの状況であった。安史の亂とその後の混亂のなかで、その空白は、あるいは現實以上に強く感じられたかもしれない。

代宗の答詔には「栢梁の會、今や則ち亡ぶ」の語が見える。これは直接的には、天寶年間における、王維を含んだ朝廷の詩會が既に消滅したことを示す。<sup>20</sup>同時に、安史の亂以降の中央文壇の空白をも意味しているのだろう。このような状況に陥った中央文壇を回復するためには、個々の人材を呼び寄せるだけでは足りない。さらに、長安、―より限定すれば朝廷―において創作されるにふさわしい文學についての明確な規範が提示される必要があったのだろう。その規範こそ、王維の文學であったのではないか。つまり、『王維集』獻上の要求とそれを支えた「天下文宗」の評価は、文學を手段とする文化再興、―國家の禮樂的秩序の再構築において、王維の文學を重要な規範として提示したものと考えられる。言い換えれば、代宗の即位直後に、この評價を敢えて示すことによつて、皇帝の個人的愛好に依りつつ、その治世における文學的規範を鮮明にしたのである。

王維の文學を中央文壇の規範とする代宗の意圖を、王縉も當然、理解していたと思われる。故に、「進『王維集』表」に見られるように、唐朝や皇帝の權威には、十分配慮せねば

ならなかった。一方、代宗自身にとっても、王維はその文學を重要な規範とするのにふさわしい人物である必要があっただろう。そうであるならば、朝廷を主とする中央文壇で規範化されるのに不適当な部分は排除されねばならない。安祿山から「僞官」を受けたことは、もちろん、その最たるものである。代宗が唐朝の權威を意識する時、これに觸れないよう、専ら王維の文學にのみ言及したのである。つまり、既に確認したような唐朝の權威への配慮は、文教政策としての文化再興のなかで王維の詩文を規範とすることから生まれた、と言える。

視点を轉ずれば、代宗は寶應元年に、既に當塗で歿した李白をそうとは知らずに、左拾遺として任官したことが、劉全白「唐故翰林學士李君碣記」及び范傳正「李白新墓碑」に述べられている。<sup>21</sup>この任官の経緯は必ずしも明確ではないが、王維や『王維集』をめぐる状況と重なる部分があると思われる。李白は永王李璘の軍に参加し、叛徒として扱われた。既に恩赦を受けていたとはいえ、反逆者の一黨であったことに相違なく、しかも高齢でもあった。このような人物を長安に召還し、諫職につけることは異例であり、これが事實ならば冒險的な決定であると言わざるを得ない。しかし、遡れば、この李白も、天寶元年秋から同三載春までの第二次在京期<sup>22</sup>に翰林供奉として、また宮廷詩人として宮中に出入していた。十六歳から十九歳の青年期に、その記憶を持つ代宗にとって、李白は、彼一人をもつて中央文壇の大きな空白を埋めるに足るほどの人物だったのではないか。つまり、文學による文化再興という點において、李白は、既に歿していた王維とともに最適の人物だったのである。

ところで、王維と李白では、宮廷詩人の一面を共有するものの、経歴も、そして詩風も大きく異なる。この點を代宗が理解していたとすれば、王維と李白に對する代宗の一連の行動は、個人的な文學愛好よりも、文教政策としての文化再興の側面が強くなるかもしれない。いずれにせよ、李白に關する代宗の行動は、王維集獻上の救命とそれに對する「天下文宗」の評価には體驗に基づく個人的愛好の側面と政治的意味を持つ文化再興の側面が併存しているという本論文の主張を傍證するものといえよう。<sup>23</sup>

## 五 小結

本節では、『輞川集』の評価を考える前提として王維に對する唐の代宗の「天下文宗」評についていくつかの問題を指摘、検討してきた。『王維集』の別集の編纂・獻上の救命は、

唐代においてもほとんど例のない特殊なものであり、文教政策的意義を有していた。そしてそれを支えた「天下文宗」という評価によって、王維の詩文は、中央文壇が空白であった代宗即位直後における文學的規範となった。このような王維の文學を規範化する意圖が代宗・王縉に共通して存在したからこそ、両者は唐朝や皇帝の權威を意識し、それが「進『王維集』表」と代宗の答詔における齟齬につながっていった。その規範化には代宗個人の文學的愛好とともに、—あるいはそれ以上に、—文學による文化再興という政治的意味も存在したと考えられるのである。

この評價によって規範化された王維の文學は、實際に、その後の大曆の詩人に繼承されていく。特に輞川のあつた藍田にも赴任し、生前の王維と實際に交往があつた錢起にその傾向が強い。そして、彼によって輞川や藍田は歌われていく。しかし、冒頭でも述べたように、唐代、『輞川集』への言及はほとんど見られず、それは宋代まで待たなければならなかつた。この過程については次節にて考察する。

#### 第四章第一節注

(1) 清・趙殿成「右丞年譜」(卷末)及び陳鐵民『王維論考』(人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版)「王維年譜」(初出は一九八二年)三七—四〇頁、張清華『王維年譜』(學林出版社、一九八九年九月第一版)一四三・一四四頁を參照。

(2) 清・仇兆鰲『杜詩詳注』(中華書局排印本、一九七九年一〇月第一版)卷十七。所引の鶴注によれば、大曆元年(七六六)の作とする。

(3) 本論文では、いずれも中華書局排印本の『舊唐書』(一九七五年五月第一版)と『新唐書』(一九七五年二月第一版)を使用する。なお該當部分について、『新唐書』卷二百二「文藝傳中」に、「寶應中、代宗語縉曰、『朕嘗於諸王座聞維樂章、今傳幾何。』遣中人王承華往取、縉哀集數十百篇上之」とある。『舊唐書』については後述する。

(4) 孫明君「天下文宗 名高希代—唐代宗期待視野中的王維詩歌」(陝西師範大學『陝西師範大學學報(哲學社會科學版)』第三十六卷第五期、二〇〇七年九月)九八頁—一〇三頁が、この點について比較的詳しく論じたものである。また、周嵬「盛唐和中唐對王維詩歌的接受」(浙江紡績服裝職業技術學院『浙江紡績服裝職業技術學院學報』二〇一〇年第二期、二〇一〇年六月)一一八頁は答詔を当時の王維の受容情況の総括と認定し、逐次、この答詔を説明する。

(5) 『舊唐書』卷百十八「王縉傳」、『新唐書』卷百四十五「王縉傳」を參照。

(6) 王縉の上表文と代宗の答詔については、靜嘉堂藏宋本影印『王右丞文集〔複製〕』（靜嘉堂稀觀畫之七、雄松堂書店販賣、一九七七年七月發行）卷一所收を底本とし、『文苑英華』（中華書局影印本、一九六六年五月第一版）卷六百十一及び『全唐文』（上海古籍出版社影印本、一九九〇年一月第一版）卷四十六（代宗）・三百七十（王縉）、『王右丞集箋注』巻首を参考にした。

(7) 入谷仙介『王維研究』（創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年）六三六頁は「安祿山はむりやりに官職を押しつけた。これはおそらく宣傳のために名目的に與えたのであつて、實際は囚人にすぎなかつたと思われる」と記す。また陳鐵民「王維生平五事考辨」（前掲注（1）陳著書所收。初出は一九八七年）「四 陷賊後の遭遇」六〇―六二頁、楊軍「王維受僞職史實甄別」（中國唐代文學學會王維研究會『王維研究』編委會編『王維研究』第一輯（中國工人出版社、一九九二年九月第一版）二〇・二二頁なども『舊唐書』の「祿山素憐之、遣人迫置洛陽」という記述を否定する。これに關連して、叛亂軍政府の官職、いわゆる僞職を受けたことに對する王維への處分も問題となろう。從來、亂の平定に功のあつた王縉の助命もあつて、僞職を受けたにもかかわらず、王維には給事中より太子中允への降格という形式的な處分が下されたと考えられていた（上掲の入谷著書六四四頁など）。さらに前掲楊軍論文、およびそれを承けた畢寶魁「王維安史之亂『受僞職』考評」（遼寧大學『遼寧大學學報（哲學社會科學版）』一九九八年第二期）六八頁は、給事中と太子中允の品秩について考證し、降格處分さえ否定する。ただし、王維自身の文に見られる自責の表現（李俊標「略論安史之亂後的心態」（安徽師範大學『安徽師範大學學報（人文社會科學版）』二〇〇〇年第一期、二〇〇〇年二月）一一三頁參照）の背景に、王維が僞職を受けていたことがあるのはおそらく間違ひなからう。そして、王縉の助命行動などから考えれば、王維が僞職を受けたことを問題とするものが王維自身の他に全くなかつたと考えるのも不自然である。

(8) たとえば内田誠一「王維における業思想―安祿山の亂をめぐる―」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第八集、一九八九年一〇月）六七頁は「佛教の『業思想』こそが、王維の幽閉中及びそれ以後の態度・行動に大きな影響を與えたのではないか」と述べる。

(9) 前掲注（5）を參照。

(10) 王家琪『王維接受史 以唐宋爲主』（文津出版社、二〇一二年五月初版）四〇頁は「王

維音樂與歌詩之接受」の例として、代宗の答詔の「誦以國風、宜登樂府」を引用するが、ここの「國風」「樂府」の語はむしろ儒教的な詩教觀に基づく語であり、音楽と短絡的に結びつけるのは適當ではない。

- (11) このことは白居易の別集の編纂を見た場合、興味深い。白居易が自らの文集を、將來に保存することを目的に五本を筆寫し、寺院などへ送ったことはよく知られる（白居易『白氏長慶集後序』）ものの、皇帝に献上したという記録は確認できない。この點について、中純子『詩人と音楽 記録された唐代の音』（知泉書館、二〇〇八年一月第一刷）「詩集の編纂」（初出は一九九八年）一五一頁は、「ここには（筆者注・白居易の文集保存を言う）、宮中藏書として残されることに對する期待は見えない。集賢院にある宮中藏書には開元時代のような求心力はもちろなくなり、その職務の限界も彼等には十分に理解されていた。……もはや宮中藏書もその權威の象徴たり得なかったのではなからうか」と指摘する。しかし、中氏も引用する『舊唐書』卷百八十九「儒學傳」にあるように、宮中の書庫である集賢秘閣は「（蘇）弁聚書至二萬卷、皆手自刊校。至今言蘇氏書、次於集賢秘閣焉」と、依然として唐代最大の藏書量を持つ場であった。皇帝の命による献上という形で、ここに自らの文集が加われば名譽であると同時に、（焼失や散佚の危険は伴うものの）保存においても全く意義がなかったわけではあるまい。晩年、すくなくとも官歴において格別の問題がなかったであろう白居易の文集が、自身によつては献上されなかったことは、中氏の指摘するように中唐文人における「中央の藏書能力に對する信頼感の揺らぎ」（前掲書一五三頁）と同時に、皇帝による特定の別集の編纂・献上の命令がかなり特殊なものであったことを示唆していよう。
- (12) 『新唐書』卷二百三「文藝傳下」にも同様の記述がある。
- (13) 『全唐文』卷七百三。なお、李德裕の例が他と異なるのは、自らの文集を提出するという點にあると思われる。
- (14) 『新唐書』卷二百一「文藝傳上」に「徐敬業亂、署（駱）賓王爲府屬、爲敬業傳檄天下、斥武后罪。后讀、……或以賓王對、后曰、『宰相安得失此。』」とある。
- (15) 前掲注（4）孫論文は「期待視野」(expecting view)の觀點から、「這一評價折射了當時最高統治者對文學創作的政治態度和審美情趣。從朝廷政治的角度看、典雅平和的王維詩歌是代宗眼里的新經典。從日常生活的角度看、王維詩歌反映了盛唐時代貴族階層的審美標準和藝術趣味」（一〇三頁）と述べる。

- (16) 『舊唐書』卷四十六「經籍志」には、唐代には次の例が確認される。

・貞觀中、令狐德棻、魏徵後相次爲祕書監、上言經籍亡逸、請行購募、并奏引學士校定、羣書大備。

・至（開元）七年、詔公卿士庶之家、所有異書、官借繕寫。

・肅宗・代宗崇重儒術、屢詔購募。

・文宗時、……詔令祕閣搜訪遺文、日令添寫。

(17) 陶敏・李一飛・傅璇琮『隋唐五代文學編年史（中唐卷）』（遼海出版社、一九九八年二月第一版）二九―一三一頁。

(18) 王維・鄭虔ら「僞官」に就いていた人物を除く。

(19) 陣内孝文「王維の輞川莊『喜捨』と宦官李輔國の専横」（九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十五號、二〇〇六年一二月）二五頁は李輔國が權力を握ったため「玄宗朝の舊臣であつた王維の友人達は左遷の憂き目に遭つている」と述べる。

(20) 『舊唐書』卷九「玄宗紀」に、「（天寶）十四載春三月丙寅、宴群臣于勤政樓。奏九部樂。上賦詩。效柏梁體」とある。

(21) 「代宗登極、廣拔淹瘁、時君亦拜拾遺、聞命之後、君亦逝矣」（劉記）、また「代宗之初、搜羅俊逸、拜公左拾遺、制下于彤庭、禮降于玄壤、生不及祿、沒而稱官、嗚呼命與」（范傳）とある（清・王琦『李太白全集』（中華書局排印本、一九七七年九月第一版）卷三十一に依據した）。

(22) 松浦友久『李白傳記論―客寓の詩想―』（研文出版、一九九四年九月初版）「李白における長安體驗（下）―「謫仙」の呼稱を中心に―」（初出は一九八四年）一九九・二〇〇頁を参照。

(23) 文學に限定しなければ、代宗は「増修學館制」（『全唐文』卷四十六）という制敕も發している。また『新唐書』卷五十七「藝文志二」に「元載爲相（元載が宰相となるのは寶應元年のことである）、奏以千錢購書一卷、又命拾遺苗發等使江淮括訪」とあり、これらも文化再興の一環と考えることができる。

## 第二節 『輞川集』と「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷

### ―文人による詩畫評價の視點から―

#### 一 問題の所在

輞川莊内の二十箇所の景勝を友人裴迪と詠じた『輞川集』は、王維の代表作とされてきた。たとえば、清の王士禛は「唐人萬首絶句選凡例」<sup>(1)</sup>に、

五言、初唐王勃獨爲擅場。盛唐王・裴輞川唱和、工力悉敵。劉須溪有意抑裴、謬論也。李白氣體高妙、崔國輔源本齊梁、韋應物本出右丞、加以古澹。

（五言、初唐の王勃、獨り擅場を爲す。盛唐の王・裴の輞川唱和、工力悉く敵ふ。劉須溪、意有りて裴を抑ふるは、謬論なり。李白は氣體高妙、崔國輔は源は齊梁に本づく、韋應物は本と右丞より出で、加ふるに古澹を以てす。）

という。このように、清代の詩話などの後世の資料<sup>(2)</sup>には、『輞川集』が、王維の文學のなかでも特に取りあげるべき主要な作品としてしばしば現れる。また、近年でも重要な研究對象とされており、現在、この『輞川集』を王維の代表作の一つとすることが、鑑賞・研究の前提となつているといつてもよい。

しかし、『輞川集』は、必ずしも王維の在世中から一貫して代表作と認められていたわけではない。この問題について、本稿は、同じく王維の繪畫作品であり、輞川の風景を描いた「輞川圖」への評價とあわせて考察する。そして、この考察を通して、受容する側である唐宋の文人が、詩歌と繪畫をどのように評價し、関連づけていったのかを検討したい。

#### 二 唐詩に見える輞川

現存する唐代の文獻に『輞川集』という語は見出せない。そこで、主に唐代の詩歌のなかで輞川や藍田に言及する作品を分析することにより、輞川における王維の文學や繪畫を唐代の文人がどのように評價したかを考察する。

まず、王維の存命中から、大曆期、すなわち中唐前期までの作例を見てみたい。次の詩

は、王維と交往があつた錢起「中書王舍人輞川舊居」(『唐』<sup>(4)</sup>卷二百三十八)である。

幾年家絕壑	幾年 絕壑に家し
滿徑種芳蘭	滿徑 芳蘭を種ゑたる
帶石買松貴	石を帯びて 松を買ふこと 貴く
通溪漲水寬	溪を通して 水を漲らすこと 寬し
誦經連谷響	誦經 谷の響きに連なり
吹律減雲寒	吹律 雲の寒きを減ず
誰謂桃源裏	誰か謂ふ 桃源の裏
天書問考槃	天書 考槃を問ふと
一從解蕙帶	一たび蕙帶を解きてより
三入偶蟬冠	三たび入りて蟬冠 <small>なご</small> に偶ぶ
今夕復何夕	今夕 復た何の夕ぞ
歸休尋舊歡	歸休して 舊歡を尋ぬ
片雲隔蒼翠	片雲 蒼翠を隔て
春雨半林湍	春雨 林湍に半ばす
藤長穿松蓋	藤長くして 松蓋を穿ち
花繁壓藥欄	花繁くして 藥欄を壓す
景深青眼下	景は深し 青眼の下
興絕綵毫端	興は絶 <small>はなはだ</small> し 綵毫の端
笑向同來客	笑ひて向ふ 同來の客
登龍此地難	登龍 此の地に難し

「中書王舍人輞川舊居」という詩題や詩中の「春雨」などの語により、この詩は王維が中書舍人であつた乾元元年(七五八年)春の作品であると思われ<sup>(5)</sup>る。

この詩は、詩題において王維と輞川(あるいは輞川莊)との關係を明示する。この關係は、王維の在世中だけではなく、その没後に作られた他の詩人の作品にも述べられている。やはり、交流のあつた杜甫の詩で、大曆元年(七六六年)という王維没後まもない時期の作品とされる「解悶」(悶を解く)其八(『唐』卷二百三十)には、



不見高人王右丞 見ず 高人 王右丞  
藍田丘壑蔓寒藤 藍田の丘壑 寒藤蔓る  
最傳秀句寰區滿 最も秀句を傳へて 寰區に滿ち  
未絶風流相國能 未だ絶えざる風流 相國能くす

とある。他に耿滄の「題清源寺」(清源寺に題す)、『唐』卷二百六十九<sup>(6)</sup>にも「即ち王右丞の故宅なり」との題下註が附されている。これらの例より、王維と輞川莊(もしくは藍田)に關係があつた事實を中唐前期の詩人ははっきりと意識していることが指摘できる。<sup>(7)</sup>

また、錢起の詩の第十八句の「綵毫」は、鍾嶸『詩品』や『南史』に載せる江淹の故事を踏まえた表現であり、この「興は絶し 綵毫の端」という句は王維のすぐれた文才を贊美した言説である。詩人としての高い評價は、上述した杜甫や耿滄の詩にも見られ、やはり一つの特徴と見ることが可能であろう。つづく中唐後期から晩唐期の詩でも、たとえば(必ずしも輞川における作例と断定し得ないもの)儲嗣宗の「過王右丞書堂二首」(王右丞の書堂に過ぎる、二首)其一、『唐』卷五百九十四)は、

澄潭昔臥龍 澄潭 昔 臥龍あり  
章句世爲宗 章句 世よ宗と爲る  
獨歩聲名在 獨歩 聲名 在り  
千巖水石空 千巖 水石 空し

と王維の詩への高い評價を繼承していると言える。ただ、これらの詩には『輞川集』など個別の作品への言及は見られない。また王維の繪畫についても詩中に述べられてはいない。ところで、中唐後期以降では、この儲嗣宗のように、王維、とりわけその文學に言及する作例はむしろ例外的である。白房易や元稹、温庭筠といった當時の著名な詩人の作品には、輞川、あるいはかつての輞川莊である清源寺を訪れるなどして、その地を詠じたものが存在する。ところが、後述する温庭筠の「清涼寺」(『唐』卷五百八十三)を除いて、彼等は王維や彼の詩歌にほとんど言及していない。<sup>(8)</sup>つまり、中唐後期から晩唐では、單に『輞川集』への言及がないばかりではない。實際に藍田や輞川を訪れながら、しかし中唐後期以降の文人は、詩人王維その人やその地が他ならぬ王維の別業であつたことさえもほとんど詠じなくなつた。このように、詩人としての王維と輞川との關係を明確には述べないよ

うになることが、中唐後期の一つの變化であるといえる。

一方、繪畫作品の「輞川圖」については、この中唐期の朱景玄のいわゆる『唐朝名畫錄』<sup>(10)</sup>に「輞川圖」とある。同じ中唐の張彥遠の『歷代名畫記』<sup>(11)</sup>にも、清源寺の壁上に輞川の風景が描かれていたことが記される。詩歌では、たとえば温庭筠の「清涼寺」<sup>(12)</sup>に、

詩閣曉窗藏雪嶺　　詩閣の曉窗　雪嶺を藏し  
畫堂秋水接藍溪　　畫堂の秋水　藍溪に接す

のように、王維と名指しはしないものの、「詩閣」と「畫堂」の二語が對句として配置される。また、牟融の「題李昭訓山水」(李昭訓の山水に題す)詩(『唐』卷四百六十七)は

南州人物依然在　　南州の人物　依然として在り  
山水幽居勝輞川　　山水の幽居　輞川に勝る

と、やはり唐代の著名な畫家である李昭訓の山水畫という繪畫をとりあげた詩に「輞川」が引き合いに出される。さらに、輞川における作品ではないが、王維の繪畫、もしくは王維が畫業を行ったことを前提とした作品がこの時期に顯在化することも特徴である。<sup>(13)</sup>ただ、繪畫「輞川圖」そのものについて詩のなかで明確に記載されることが、――畫論の記述とは異なり――ほとんどなかったことは注意すべきだろう。

このように、唐代では、「輞川」をめぐって、中唐の前期から後期に王維の評價に變化のあったことが確認される。<sup>(13)</sup>それとともに、『輞川集』への個別的言及が唐代を通じて行われなかったことも、『輞川集』の後世における高い評價を考えると注目に値する。

なぜ、『輞川集』への言及が行われなかったのか。中唐前期、詩人としての王維への高い評價に最も權威を與えていたのは、王維の没後まもなくにその弟である王縉の上奏に答える形で、代宗皇帝李豫が發した「天下の文宗」<sup>(14)</sup>にはじまる答詔である。この「天下の文宗」は王維とその文學への全體的な評價であり、たとえそこに『輞川集』など個別の作品への評價を含んでいたとしても、<sup>(15)</sup>少なくともことさらにそれを取り上げたものではない。そして、それは中唐前期の文人の認識とも齟齬は無かったのである。あるいは、皇帝から答詔として發せられたという最高の權威を持つこの評價が中唐前期の文人たちに影響を與えていた可能性も考えられよう。その後、詩風の變化に伴い、詩人たちの祖述する對象も移つ

ていったことにより、王維の文學への直接的な言及は減少していった。それは、輞川という王維と關係の深い場所であっても同様であった。中唐前期の詩や畫論の記述に従えば、中唐後期や晩唐の詩人が、輞川と王維との關わりが深いことを知らなかったとは考えにくい。それにもかかわらず、王維の文學への言及が少なくなつたために、その王維の作品である『輞川集』も言及されなかつたのではなからうか。そして、「天下の文宗」に代表される王維の文學全般への評價から切り離され、『輞川集』が獨立して取り上げられる機會もまた、結局、唐代には訪れなかつた。

一方、詩歌において王維の繪畫を論じることは、唐代では王維への文學的評價と直接關わるものではなかつた。そのため朱景玄や張彥遠などによる畫論の整備と時を同じくして、繪畫への評價が語られていったのではなからうか。

以上のように、現存の作品による限り、唐代には『輞川集』という文學作品がほとんど言及されないという、後世そして現代の評價とは全く異なる様相について論じた。それでは、次に北宋の情況、特に『輞川集』が注目されていく過程を考えてみたい。

### 三 北宋前中期の情況

北宋になると、畫論以外に、詩歌のなかでも王維が詩畫ともにくれた人物であることが明確に述べられるはじめる。その中期に生きた夏竦の「送鳳茶與記室燕學士詩」（鳳茶を送り、記室燕學士に與ふるの詩）（『宋』卷一五八）の「齋心 一餅を分ち、持して贈る 輞川の人」の自注に

公能詩善畫、臺閣比之摩詰。

（公は詩を能くし畫を善くす。臺閣、之を摩詰に比す。）

とあり、詩畫ともにすぐれる燕肅を王維に比定し、稱讚している。畫論や史書は、當時すでに王維を詩歌と繪畫ともにくれた人物として記述するが、それにくれて詩歌においても、そのことが明示されるようになる。

これと前後して、繪畫藝術である「輞川圖」に言及した詩も現れる。これは、唐代に比べると宋代には、王維の「輞川圖」が有名になつていたことを意味する。たとえば、文彦博の「題輞川圖後」（輞川圖の後に題す）（『宋』卷二七六）には、

吾家伊上塢 吾は家す 伊上の塢  
亦自有椒園 亦た自ら 椒園 有り  
漠漠清香遠 漠漠として 清香 遠く  
離離丹實繁 離離として 丹實 繁し  
盈檐常要采 檐に盈つれば常に采るを要め  
折柳不須藩 柳を折るも藩を須ひず  
每看輞川畫 輞川の畫を見る毎に  
起予商可言 予を起こすは 商にして言ふべし

とある。末句の「起予」は『論語』「八佾」に

子夏問曰、「……。」子曰、「繪事後素。」曰、「禮後乎。」子曰、「起予者商也。始可與言詩已矣。」

(子夏問ひて曰く、「……。」と。子曰く、「繪事は素より後にす」と。曰く、「禮は後か」と。子曰く、「予を起す者は商なり。始めて與に詩を言ふべきのみ」と。)

とあり、孔子が自分を啓發するのは商(子夏)であり、『詩經』をともに論じることができると評したことをいう。後には自己を啓發する意味で用いられる。したがって、この詩は、繪畫「輞川圖」を見るたびに自らがより高い認識に導かれることを言う。つまり、文彦博は「輞川圖」の持つ效用を述べていると言える。ところで、この題畫詩の首聯には、文彦博自らが洛陽に所有する園林が登場する。また、この詩に次韻した韓琦の「次韻和文潞公題王右丞維輞川圖」(次韻して文潞公の王右丞維の輞川圖に題するに和す)(『宋』卷三三七)も

輞川誠自好 輞川 誠に自から好く  
人各愛吾園 人 各おの 吾が園を愛す

と述べ、文彦博の園林に言及する。<sup>(18)</sup>さらに、穆修「和毛秀才江墅幽居好」(毛秀才の「江墅幽居好」に和す)其十(『宋』卷一四五)<sup>(19)</sup>も繪畫の「輞川圖」と比較して毛秀才の宣城(現

在の安徽省宣城市)の別荘の素晴らしさを述べる。注目したいのは、これらの詩が、文彦博や毛秀才の莊園に觸れている點である。すなわち、本来、輞川莊とは關わりのない園林を詠じた作品で「輞川圖」を想起している。これは唐代には見られなかった新しい現象といえよう。

一方、實際に詩人自身やその關係者が輞川に赴く作例も、唐代に引き續き見られる。しかし、『輞川集』や「輞川圖」に言及する例は少ない。文彦博「公儀天章書示暫往藍田兼閱山水以答來貺」(公儀天章、書もて暫く藍田に往き、兼ねて山水を閲するを示し、以て來貺に答ふ)、『宋』卷二七四)が、

藍山青有玉 藍山 青くして玉有り

輞水碧無沙 輞水 碧にして沙無し

：

宜尋幽經處 宜しく尋ぬべし 幽經の處

竹里到南垞 竹里より南垞に到る

と、輞川莊内の景勝名である竹里館と南垞に觸れるのみで、現存する他の作品では輞川の地を詠じて、直接的に『輞川集』や「輞川圖」に言及していない。<sup>(20)</sup>

北宋の中期において、文人の間に共有され、その結果として詩歌に明示されている事柄は、第一に、上述したように、王維と輞川莊の間に關係が確かに存在することである。第二に、王維が詩畫ともに優れていたことである。第三に、繪畫藝術である「輞川圖」への關心の高さである。最後の特徴については、北宋中期の文人が、實際の藍田や輞川ではなく、むしろ自分や友人の園林という、いわば王維の輞川莊とは無關係の場所に繪畫「輞川圖」を連想したことが注目に値するだろう。そして、このような現象の前提には、文人の間に、王維の輞川別業における文雅な生活への共感があったのではないだろうか。繪畫「輞川圖」とは、彼らにとって、まさにこの共感を端的に具現化したものであった、と考えられる。<sup>(21)</sup>

逆に、詩歌作品である『輞川集』についての言及は、まだほとんど見られない。前述の梅摯(字は公儀)に答えた文彦博の詩における「竹里(館)・南垞」についても、これだけでは詩と畫のいずれを念頭においた表現か明らかではないが、他の作例から判断すれば、おそらく繪畫からの影響である可能性が高いのではなからうか。<sup>(22)</sup> それでは、なぜ、北宋中

期において詩歌としての『輞川集』よりも、繪畫としての「輞川圖」が先に文人の關心の對象となり得たのか。その要因として、五代および北宋前期に、すでに繪畫作品である「輞川圖」は廣範圍に認知されていたことが考えられる。先行研究の指摘があるように<sup>(23)</sup>、北宋初期の陶穀の筆記『清異錄』卷下には、「針史」と題して次のような記事を載せる。

自唐末、無賴男子、以筍刺相高。或鋪輞川圖一本、或砌白樂天羅隱二人詩百首。至有以平生所歷郡縣、飲酒捕博之事、所交婦人姓名齒行第坊巷形貌之詳、一一標表者。至時人號爲針史。

(唐末より、無賴の男子、筍刺を以て相ひ高くす。或ひは輞川圖一本を鋪き、或ひは白樂天・羅隱二人の詩百首を砌す。平生、歷する處の郡縣、飲酒捕博の事、交はる所の婦人の姓・名・齒・行第・坊巷・形貌の詳かなるを以て、一一標表する者有るに至る。時人、號して「針史」と爲す。)

また、同じ『清異錄』卷下の「輞川小様」には、調理に巧みな梵正という尼僧が、「輞川圖」を模した料理を製作した記事を載せる。無賴の人間の皮膚に輞川圖が彫られ、また料理の盛りつけ方法ともなっていたという、これらの當時の風俗に關する記述は、繪畫「輞川圖」が民間においても廣く知られる存在であったことを證明している。また、洪邁『容齋三筆』(卷六)「李衛公輞川圖跋」は五代期の南唐の王朝に所藏された臨模本「輞川圖」を記録している<sup>(24)</sup>。

輞川圖一軸。……又内合同印、建業文房之印、集賢院藏書印。此三者南唐李氏所用。故後一行日、「昇元二年十一月三日。」雖今所傳云臨本、然正自超妙。但衛公所志、殊爲可疑。

(輞川圖一軸。……又た内合同の印、建業文房の印、集賢院藏書の印あり。此の三者は、南唐李氏の用ふる所なり。故に後一行に曰く、「昇元二年十一月三日」と。今に傳ふる所は臨本たりと云ふと雖も、然れども正に自から超妙なり。但だ衛公の志す所は、殊に疑ふべしと爲す。)

五代には早くも「輞川圖」の模本が存在し、それが五代十國の諸國のなかで最も唐の文化を尊重・保存したとされる文化國家、南唐の朝廷に收藏されていたのである。このように、

階層の如何にかかわらず「輞川圖」が廣く知られていた事實が契機となり、北宋の中期には詩歌にも詠じられるようになったと考えられる。これらの「輞川圖」が具體的にはどのような構圖を有していたかは不明だが、その繪畫を知る北宋中期の文人達が、そこに表現された王維の園林の世界における文雅な生活に共感したことは、充分に推測できる。

一方、文學における『輞川集』について、どのように認知されていたかは、実際にはよくわからない。ただ五代・劉昫編の『舊唐書』には現存する文獻で最も早い例として「輞川集」という語が見える。<sup>226</sup>北宋中期の文人である歐陽脩らは『新唐書』の編纂を擔當しており、その際に『舊唐書』を参照して『輞川集』の存在を知っていたかもしれない。しかし、この『舊唐書』の一例を除き、唐代以來北宋中期に到るまで、『輞川集』は言及されてこなかった。この情況下で、北宋中期の文人がそのような『輞川集』には敢えてふれず、廣く流行する「輞川圖」に視線が向くのは當然ではなからうか。まして、共感の対象としては記録も模本も存在する後者が適當だったのだろう。

このように、唐代の詩歌にはほとんど見られない繪畫「輞川圖」への言及が、北宋中期には園林を詠じる詩に登場してくるようになった。次に、この情況にさらなる變化が生じたことを論じたい。

#### 四 北宋後期の情況―「蘇門」による一つの轉換

北宋後期、士大夫を中心とする文學の主導的地位にあったのが蘇軾である。その蘇軾とその周邊の文人、いわゆる「蘇門」を中心に、詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」がいかに評價されたかをみたい。

この時期、前述の文彦博のような題畫詩(227)のなかに輞川圖が言及されるだけではなく、ある風景を繪畫「輞川圖」になぞらえたり、もしくは風景を評價するのに「輞川圖」を比較の基準とする作例が登場する。<sup>228</sup>このなかでも、最も注目されるのは、やはり「蘇門」の一人で畫家の李公麟（字は伯時）をめぐる、蘇軾と蘇門の情況である。まず、その李公麟の描いた繪畫を蘇軾が詠じた作品を確認したい。その繪とは、李公麟が弟の李公寅（字は亮功）のかつて隠棲した住居を描いたものである。

#### 李伯時畫其弟亮工舊隱宅圖

李伯時の畫く其の弟の亮工の舊との隱宅の圖（『宋』卷八二七）

樂天蚤退今安有	樂天	蚤とに退きて	今	安くにか有る
摩詰長閑古亦無	摩詰	長へに閑なること	古も亦た無し	
五畝自栽池上竹	五畝	自ら栽う	池上の竹	
十年空看輞川圖	十年	空しく看る	輞川の圖	
近聞陶令開三徑	近く聞く	陶令の三徑を開くを		
應許揚雄寄一區	應に許すべし	揚雄の一區を寄するを		
晚歲與君同活計	晚歲	君と活計を同じくせん		
如雲鵝鴨散平湖	雲のごとき	鵝鴨	平湖に散ず	

この詩では、白居易の「池上篇」と對句を構成しつつ、繪畫の「輞川圖」を提示している。この詩だけでは、詩中の「輞川圖」の意味がややわかりにくいだが、黃庭堅の「追和東坡題李亮功歸來圖」（東坡の李亮功の歸來圖に題するに追和す）（『宋』卷九九五）という追和詩に見える。

欲學淵明歸作賦	淵明を學ばんと欲して歸りて賦を作し
先煩摩詰畫成圖	先づ摩詰を煩はせて畫きて圖を成さしむ

という對句によれば、弟の舊宅を繪畫に書いた李公麟その人を、蘇軾と黃庭堅は王維に重ね合わせている。さらに、彼の繪を「輞川圖」に擬している。李公寅が隱棲した園林を詠じる詩で「輞川圖」を想起するという方法は、北宋中期の情況を繼承すると考えてよからう。

それでは、次の詩はどのように考えればよいだろうか。

次韻子由題憩寂圖後	子由の憩寂圖の後に題するに次韻す（『宋』卷八三〇）		
東坡雖是湖州派	東坡	是れ湖州の派と雖も	
竹石風流各一時	竹石	風流	各おの一時
前世畫師今姓李	前世の畫師	今	李を姓とす
不妨還作輞川詩	妨げず	還た輞川の詩を作すを	

この詩は、附された蘇軾自身の題跋「題憩寂圖詩」によれば、蘇軾が李公麟に繪畫を求め、



その繪畫を「憩寂圖」と名付けたことが發端となっている。<sup>(26)</sup>この詩の第三句は、王維の「偶然作」(卷五) 其六の

宿世謬詞客 宿世 謬りて詞客たり

前身應畫師 前身 應に畫師なるべし

を典故とする。つまり、蘇軾は、まずここで畫家の李公麟を王維になぞらえ、つづく第四句ではその王維から「輞川の詩」へと連想している。この「輞川の詩」とは、おそらく『輞川集』中の詩を指すと思われる。注目したいのは、まず『輞川集』と思われる語がはじめて詩歌のなかに登場したことである。また併せて、その成立に繪畫、あるいは畫家としての王維が前提となっていることも注目すべきである。

蘇轍の「題李公麟山莊圖二十首并敘」(『宋』卷八六四)の敘は、そのことをより明確に示している。この連作は、その敘に「伯時、龍眠山莊圖を作し、建德館より垂雲泚に至るまで、著録する者、十六處」とあるように、繪畫に表現した山莊内の十六箇所の景勝に、さらに四箇所の景勝を附加してあえて二十箇所とし、蘇轍が五言絶句の形式で詠じたものである。その敘はつづけて「子瞻、既に之が記を爲り、又た轍に屬して小詩を賦せしむること、凡そ二十章、以て摩詰輞川の作を繼ぐと云ふ」と述べ、この二十首の連作が『輞川集』の繼承であることを表明している。ところで、この詩は北宋中期の文人の詩と同様、繪畫に表現された園林が前提となっている。ここまでは北宋中期の文人も到達していた。蘇軾兄弟はその状況を十分理解していたと思われる。そうであるならば、蘇軾や詩作を委嘱した蘇軾の發想の起點は李公麟の山莊という「園林」を描いた繪畫にある。しかし、この詩において、連作組詩である『輞川集』の繼承を述べることが従来とは大きく異なっている。

つまり、これらの作例から、蘇軾や蘇門の文人が文學作品としての『輞川集』を「再發見」したと行うことができる。そして重要なことは、彼らが繪畫「輞川圖」とは獨立してそれを見出したのではなく、むしろ繪畫を手がかりとして詩歌へと連想していることではなからうか。

この時期、蘇門の文人の間でも、たとえば黃庭堅の「題輞川圖」(輞川圖に題す)や秦觀の「書輞川圖後」(輞川圖の後に書す)に見られるように、繪畫「輞川圖」は廣く知られていた。つまり、「輞川圖」への關心は北宋中期の文人と同様に高いものであった。また、「輞

川圖」そのものを直接に詠じたものではないが、黄庭堅の「摩詰畫」詩（『宋』卷一〇一一）も

丹青王右轄 <small>てうくわく</small>	丹青	王右轄 <small>てうくわく</small>
詩句妙九州	詩句	九州に妙たり
物外常獨往	物外	常に獨り往き
人間無所求	人間	求むる所無し
袖手南山雨	袖手	南山の雨
輞川桑柘秋	輞川	桑柘の秋
胸中有佳處	胸中	佳處 有り
涇渭看同流	涇渭	同に流るるを見る

と述べ、繪畫を詠じるなかで輞川に言及している。王維の繪畫、とくに「輞川圖」に對する、このような關心の高揚へうたうのなかから、蘇軾等、當時の文人は、その繪畫を出發點に文學作品である『輞川集』へと關心を擴大したのではないか、と推定される。

この繪畫「輞川圖」を出發點にした詩歌『輞川集』の「再發見」とほぼ同時期、他にもこの『輞川集』に言及する作品が存在する。黄庭堅の「寫眞自贊(35)五首」の序に、

余往歲登山臨水、未嘗不諷詠王摩詰輞川別業之篇。

（余、往歲、山に登り水に臨み、未だ嘗て王摩詰の輞川の別業の篇を諷詠せずんばあらず。）

と記す。この「輞川別業の篇」にはおそらく『輞川集』が含まれるが、黄庭堅のこの表白は繪畫「輞川圖」を意識していない。また、同様に蘇軾にやや後れる詩人の詩にも、繪畫によらず、直接に詩歌である『輞川集』を詠じるものが現れる。たとえば、鄒浩の次の七言絶句を見たい。

次韻仲弓見答	仲弓の答へらるるに次韻す（『宋』卷一二三九）
青杉白馬吏天邊	青杉 白馬 天邊に吏となるも
胸次長年只輞川	胸次 長年 只だ輞川のみ

我愧無才似裴迪　　我愧　　才の裴迪に似る無きを  
亦緣春歩見新篇　　亦た春歩に緣りて　　新篇を見る

この詩は、裴迪を登場させることから、王維と姓が同じである王實（字は仲弓）の新篇、つまり新作の詩を『輞川集』になぞらえていると考えてよからう。このような繪畫の介在のない作例の登場が、蘇軾や蘇門による『輞川集』の「再發見」とほぼ時を同じくすることは、當時の『輞川集』への關心の高まりを意味するのではないか。

それでは、主に繪畫への關心を出發點とした、北宋後期における詩歌『輞川集』への關心の高揚の理由は何であろうか。この問題を考える前に、連作組詩という形式について考察したい。

## 五 連作組詩創作の繼承

そもそも、王維の『輞川集』は、ある一つの園林という區切られ、限定された場所で作された、という特徴を持つ。このような連作組詩としての『輞川集』の特徴については、外形的なものに限れば、さらに次の三點を擧げることができよう。

- ① 「鹿柴」などの詩題を持つ詩歌からなる連作組詩であること。
- ② 連作組詩の詩題が地名、もしくは景物名であること。
- ③ 五言絶句の形式を採用すること。

これらの特徴を持ち、かつ『輞川集』の繼承を明確に表明した最も早い作品が前述の蘇轍「李公麟の山莊圖に題す」である。それでは蘇轍以前に、このような特徴を備えた作品は存在するのだろうか。

ここでは、上述した三點の特徴を持ち、かつ園林・莊園などを對象とした作品を調査したい。王維の後、これらの特徴に符合する最初の用例は、韓愈の「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」（虢州の劉給事使君の三堂の新題二十一詠に奉和す）（『唐』卷三百四十三）である。次はその序である。

虢州刺史宅、連水池竹林、往往爲亭臺島渚、目其處爲三堂。劉兄自給事中出刺此州。

在任逾歳、職修人治、州中稱無事。頗復增飾、從子弟而游其間。又作二十一詩以詠其事、流行京師、文士爭和之。余與劉善、故亦同作。

（虢州刺史の宅、水池竹林に連なりて、往往にして亭臺島渚を爲り、其の處を目して三堂と爲す。劉兄、給事中より出でて此の州に刺たり。任に在ること歳を逾え、職は修まり人は治まり、州中無事と稱す。頗る復た増飾し、子弟を從へて其の間に遊ぶ。又た二十一詩を作り以て其の事を詠ずれば、京師に流行し、文士、争ひて之に和す。余は劉と善く、故に亦た作に同ず。）

この序によれば、韓愈以前に劉伯芻の作品が存在し、また文士の唱和した作品も存在したようである。しかし、韓愈の作品を除き、現存しない。また、これに類似した作品（すなわち『輞川集』にも類似する）も、調査した範囲においては、唐代では確認し得ない。韓愈のこの連作はいわば孤立した作例であると言えよう。

さらに注目されるのは、この詩について、明清に至ってはじめて『輞川集』との比較が行われたことである。それは、唐宋期ではこの韓愈の詩と『輞川集』とを關係づけることが明確な形では行われなかったことを意味する。韓愈や劉伯芻らの眞の意圖はともかく、後世、特に唐宋の文人がこの詩を『輞川集』を繼承した作品と認識していた可能性は極めて低いのではなからうか。

だが、北宋になると情況に變化が生ずる。北宋初期に釋咸潤の「五泄山三學院十題」〔宋〕卷一〇九〕があり、更に後期の蘇門の時期に至り、作例が増加する。以下、題名を列挙する。

文同 「蒲氏別墅十詠」〔宋〕卷四三三）

「閩州東園十詠」〔宋〕卷四三五）

「守居園池雜題三十首」〔宋〕卷四四五）

「李堅甫淨居雜題一十三首」〔宋〕卷四四七）

呂陶 「寄題洋川與可學士公園十七首」〔宋〕卷六七〇）

馮山 「閩州蒲氏園亭十詠」〔宋〕卷七四一）

郭祥正 「西巖寺六題」〔宋〕卷七七八）

蘇轍 「和文與可洋州園亭三十首」〔宋〕卷八五四）

釋道潛 「賦王立之承奉園亭」〔宋〕卷九二一）

特に文同（字は與可）を中心に作例が集中している。たとえば蘇轍とは、文同の赴任先である洋州（現在の陝西省洋縣）の園林について「守居園池雜題三十首」「和文與可洋州園亭三十首」（文與可の洋州園亭に和す、三十首）のように唱和が行われている。この洋州の園林については、七言絶句の形式ではあるものの、蘇軾にも「和文與可洋州園池三十首」（文與可洋州園池に和す、三十首）（『宋』卷七九七）がある。<sup>409</sup> 前述した蘇轍による『輞川集』繼承の宣言を考慮すると、蘇軾や蘇轍、文同らのこれらの園林などにおける連作組詩、特にその唱和は、『輞川集』を踏襲したものと判断できるのではなからうか。そして、この踏襲あるいは模倣という現象こそ、北宋後期における『輞川集』への関心の高まりを具現化したものであると言えよう。<sup>410</sup>

ところで、先行研究<sup>411</sup>によって指摘されるように、北宋期には山水畫の發展と繪畫觀の變化があった。それらにも影響を受け、既述したように繪畫「輞川圖」への廣範圍の認知と高い評價が存在した。そして、北宋後期に至り、文同や蘇軾ら士大夫の繪畫創作に對する意識の顯著な變化<sup>412</sup>によって、詩歌である『輞川集』は、同じ王維の手になるとされた「輞川圖」と一體となつて、蘇門を中心とする文人に意識され、模倣され始めたのではないか。模倣を行うとすれば、いわば士大夫の本業であり、かつ科擧受験の爲の必須の教養であつた詩歌が、専門技術を要する繪畫よりも優先されるのは當然であろう。また、繪畫の才能がない文人にも採用できる點でも、この詩歌による模倣という方法はより適當だったのである。

ここまで北宋後期に蘇門を中心に、個別の文學作品としての『輞川集』への関心が高まつたことを論じた。それでは、繪畫「輞川圖」への評價を出發點とし、やがてこれら詩歌『輞川集』へと関心が向かつていった、という『輞川集』評價史上の轉換が生じた理由は何か。

前述したように、北宋中期の文人の間には王維の「輞川莊」における文雅な生活の形式への共感が存在したと考えられる。彼らにとっての理想的生活の場である輞川莊を象徴するものとして、当初は繪畫「輞川圖」が想起されていた。<sup>413</sup> その後、北宋後期に至り、文人の間に詩歌と繪畫を同質視する觀念が顯著となつた。そこで、文人は、北宋中期以來の「輞川圖」に對する關心を繼承しながら、更に『輞川集』と「輞川圖」は一組の作品であるとみなしていった。その結果、文人にとつて、この二つは過去における詩畫一致の恰好の典型となつたのではなからうか。換言すれば、文人たちは、詩と繪畫を同質視するという自

らの行爲を擔保するものとして、〈典型の祖述〉<sup>(44)</sup> という方法を採用した。その典型こそ輞川莊の王維だったのである。つまり、文人における『輞川集』への關心の高まりとは、園林の世界を詩畫の両方によって表現することこそ文雅な生活の理想的實踐であるとす認識を反映したものだ。それを推進したのが蘇試と蘇門であった。そして、彼らは連作組詩の創作へと向かい、また詩歌のなかで『輞川集』に言及していったのである。

## 六 小結―南宋の情況

蘇門による評價の轉換を経た後、『輞川集』と「輞川圖」への評價は如何に繼承されたのか。それを確認する意味も含めて、最後に南宋の情況を概観しておきたい。

まず、「輞川圖」についていえば、前述したように、ある風景を「輞川圖」になぞらえる、もしくは「輞川圖」を風景評價の比較の基準とする作品が南宋期にも多く見られる。特に、輞川が盤谷と對句として現れる作品が複数見られる。<sup>(45)</sup> この盤谷は韓愈の「送李愿歸盤谷序」<sup>(46)</sup>（李愿の盤谷に歸るを送るの序）に基いている。そして、両者が詩歌の對句として用いられていることは、輞川と盤谷が隱逸者の理想郷として認識されていたことを意味している。このような「盤谷」と對句を構成する例は、北宋では注（28）に示した郭祥正に一例確認されるだけである。しかし、南宋では用例が増加しており、この時期、繪畫「輞川圖」の風景、あるいは輞川そのものの風景は、盤谷のそれとともに隱逸の風景の典型として一般化していたと考えられる。

『輞川集』については、この時期、より直接的に言及する作品が存在する。<sup>(47)</sup> たとえば、連作組詩の特徴も備えた楊萬里の「薌林五十詠・歸來橋」<sup>(48)</sup>（『宋』卷二三〇四）は、次のように記す。

已賡彭澤辭 已に賡す 彭澤の辭

更擬輞川詩 更に擬す 輞川の詩

また、朱熹には「家山堂晩照、效輞川體作二首」（家山堂の晩照、輞川の體に效ふの作、二首）<sup>(48)</sup>（『宋』卷二三八四）があり、『輞川集』は詩歌様式の一つとさえ認められていた。このような『輞川集』への言及の増加は、北宋後期における評價の轉換を契機とし、それを繼承、發展したものと考えてよいのではなからうか。つまり、蘇門によって、園林の世界を

繪畫とともに詩歌で表すことが文雅な生活であるという認識の下、『輞川集』が恰好の典型として言及されはじめた。そして、一旦、典型化が實現すると、繪畫「輞川圖」を介することなく、専ら詩歌『輞川集』のみを述べることで、理想的な文人生活を表すには充分となったと考えられる。

ところで、「輞川圖」や『輞川集』に表現される風景は、本來は輞川が所在した長安附近、いわゆる關中地域のものである。一方、宋朝の南渡以來、長江以南の高温、濕潤な風景が文人の周圍に存在していた。彼らは、そのなかで『輞川集』に盛んに言及していったのである。その理由の一つに、『輞川集』への言及をはじめた蘇門の強い影響を擧げることができよう。さらに言えば、南宋の文人は、單に先人が與えた文學評價を踏襲しただけではなく、現實に擴がる風景のなかに、それとは異なるはずの『輞川集』の風景と共通する世界、すなわち憧れの理想郷を見出したのではないだろうか。それは、まさに王維が古典に表現された長江流域以南の風景を現實の輞川莊に認識し、あるいは主體的に見出して『輞川集』として表現したのと同様であつたとはいえないだろうか。そして、「輞川」が彼らにとって實際には目にするのが叶わないだけに、美しい風景、あるいは退隱に適當な風景の典型として純化され、憧憬の對象となつた、と考えられる。その結果、王維の代表作を『輞川集』と認め、それを文人生活、特に園林における生活の理想を描いた作品とみなす觀念が普遍的になつていったと思われる。

王維の詩畫に對しては、蘇軾の「詩中有畫」「畫中有詩」という著名な評がある。これは「書摩詰藍田煙雨圖」<sup>(60)</sup>に見え、『輞川集』や「輞川圖」を直接に述べたものではない。しかし、『輞川集』や「輞川圖」についての評價史、とくに前者についての評價の上昇という觀點からすれば、これらの評語は非常に重要な轉換點を示している。つまり、北宋後期の蘇軾と蘇門の時代に、繪畫のみならず、それまでになく詩歌『輞川集』への關心も顯著となつた。詩と繪畫を同質のものに見なしはじめた彼らにとつて、園林の文人生活における詩畫の統一をすでに盛唐に實現していた王維は恰好の典型となつた。それを繼承した南宋の文人によつて、實際には目睹できない風景を詠じている『輞川集』は隱逸にふさわしい理想郷を表すものとして、より典型化されていったのである。

#### 第四章第二節注

(1) 參照：清・張宗柟纂集『帶經堂詩話』(人民文學出版社排印本、一九六三年一月第

一版) 卷四「刪訂類」所收。

(2) 清・方東樹『昭昧詹言』(人民文學出版社排印本、一九六一年一〇月第一版) 卷十六「盛唐諸家」にも、「王摩詰。輞川於詩、亦稱一祖」とある。

(3) 入谷仙介『王維研究』(創文社、一九八一年一〇月第二刷。初出は一九七六年) 六一二頁は、「輞川集」は王維の最大の連作であり、力作であり、代表作であり、彼の抱えている問題の、もつとも集中的な表現であると考えられる」と述べる。他に葛曉音『漢唐文學的嬗變』(北京大學出版社、一九九〇年一月第一版)「說王維的『輞川集』絕句」(初出は一九八三年) 二九七―三〇四頁など、多くの例がある。

(4) 詩の引用に關して、『唐』は『全唐詩』(中華書局排印本、一九六〇年四月第一版)、『宋』は北京大學古文獻研究所編『全宋詩』(北京大學出版社)を示す。適宜、別集により校勘した。

(5) 謝海平『唐代文學家及文獻研究』(麗文文化公司、一九九六年四月初版)「錢起事蹟及其詩繫年考述」(初出は一九八六年) 六九頁は、この詩を乾元二年春の作とする。しかし、陳鐵民『王維論稿』(人民文學出版社、二〇〇六年一月第一版)「王維年譜」(初出は一九八二年) 三二―三五頁によれば、乾元元年の春、反亂軍の僞官にいた處分として太子中允を「責受」した王維は、中書舍人を經て、この年の秋に給事中に任官していることになる。張清華『王維年譜』(學林出版社、一九八八年九月第一版) 一二六―一三三頁は、給事中任官をやや早く五、六月と推測する。また、これら二種類の王維の年譜は、乾元元年の秋の作である杜甫「崔氏東山草堂」(『唐』卷二百二十四)に「何爲西莊王給事」とあり、輞川莊が當時まだ王維の所有であったことを指摘する。王維の官からみて、錢詩は杜詩に先立つ以上、詩題の「舊居」とは以前からの住居という意味であり、輞川莊喜捨後の寺院を指したのではない。

(6) 原文は以下の通り。「儒學兼宗道、雲泉隱舊廬。孟城今寄寓、輞水自紆餘。內學鎖多累、西林易故居。深房春竹老、細雨夜鐘疏。陳跡留金地、遺文在石渠。不知登座客、誰得蔡邕書」。

(7) なお、李端「雨後遊輞川」(『唐』卷二百八十五)は、王維との關係を明確には述べていない。

(8) 曹旭『詩品集注』(上海古籍出版社、一九九四年一〇月第一版) 三〇六頁には「初、(江)淹罷宣城郡、遂宿冶亭、夢一美丈夫、自稱郭璞、謂淹曰、『吾有筆在卿處多年矣、可以見還。』淹探懷中、得一五色筆以授之」とある。『南史』(中華書局排印本、一九七



五年六月第一版) 卷五十九もほぼ同じ。

- (9) 参照：白居易「宿清源寺」(『唐』卷四百三十一)、同「竹窗」(『唐』卷四百三十四)、元稹「山竹枝」(『唐』卷四百九)、同「輞川」(『唐』卷四百十)、温庭筠「寄清源寺僧」(『唐』卷五百七十八)。

- (10) 参照：『唐朝名畫錄』(臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本)「王維、字摩詰。官至尚書右丞。家於藍田輞川。兄弟竝以科名文學、冠絕當時。：復畫輞川圖、山谷鬱鬱盤盤、雲水飛動、意出塵外、怪生筆端」。

- (11) 参照：『歷代名畫記』(叢書集成初編、上海商務印書館據津逮祕書影印本、一九三六年一二月第一版)卷十「王維、字摩詰。：與弟縉竝以詞學知名。官至尚書右丞。有高致、信佛理、藍田南置別業、以水木琴書自娛。工畫山水、體涉今古。：清源寺壁上畫輞川、筆力雄壯」。

- (12) 参照：淺見洋二『中國の詩學認識——中世から近世への轉換——』(創文社、二〇〇八年二月初版)「天開圖畫」の系譜——六朝より宋代に至る風景認識——の「七。中晚唐詩における風景と繪畫」(初出は一九九二年)七九頁、及び渡部れい子「晚唐における李白受容について——詩人像形成過程を中心に——」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十五集、二〇〇六年一二月)八五・九一頁。なお、これらに列擧されていないもの、張祐「題王右丞山水障二首」(『唐』卷五百十)、鄭嵎「津陽門詩」(『唐』卷五百六十七)、齊己「題鄭郎中谷仰山居」(『唐』卷八百四十四)がある。

- (13) 赤井益久『中唐詩壇の研究』(創文社、二〇〇四年一〇月初版)「大曆から元和へ——「中唐」の文學史的意味——」(初出は一九九八年)二九頁は「大曆詩の「沈靜」「平澹」の要素は王維の詩風の中から育まれたものと言ってよい。かくして大曆期は、従來の盛唐詩の文學的規範の中にあたかも陰陽表裏のごとき對蹠的價値を認めるに至り、規範の變容を促した。元和期の個性は、この變容の延長線上にある」と述べる。ただ、文學史全體から離れた、王維の詩風の繼承そのものは、その元和以降の個性のなかに埋没したと考えられる。

- (14) 靜嘉堂藏本宋本影印『王右丞文集〔複製〕』(靜嘉室稀觀書之七、雄松堂書店販賣、一九七七年七月發行)卷一「(代宗)答敕」には、「敕。卿之伯氏、天下文宗。位歴先朝、名高希代。抗行周雅、長揖楚詞。調六氣於終篇、正五音於逸韻。泉飛藻思、雲散襟情。詩家者流、時論歸美。誦於人口、久鬱文房。譎以國風、宜登樂府。盱朝アウ之後、乙夜將觀。石室所藏、歿而不朽。柏梁之會、今也則亡。乃眷棣華、克成編錄。聲猷益

茂、嘆息良深」と記す。なお、本論文第四章第一節では「(王縉)の上表文では抑制されていた文學への言及が、ほぼ全編に見られる」(一二二頁)と論じた。

(15) ただし、潘慧瓊「名作的被忽視與受重視——對王維『輞川集』藝術特色認識過程的思考」(柳州師範高等專科學校『柳州師專學報』第十七卷第二期、二〇〇二年六月)一二・一三頁は、現存の『唐人選唐詩』に『輞川集』が収録されていないことを指摘する。

(16) 小林太市郎『王維の生涯と藝術(小林太市郎著作集4)』(淡交社、一九七四年四月発行、初出は一九四四年)第二篇「王維の詩畫」一四二頁は、北宋の米芾『畫史』を引用し、文彦博が「小輞川圖」を所有していたことを指摘する。引用の題畫詩はおそらく、この「小輞川圖」に記されたものであろう。

(17) 参照：程樹德『論語集釋』(中華書局、一九九〇年八月第一版)卷五。

(18) 全文は次の通り。「輞川誠自好、人各愛吾園。欲縱家山樂、終廢吏事繁。鴻飛思避弋、牴觸困羸籬。幾日歸陶徑、方知踐此言」。この韓琦と文彦博の詩については、鍾巧靈『宋代題山水畫詩研究』(中國社會科學出版社、二〇〇八年五月第一版)二〇頁を参照。

(19) 該當部分は次の通り。「畫工狀能出、羞殺輞川圖」。

(20) 蘇舜欽「獨遊輞川」(『宋』卷三二四)、歐陽脩「送王汲宰藍田」(『宋』卷二九一)、司馬光「送皇甫寺丞穆知藍田縣」(『宋』卷五〇四)。

(21) 本節の初出(二〇〇八年一〇月)の後に發表された張進「宋金元王維接受研究」(西北大學『西北大學學報(哲學社會科學版)』第四十卷第二期、二〇一〇年三月)も宋から元の畫評を踏まえ、「輞川圖」成爲一箇象徵符號、寓含了無數文人企盼逃脫機事、向往自由閑適的生存環境和生存狀態的理想境界」と指摘する。なお、同論文では『輞川集』への言及は見られない。

(22) 本節の初出よりも後に發表された袁曉薇『輞川集』經典化和輞川模式的建立」(深圳大學『深圳大學學報(人文社會科學版)』第二十八卷第一期、二〇一一年一月)九四頁は「輞川圖」的接受構成了『輞川集』接受史的重要內容。自五代起、對「輞川圖」的做製、收藏、題詠成爲文人競相爲之的風尚。「輞川圖」從某種意義上成爲『輞川集』的替代品、發揮著相同的效能。」と記し、後述する秦觀「書輞川圖後」や明の王世貞の「摹輞川圖後」などを例示する。しかし、北宋中期までの情況を見れば、繪畫である「輞川圖」は詩歌の代替ではなく、むしろ詩歌の『輞川集』よりも早くに評價され

ていたと見るべきであろう。これに關して、王祥「宋人論王維述評」（瀋陽師範大學『瀋陽師範大學學報（社會科學版）』二〇〇八年第二期、二〇〇八年三月）八二頁は、『文苑英華』において「但王維的山水田園詩卻並不爲所重、尤其是爲後世所嘖嘖稱道的『輞川集』、更是一首未選」と指摘する。したがって、當時の讀書情況から判斷すれば、やはり本論文の指摘するように繪畫からの影響とするのが適當だろう。

(23) 前掲注(16) 小林著書第三篇『輞川集』と輞川圖』一九八頁。なお、本文は朱易安・傅璇琮等主編『全宋筆記 第一編 二』(大象出版社、二〇〇三年一〇月第一版)に據った。

(24) 『容齋隨筆』(中華書局排印本、二〇〇五年一月第一版)に據った。前掲注(16) 小林著書二〇四・二〇五頁は「所謂李衛公家本が王維より後の傳來も明らかなものとして宋代に最も尊重された」ことを指摘し、それが「王維の眞蹟」から「傳移摹寫」されたもので、「源流の遺香を猶お少しでも傳えたものであつたと思われる」と推測している。また、古原宏伸『中國畫論の研究』(中央公論美術出版、二〇〇八年八月再版)「輞川圖卷」(初出は一九七五年)三八頁は、郭若虛『圖畫見聞誌』卷六に楚昭輔が恩賞として南唐王室舊藏の「輞川畫樣」を得た記事が見えることを紹介する。

(25) 前掲注(24) 古原論文は、通行「輞川圖」が再建された鹿苑寺を描いていることを考證し、それが「唐代資料の長い斷絶の後、再び世に現れた(輞川圖)は、唐代の原本とは相違する、新しい意匠の部分をもとに作られていた」(四五頁)と述べる。

(26) 参照：『舊唐書』(中華書局排印本、一九七五年五月第一版)卷百九十下「文苑傳下」(王維)得宋之間藍田別墅、在輞口、輞水周於舍下、別漲竹洲花塢、與道友裴迪浮舟往來、彈琴賦詩、嘯詠終日。嘗聚其田園所爲詩、號輞川集」。

(27) 王安中「次韻題李公休輞川圖」(『宋』卷一三九二)など。

(28) たとえば郭祥正「次韻元興題王祖聖南澗樓清斯亭二首」其一(『宋』卷七七二)の「文章未許矜盤谷、水墨無勞畫輞川」など。以下、作者と詩題をあげる。張舜民「長沙遇雪贈何待制二首」其一(『宋』卷八三五)。楊時「綠陰亭上」(『宋』卷一一四八)。宗澤「華陰道中三首」其二(『宋』卷一二〇六)。釋德洪「至豐家市讀商老詩次韻」(『宋』卷一三二八)。同「次韻登蘇仙絕頂」(『宋』卷一三三二)。同「雲霽謁景醇時方築堤捍水修湖山堂復和前韻」(『宋』卷一三三二)。李綱「冬日登小閣有感呈子美提舉奉議」其一(『宋』卷一五五四)。

(29) 孔凡禮點校『蘇軾文集』(中華書局、一九八六年三月第一版)卷六十八「題跋・詩詞」。

原文は次の通り。「復求伯時畫此數句、爲懟寂圖」。

(30) 原文は次の通り。「伯時作龍眠山莊圖、由建德館至垂雲泚、著錄者十六處、自西而東凡數里。岩罅隱見、泉源相屬、山行者路窮於此。道南溪山、清深秀時、可游者有四。曰勝金岩・寶華岩・陳彭潔・鵲源、以其不可緒見也。故特著於後。子瞻既爲之記、又屬轍賦小詩凡二十章、以繼摩詰輞川之作云」。

(31) 前掲注(22) 王論文八五頁も「從某種程度上說、王維山水詩(尤其是『輞川集』詩)爲宋人的了解和認識、可能更多地是依賴于宋人對王維山水畫的了解和認識、至少二者是相輔相成的」と述べ、本論文と主張を同じくする。ただ、王論文の基本的主張は唐代に比べて「除了繪畫外、宋人對王維其人及其詩的評價都不高」(八五頁)というものである。ただし、『輞川集』に限定すれば、それが言及・模倣され始めたことはむしろ高く評價された證左と考えられる。なお、本節の初出の後に出版された王家琪『王維接受史——以唐宋爲主』(文津出版社、二〇一二年五月初版)第五章「王維影響史研究」も「在宋人風靡王維〈輞川圖〉的同時、亦帶動對〈輞川集〉這一類山水自然田園小詩的極大關注」(三四四・三四五頁)という。

(32) 參照：『豫章黃先生文集』(四部叢刊初編、上海商務印書館據嘉興沈氏藏宋本縮印影印本)卷二十七「題跋」。

(33) 參照：徐培均『淮海集箋注』(上海古籍出版社、一九九四年一〇月第一版)卷三十四「贊・跋」。

(34) 前掲注(24) 古原論文三八頁は『宣和畫譜』に「輞川圖」の記録がないことを述べる。その情況のなかで、模本とはいえ、宮中にさえ記録されない「輞川圖」を文人は見ており、彼らの關心は前代に比べ高いものであったのかもしれない。

(35) 參照：前掲注(32) 『豫章黃先生文集』卷十四「贊」。

(36) 張舜民「書陳副省卷」(『宋』卷八三六)もこの例である。

(37) 前掲注(15) 潘論文十四頁は錢起、顧況の詩が「在五絶的創作上學習王維『輞川集』的風格」と述べ、張浩遜「從唐代接受層面看王維詩歌的歷史地位」(韶關學院『韶關學院學報(社會科學)』第二十六卷第十期、二〇〇五年一〇月)二八頁も錢起「藍田溪雜詠二十二首」を「當爲模倣之作」とする。さらに、前掲注(22) 袁論文九三頁も錢起の詩の他に皇甫冉「山中五詠」、顧況「臨平塢雜題十三首」、姚合「題金州西園九首」「杏溪十首」「陝下厲玄侍御宅五題」(實際には姚合の詩はいずれも五言絶句ではない)を挙げ、「對『輞川集』的效倣自大曆時期就開始了、此時出現了大量以系列景點爲

題的五絶組詩、：在具體寫法上都模倣了『輞川集』的意蘊和筆法」と述べる。しかし、錢起や皇甫冉の詩には「戲鷗」「松下雪」「田鶴」「題南坡」「春早」などのように『輞川集』に見られる詩題の賦與の方法とは異なるものが含まれる。また錢起や顧況の詩には人工的な建築物を歌う作品があるとはいえ、彼等の連作組詩が一つの園林を詠んだ作品か否かも必ずしもはつきりしない。したがって、本論文で挙げた『輞川集』の特徴を完備した作例は韓愈に至るまで確認できない、と言えよう。

二宮美那子「唐代園林連作組詩考―王維「輞川集」を源として」（京都大學）中國文學會『中國文學報』第八十一冊、二〇一一年一〇月）は、本論文の初出を挙げたうえで、錢起や中唐後期などの「唐代において園林の風景を短詩で描く連作が廣がりを見せていたことを示す」（二頁）作品を論じる。同論文で「『輞川集』は言うなれば、詩によつて園林を表現・鑑賞する型を後世に提示したのである」（二九頁）と論じる點については、宋代あるいはそれ以降の展開を視野に入れた場合、本論文と基本的立場を共通する。しかし、本論文で既に述べたように、唐代においては繪畫である「輞川圖」が評價される一方、詩歌としての『輞川集』に直接言及した作品は存在しない。したがって、唐代における園林の連作組詩が『輞川集』を源としているか否かの判断は、より慎重にならざるを得ない。たとえば、「期不至」詩について（中唐以降）文學集團の成熟や次韻詩の整備など、むしろ詩作の環境は唱和を求める方向に推移しており、その結果、そもそも約束とは無關係の詩人等による唱和詩も中晚唐には生み出されていったのである」（本論文第一章第二節五七頁）と判断できるのは、詩題における「期不至」という明確な（記号）があるからに他ならない。『輞川集』については、二宮氏自身、唐代の後續作品に比べて「作品全體の空間構成に對する意識」や「文學的交流における集團と個」の部分で「その源にある「輞川集」はむしろ特殊な性質を持つている」（二九頁）と指摘している。この指摘は、園林などで作られた詩歌において『輞川集』を明確に意識した作品が宋代に到るまで現れなかったという本論文の所説を逆に傍證していることになる。

(38) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』（上海古籍出版社、一九八四年八月第一版）卷八所引の蔣之翹、朱彝尊、查慎行の評説。

(39) 前掲注（12）淺見著書「詩中有畫」をめぐって―宋代における詩と繪畫―」（初出一九九七年）一七六・一七七頁は蘇軾のこの連作組詩の一首「谿光亭」が詩畫同質論を語ったものであることを論じる。また蘇軾には「文與可畫筍簞谷偃竹記」（前掲

注(29)『蘇軾文集』卷十一)があり、篋管谷とは文同らの詩の一首の詩題でもある。すなわち、一部分にせよ、この園林をめぐる連作組詩に繪畫が關係している。

(40) 文同の洋州の園池は州廳に附屬する官園である。このような官にある士大夫にとって隱棲または致仕しない限り、王維のように私有の園林を鑑賞しつづけることは不可能なため、公務を終えた後、官園に擬似的に隱棲するという形を取らざるを得ない。そこに、王維の輞川莊における「半官半隱」への共感が生まれたことが考えられる。

(41) 參照：鈴木敬『中國繪畫史 上』(吉川弘文館、一九八一年三月發行) 七頁。

(42) 内山精也「宋代八景現象考」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十集、二〇〇一年一〇月) 八八―九二頁はその要因を、繪畫技法、繪畫理論、士大夫の生活空間の三つの側面から論じる。

(43) 前掲注(39) 淺見著書は、この問題を分析し、「詩における映像の再現・傳達を繪畫に比擬する認識は宋代に至って初めて明確に言語化され共有されたもので」(一八八頁) あると述べる。とするならば、その意味で『輞川集』と「輞川圖」との關係が論じられるのも、本稿で論じるように宋代、とくにそれがより一般化する北宋後期を待つ必要がある。そして、その北宋後期に現れた蘇軾の詩畫を一體のもとする認識の意義について、前掲注(22) 王論文八二頁「遠不在於詩畫本身、而在於它所包含的宋代繪畫文人化與文人的生活雅化」と指摘する。つまり、蘇軾等の生きた北宋後期に至り、「文雅な生活の場」である輞川莊を描いた「輞川圖」と同様の機能を詩歌としての『輞川集』は持ち得たのである。

なお、前掲注(22) 袁論文九五頁も「『輞川集』と輞川莊における他の作品が) 相配合、在充分展現詩情畫意的同時、記錄了一種閑雅悠遊的生活方式。這種生活方式很大程度上契合了士大夫普遍具有的生活理想、這使得『輞川集』成爲士大夫抒發高尚優雅情致的理想代言、自然也就成爲士大夫日常吟詠中的經典內容」という。しかし、王維自身は『輞川集』とその他の輞川諸詠とを區別していた(本論文の第二章および所引の入谷説)と考えられること、また、その「生活方式」がいつ頃から士大夫の「理想(的)代表」となり、あるいは「經典(的)內容」となったかが曖昧であることなど、同論文の主旨はともかく、細部にはやや問題があるように思われる。

(44) 中國の歴史と文明における概念やイメージの典型化については、吉川幸次郎述・黒川洋一編『中國文學史』(岩波書店、一九七四年一〇月第一刷)「中國文學の特色」三一―三三頁、松浦友久『詩語の諸相―唐詩ノート〔増訂版〕』(研文出版、一九九五

年一〇月第一刷)「兒女共霑巾——名詞の副詞化が意味するもの」(初出は一九七五年)二四六・二四七頁を参照。

(45) 李彌遜「曹溪道中呈何公顯」(『宋』卷一七二二)「要令陶冶誇盤谷、何必丹青貌輞川」、同「和李相園亭」其一(『宋』卷一七二二)「詩人莫浪誇盤谷、畫手無工貌輞川」、朱翌「競秀閣」(『宋』卷一八六四)「輞川遙展右丞圖、盤谷中藏李愿居」、喻良能「磐湖偶成」(『宋』卷二三五七)「只欠退之盤谷序、已成摩詰輞川圖」、葉茵「道院」(『宋』卷三一八八)「四時盤谷序、一景輞川圖」などがある。

(46) 参照：屈守元・常思春『韓愈全集校注』(四川大學出版社、一九九六年七月第一版)一四七七—一四七九頁。なお、前掲注(22)袁論文は「輞川常與陶淵明筆下的桃花源相提並論」(九六頁)とし、その理由について「王維以精心建構的輞川別業及其朝政之暇遊賞其間的生活方式全面地完成了對『世外桃源』的改塑、遠離俗世塵囂、可供自由棲止和悠遊吟賞的輞川別墅充分實現了以審美享受來調理性情、在靜賞自然中達到精神愉悅的追求、既留存了『桃源』境界對高潔人格的向往、又避免了清貧乞食的窘迫困頓。這顯然是更易於爲廣大士人所接受和實際效倣的現實『桃花源』」(九八頁)と指摘する。しかし、王維が『輞川集』の世界を「桃花源記」の描くものにしようとしたかは疑問が残る(本論文序章第二節を参照)上、ここで述べたように、盤谷なども輞川と對になることから、後世の文人が常に輞川に「桃花源」を看取していたと判断することには慎重にならざるを得ない。

(47) 他に、李處權「簡致中温其」(『宋』卷一八三三)に「輞川詩說王摩詰、谷口名聞鄭子眞」、楊萬里「寄題喻叔奇國博郎中園亭二十六詠・亦好園」(『宋』卷二二九五)に「金谷惟堪貯俗塵、輞川今復得詩人」などとある。

(48) 朱熹は『楚辭後語』(『楚辭集注』(上海古籍出版社・安徽教育出版社排印本、二〇〇一年一二月第一版)卷四「山中人」で「遭祿山亂、陷賊中、不能死、事平復幸不誅。其人既不足言、詞雖清雅、亦萎蕪少氣骨」と、王維の人格と文學に辛辣な評價を興えている。その朱熹が王維の『輞川集』の様式を模倣していることは注意に値しよう。

(49) 本論文第二章第二節で、王維は現實の輞川別業のなかに「主に「文選」という古典の中の作品に描かれた、あるいは詩題や表現から想起される長江流域以南の風景を認識した」(九二頁)と論じた。そうであるならば、南宋の文人は『輞川集』にそのような風景が表現されていることを「再発見」し、それによって憧れの理想郷という共通性をより強く感じていた可能性がある。

(50) 參照·前掲注(29)『蘇軾文集』卷七十「題跋·書」。



## 結語

本論文は、王維の『輞川集』における詩歌と園林との関係を考察し、さらに後世、特に唐宋期の文人がそこに繪畫を加えた関係を如何に見ていたかについて検討してきた。そこには『輞川集』が王維の「代表作」とされ、さらにしばしば繪畫「輞川圖」との關連から繪畫性を備えた作品とされてきた従來の見解への疑問が問題意識としてあった。それゆえに、『輞川集』を研究対象とする本論文では、なぜ、そのような見方が生じたのかを文學史、文化史において説明する必要があった。そして、その過程を理解するためには、『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との関係はそもそもどのようなものであったか、を把握しなければならなかった。以下、改めてこれらの問題に對する本論文の具體的な検討について、その要點を示しておきたい。

第一章「王維の詩と園林」は『輞川集』における詩歌と園林の関係を考えるための前提として、王維の詩歌と輞川莊以外の園林の關係について検討した。この關係が明らかになることで『輞川集』の特徴もより客觀的なものになると考えられるからである。

第一節「終南別業」詩について―「輞川」に連なるものとして―は王維の園林での作品として、『輞川集』をはじめとする輞川莊における作品とともに著名である「終南別業」詩の諸問題を述べた。宋代の畫論にもしばしば引用されるこの詩は、『輞川集』とは異なり、王維の在世時には既に廣く知られていた。

本論文では、まず二種類の宋版における「戲贈張五弟諱三首」の題下注に着目し、王維が長安の常樂坊に居住した可能性を指摘し、『長安志』や「盧氏雜說」などの記事、そして王維の母の崔氏の普寂への師事からそれを論證した。それによって「終南別業」詩とは「長安城内の居宅から「終南別業」へ行き、そこでの隱棲のために元の長安城内の家へ歸ることががない」ことを歌ったものであり、輞川莊における作品との共通性があることを確認した。そして、この作品は開元二十七年（七三九年）より天寶三載（七四四年）までに成立したと考えられることを論じた。

輞川莊における作品との共通性を考えた場合、終南別業と輞川莊が同一か否かという懸案に言及せざるを得ない。本論文では、従來の方法とは異なり、長安から山々を望む詩に

着目し、王維が終南山と輞川という地名を使い分けていた可能性を指摘した。特に、王維は輞川莊における作品では「終南山」(南山)という語を積極的には用いず、それは王維の前の輞川莊の所有者である宋之間の手法とも異なることを明らかにした。さらに、終南別業と輞川莊がそもそも別箇のものであるということよりも、王維が廣範圍でかつ、人々によく知られていた終南山ではなく、狭い地域であり、また當時はほとんど無名の存在であった輞川の名をあえて用いることで、輞川を自分だけの隠棲の場所にしようとしたことが重要であると述べた。そして、この終南山から輞川へという王維の文學における過程を把握してこそ、輞川に連なる作品としての「終南別業」詩を本質的に理解できると指摘した。

第二節「待儲光羲不至」詩について―初盛唐期の園林における詩人の交遊を中心に―は「待儲光羲不至」詩と儲光羲からの答詩に着目し、「友人と約束したが、その相手が来ない」という詩と園林の関係、特に園林における詩人の交流について考察した。

先行研究にもあるように、「友人と約束したが、その相手が来ない」という詩、つまり「期不至」詩は東晉の謝混に始まり、謝靈運が継承した。本論文では、まずこれらの詩が園林で創作されたことを確認した。また「期不至」という詩題に着目し、六朝期、謝靈運以降には後繼の作品が見られないことを指摘した。

初唐の宋之問「見南山夕陽召鑿師不至」詩には六朝期と異なり、相手の特定化が見られた。孟浩然に至って「期不至」詩は約束の相手の名を記すという記名性を様式として得るとともに、それによって定型化し、さらに盛唐期にはそれが一般的になっていった。また、その多くが園林の備わるような景勝地で作られたことを確認した。そして、詩人間の交往がより増加し、重要となった盛唐期、相手や約束した場所を特定することは、内容が同一、陳腐になることを防ぎ、個別性を獲得するために有効かつ簡単な方法であったと指摘した。

王維の「待儲光羲不至」もその「期不至」詩の一つであり、儲光羲による答詩が存在する点で特に注目される。この答詩の出現は「期不至」詩の定型化、一般化に伴うものであった。本論文は、この二つの詩は王維やその園林を含む邸宅が俗世とは對蹠的な位置にあることを示すとともに、そのような園林を含む邸宅を王維は實景表現、儲光羲は想像と、それぞれ別箇の方法によって描寫していることを論じた。これらは今までの作品と異なり、詩を介した園林の交遊を保證しており、したがって、このような方法は王維と裴迪の唱和による「連作組詩」の『輞川集』とともに園林における詩人の交流と詩作において劃期的なものであると考えられる。

第二章「輞川莊と詩」では輞川莊という園林と『輞川集』をはじめとするこの地で作られた詩歌、特にその風景表現を中心に考察し、『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との関係がどのようなものであったかを明らかにした。

第一節「王維の輞川諸詠における田園の風景」では『輞川集』以外の輞川諸詠について述べた。王維の経済的基盤でもあった輞川莊で創られた詩には、入谷仙介氏が指摘するように、『輞川集』を除いて多くの田園の風景が描寫される。そして、田園の風景を描寫する王維の詩のなかでも輞川における作品が最も多い。本論文では、その輞川諸詠の田園の風景、特にそのような風景表現の持つ機能に着目した。

本論文では「田園風景」の描寫を「生産・農業活動に関わる行爲の描寫」「その活動の場として存在する村落・集落の描寫」と定義し、「酬諸公見過」「贈劉藍田」「酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作」「輞川閒居贈裴秀才迪」「輞川別業」「田園樂七首」「輞川閒居」「積雨輞川莊作」を検討した。これらの詩には隱棲に関わる語や人物が見える。それゆえに、これらの作品は隱棲や歸隱への志向を持った詩であり、これらの田園風景の描寫は輞川の地を官僚の世界、つまり出仕の場である長安と明確に隔絶させ、その地を精神的充足を得る場、高い價值を持つ場であることを保證する機能を持つ、と指摘した。

さらに「贈裴十迪」「山居即事」「春園即事」「鄭果州相過」「田家」は輞川莊の作と断定することはできないものの、上述の詩と同様に、これらの詩の田園風景は隱棲や歸隱の場所であることを示している。したがって、これらの詩も輞川で創られた作品である可能性が高いと述べた。

第二節『輞川集』における王維の風景認識―「遊止」の典故を手がかりに―では、王維・裴迪が五言絶句各一首を歌う『輞川集』の全二十箇所の「遊止」の名稱の典故を調査することで、王維が園林である輞川莊に認識し、『輞川集』として言語化した風景とは何か、を考察した。「遊止」の名稱の典故の調査にあたっては、出典の確定にとどまらず、それらの典故と各詩の本文とがいかなる關係を有するのか、またそれぞれの詩の「遊止」やその名稱の典故が相互にどのような有機性、關連性を持っているのかを系統的に考察した。

調査の結果、王維が輞川莊にて認識し、『輞川集』として言語化した風景とは、「入華子崗、是麻源第三谷」「從斤竹澗越嶺溪行」「於南山往北山經湖中瞻眺」など「謝靈運の詩を

主とする長江流域以南の風景」および『楚辭』を中心とする「楚」の風景」であると指摘した。それは必ずしも、それらの作品の世界そのものの忠實な再現とはかぎらない。より正確に言えば、それらの詩題や表現から想起されるような世界をも認識し、表現している。いずれにせよ、その風景は『文選』を中心とする古典に表現された長江流域以南の風景であり、王維はそれを現実の輞川莊に認識した、あるいは主體的に見出した、と論じた。

つまり、『輞川集』の世界とは『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の世界を再現したものであった。本論文では、それは出仕の場である長安に代表される外側の世界と隔絶し、輞川を精神的充足が得られる場にしようとしたからであり、そのために容易には消失、崩壊しない、安定感を古典に求めたと推論した。

この「世界の隔絶」という意識は第二章第一節で明らかにした輞川諸詠における田園風景にも共通して確認される。次に兩者の相違について考察した。『輞川集』のように典故を用いる方法は重層的に用いることでイメージがはつきりするために「連作組詩」が最適であり、一方、田園風景によって外側に隔絶するという方法は「都市」と「田園」の明確なイメージの対立のために『輞川集』のような「連作組詩」である必要はなかった。さらに、後者の方法は隔絶が相対的に弱く、もし、輞川莊という園林を詩歌という方法によって他の場所から完全に隔絶するには、輞川莊のすぐ外にも広がる田園風景を示す表現や誰もが知る隱棲の場であった終南山などの語を用いるのではなく、誰もが知らない世界、できれば架空の世界を創り上げることがより効果的であり、あるいは必要であったと論じた。本論文では、その世界こそ、古典の典故を用いることによって作られた長江流域以南の世界である、と結論づけた。

第三章「詩と繪畫」は、王維における詩歌と繪畫との関係について、従来の多くの論考に見られるような王維の詩の繪畫性を検討するのではなく、新たな方法から論じた。その方法とは創作者としての詩人と畫家に着目することであり、特に詩歌における「畫家」の言及とその意味について調査した。なぜならば、このような言及が北宋後期、士大夫による詩人と畫家が「文人」へと融合するための基本的前提の一つと考えられるからである。

第一節「唐詩における「詩人」と「畫家」——王維詩を手がかりに——」は、まず、王維「偶然作」其六に見える「詩人」と「畫家」の並置の情況を検討し、王維は少なくとも「畫家」としての自己を「詩人」としてのそれよりも決して下位に置いていないことを確認した。

また「崔興宗寫眞」「故人張譚工詩善易卜兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之」を例に、王維が詩のなかで「畫家」に言及していることを指摘し、さらに一人物に詩人と畫家の兩側面を兼備することが可能であると考えていたことを論じた。

唐詩全體を俯瞰すると、「詩人」と「畫家」を並置するような詩はわずか四首、兩者を密接な關係でとらえた作品や、詩のなかで「畫家」に言及する詩をあわせても三十數首程度しかない。そして、このような詩が盛唐期以降に現れ、特に王維と杜甫に複數の例があることに着目し、彼等が詩において「畫家」に言及した先驅者であることを明らかにした。

次に、そのように王維や杜甫が先驅者たり得た要因について考察した。王維の場合、個人的な趣味や生來の資質のみならず、年少期から現實の貴顯との交往における必要性もあって繪畫への造詣を深め、その結果、繪畫そのものを創作し、一方で詩において畫家に言及していったと考えられる。さらに、杜甫の場合は宮廷畫家の流出も考慮する必要がある。また唐代においては畫論の創出が繪畫鑑賞とともに文人の間に廣く行なわれたことも詩人と繪畫の距離を短くした。その一つの表れこそ文人の記した詩における「畫家」への言及ではないかと指摘した。

北宋後期以降、士大夫が活發に繪畫を創作するという現象を考えたとき、唐代はそのための搖籃期である。その唐代において、王維が詩において畫家に言及した、特に詩人と畫家とを並置した最初の詩人の一人であることは、『輞川集』と「輞川圖」への評價の變遷と同様、北宋後期における詩畫合一という價值觀の形成と發展という文化史の問題に大きく関わっている。

第四章『輞川集』の評價』では『輞川集』という詩歌と繪畫、園林の關係を唐宋の文人がどのように評價、受容したのかを述べた。宋代、王維その人や詩歌に對する評價は必ずしも高いものではなかったにもかかわらず、それまでほとんど論じられなかった『輞川集』が王維の「代表作」として認められるようになり、そこには詩歌と繪畫を一體のものとする認識が関わっていることを明らかにした。

第一節「唐代宗による「天下文宗」評について―王縉の『王維集』獻上との關係を中心に―」は、唐代において『輞川集』への評價がほとんど見られないことを考える前提として、杜甫の「解悶」詩其八とともに王維の没後、最初の王維評價とも言うべき文宗皇帝による「天下の文宗」評と王縉による『王維集』の獻上について、兩者の上奏文と答敕の内

容を詳細に検討した。王縉の上奏文には王維の性格や日常について多く記述され、また佛教に關する記述もある一方、王維の文學、特にその内容についてはほとんど記されていない。しかし、これを承けて發せられた文宗の答敕はほぼ全篇にわたって王維の文學に言及し、逆に王維の性格や日常、佛教の記述はほとんど、あるいは全くない。そして、『王維集』獻上をめぐるこの微妙な齟齬は代宗皇帝の王維の文學への個人的愛好とともに唐朝の權威への配慮によつて生じたことを指摘した。また、このような皇帝による別集獻上の敕命は唐代において非常に特殊な例であり、そこには個人的な文學愛好だけでなく、文教政策上、個別の別集を収集する價值があるという判断も働いたと考察した。

さらに、「天下の文宗」評は、安史の亂以後の中央文壇の空白を埋めるために、朝廷において創作されるべきふさわしい文學の規範を示したものであることを明らかにし、前述の唐朝の權威への配慮もそこから生じた結論づけた。これについては傍證として李白への左拾遺任官からも検討を加えている。

第二節『輞川集』と『輞川圖』の唐宋期における評價の變遷―文人による詩畫評價の視点から―は詩歌『輞川集』と繪畫『輞川圖』の唐宋期における評價の變遷について述べた。この變遷はほぼ『輞川集』が王維の「代表作」となるまでの過程とも言えよう。

唐代においては、『輞川集』に直接、言及した例は確認し得ないが、王維とその文學が輞川莊という園林と關係があつたことについては、中唐前期までははっきりと意識されていた。しかし、中唐後期になると、詩人達はたとえ、輞川を訪れても『輞川集』はおろか、王維の別業であつたこともほとんど言及しなくなった。これについて、本論文では第四章第一節で明らかにした「天下の文宗」評が王維の文學全體への評價であつて、中唐後期に文學の祖述の對象が變化した時、その全體の評價から『輞川集』が分離されなかつたことを論じた。また、『輞川圖』は、そういった評價とは直接に關係することではなく、しばしば畫論に言及されたことを指摘した。

北宋前期から中期には「輞川圖」を歌う詩が現れた。本論文は、特に輞川莊とは關わりのない園林において「輞川圖」が想起され、詩に表現されていたことに注意した。そして、このような當時の文人の詩から王維と輞川莊との關係への認識、王維の詩畫が卓越していることへの共通理解、「輞川圖」への關心の高さを確認した。さらにこれらの前提として、繪畫「輞川圖」の廣い範圍での流行、それをもとにして生まれた王維の園林における文雅な生活への文人の共感があつたことを指摘した。

つづいて、北宋後期の蘇軾と蘇門による『輞川集』の「再発見」という轉換について検討した。まず、彼等は繪畫「輞川圖」を手がかりに詩歌『輞川集』へと連想し、言及していることを確認した。『輞川集』の特徴でもある「連作組詩」についても、唐代には『輞川集』を意識した作品はむしろほとんど見られず、やはり文同や蘇轍などの蘇門や彼等の生きた北宋後期に多く創作されていた。そして、このような踏襲あるいは模倣こそ『輞川集』への関心の高まりを具現化したものであることを指摘した。本論文は、その要因として北宋後期における詩畫を一體のものとみる觀念を擧げた。つまり、當時の文人にとつて、その觀念と行爲を擔保する過去の典型こそ、輞川莊という園林で創作された王維の詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」であつたことを明らかにした。

この北宋後期の轉換を承け、南宋期、輞川は隱逸の風景を代表するものの一つとして一般化され、その結果、繪畫「輞川圖」を介することのない詩歌『輞川集』への言及が増加していった。そして、この長江流域以南の地にあつた南宋の文人は『輞川集』の風景のなかに憧れの理想郷を見出し、それゆえに『輞川集』を文人生活、特に園林における理想の生活を描いた作品とみなす觀念が普遍化したと結論づけた。

以上の結果を踏まえ、『輞川集』における詩歌と園林、繪畫との關係についてまとめてみたい。

そもそも、王維の詩には輞川莊をはじめ、園林における作品が多い。また、その一つである「終南別業」詩は在世中から高く評價されていた。さらに、このような數量、評價だけではなく、手法の新しさにも王維の詩作と園林との密接な關係が窺える。たとえば王維の「待儲光羲不至」詩と儲光羲の答詩は、園林において作られる「期不至」詩の新たな方法、すなわち詩を介した園林の交遊を保證する方法を提示した。詩題が地名もしくは景物名で、かつ五言絶句の連作組詩、特に唱和詩からなる『輞川集』も、園林における詩歌の系譜を考えたとき、王維の獨創によると言つてよからう。

しかし、創新のみを取り上げるのは正確な理解ではない。むしろ、王維が傳統的な手法を用いながら、しかも新しさを生み出した點に重要な意義がある。たとえば「期不至」詩そのものは『文選』所收の謝混や謝靈運の詩に始まるものであり、『輞川集』の典故の典故についても『文選』に由來するものが多かつた。

しかし、この『輞川集』は「終南別業」詩とは異なり、当初は有名な作品でなかつた。當時、王維の文學は誰もが知る隱逸の地である終南山から當時としては無名に近い輞川莊

へと移行していった。さらには、詩歌『輞川集』の風景表現も、長安に代表される都市との対立が明瞭であり、「田園詩」として他者にも理解しやすい田園風景を用いるのではなく、古典に見える典故を駆使し、長江流域以南の世界を再現することによって俗界と自らの園林である輞川莊とを完全に隔絶しようとしたのである。そうであるならば、王維自身にこの作品を広く伝えようとする意圖そのものがなかったのかもしれない。

やや大袈裟に言えば、王維のこの意圖はある程度、實現された。事實、「天下の文宗」に代表されるように、唐代における王維への評價は全體的、総合的なものであり、また宮廷詩人としての側面が特に重視されていた。そのため、『輞川集』が個別に注目、評價されることはなかった。やがて、王維の詩歌と輞川莊の關係さえ、言及されることはほとんどなくなっていくた。

しかし、中唐の後期から王維の繪畫、特に輞川莊という園林を描いた「輞川圖」が広く知られるようになり、五代から宋代に流行する。それを承けた北宋の中期、王維の輞川別業への文雅な生活へ共感していた文人にとって「輞川圖」とはまさにその生活を具現化したものであった。

北宋後期、文學の中心の一つであった蘇軾や蘇門の文人等は繪畫「輞川圖」を手がかりに詩歌『輞川集』へと連想し、言及していった。また五言絶句による連作組詩、特に唱和詩が蘇門の間で繼承、模倣された。これらは、文人の間に詩畫を一體のものと認める價値觀が顯著になったこの時期、輞川莊という園林において創作された『輞川集』と「輞川圖」が過去における詩畫一致の典型として祖述されていったことを示している。この詩畫一致の價値觀が唐代の王維にあったかどうか定かではない。しかし、王維も畫家としての自己を詩人としてのそれよりも低く見てはいなかった。このことも王維の『輞川集』と「輞川圖」を詩畫一致の典型とすることに大きな役割を果たしていたのではないか。

このように詩畫一致の作品として典型化し、王維の「代表作」となった『輞川集』は南宋になると、もはや繪畫を介することなく、容易に理想的な文人の生活を表すことができようになった。さらに南宋の文人は『輞川集』に美しく、退隱にふさわしい憧れの理想郷を現實の風景に見出し、詩に歌っていった。それは、まさに王維が古典に表現された長江流域以南の風景を現實の輞川莊に認識し、あるいは主體的に見出して『輞川集』として表現したのと同様であったと言えるだろう。

そして、ここまで論じてきた王維の輞川莊という園林における詩歌『輞川集』の創作、蘇門や南宋の文人による評價と再創作、そして、それに到る過程における詩歌、園林、繪



畫の三者の關係、これらはいずれも中國の文學史および文化史における詩歌や藝術の創作、繼承、再生産を考えるうえで重要な典型なのである。

最後に本論文の研究を踏まえ、今後の課題を述べておきたい。

本論文では『輞川集』の誕生、そして“代表作”となるまでの過程を明らかにした。そこで、まず、問題にすべきことは宋末元初以降の『輞川集』への評價であろう。宋末元初以降の『輞川集』評價への考察は、本論文、特に第四章第二節の延長でもあるが、本質的に異なる部分がある。本論文がある文學作品が“代表作”となるまでの過程を論じたのに対し、宋末元初以降の『輞川集』評價を論じることは、すでに“代表作”となった作品がさらにどのように新たに讀まれていったのかを考えることになるからである。つまり、本論文を踏まえて宋末から明清期以降の『輞川集』の評價を研究することで、中國古典文學における受容・評價のなかでも、特に“代表作”の再解釋という問題を論じる契機になると期待される。

宋末元初以降の『輞川集』評價への考察には、當然、繪畫「輞川圖」との關係や王維詩評價全體における『輞川集』の位置づけなどの問題も含まれる。特に『輞川集』評價と佛教との關係は大きな課題となるだろう。劉辰翁の評にも見えるように、宋末元初以降、『輞川集』を佛教、とりわけ禪によつて捉えようとする動きが現れる。この動きを理解するには、まず宋末元初から明清期に至るまでの『輞川集』への評價の變遷を調査して傾向を明らかにし、その上で佛教的觀點からの論評について詳しく分析する必要がある。さらに社會史、思想史の情況も視野に入れつつ、詩歌評價と思想という文學史的問題の一つとして『輞川集』評價と佛教の關係を検討することが求められるだろう。

## 主要参考文献

### 【凡例】

- 一、本文中では書名・論文名に言及するものに限定した。
- 二、古籍については書名、その他については執筆者名を五十音順に排列した。
- 三、個人の論文集に収録されている論文は論著として扱う。この場合、二種類以上の論文を参考にした場合も一種類の論著とする。初出の時期等については本文中に明示している。

### 【古籍】

- 『王右丞詩集』（廣陵書社影印本、二〇一二年）
- 『王右丞集箋注』（上海古籍出版社排印本、一九九八年）
- 『王右丞文集〔複製〕』（靜嘉堂稀覯書之七、雄松堂書店販賣、一九七七年）
- 『王摩詰文集』（上海古籍出版社影印本、一九九四年）
- 『甕牖閑評』（臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本）
- 『樂府詩集』（中華書局排印本、一九七九年）
- 『玉臺新詠箋注』（中華書局排印本、一九八五年）
- 『舊唐書』（中華書局排印本、一九七五年）
- 『元和郡縣圖志』（中華書局排印本、一九八三年）
- 『須溪先生校本唐王右丞集』（四部叢刊初編、上海商務印書館影印本）
- 『史記』（中華書局排印本、一九七五年）
- 『施注蘇詩』（廣文書局影印本、一九六四年）
- 『詩林廣記』（中華書局排印本、一九八二年）
- 『集韻』（上海古籍出版社影印本、一九八五年）
- 『昭味詹言』（人民文學出版社排印本、一九六一年）
- 『新唐書』（中華書局排印本、一九七五年）
- 『清異錄』（朱易安・傅璇琮等主編『全宋筆記 第一編 二』（大象出版社排印本）、二〇〇三年）
- 『靜嘉堂文庫所藏王右丞文集』（汲古書院影印本、二〇〇五年）
- 『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年）

- 『全唐文』（上海古籍出版社影印本、一九九〇年）
- 『楚辭集注』（上海古籍出版社・安徽教育出版社排印本、二〇〇一年）
- 『楚辭補注』（中華書局排印本、一九八三年）
- 『宋書』（中華書局排印本、一九七四年）
- 『帶經堂詩話』（人民文學出版社排印本、一九六三年）
- 『太平廣記』（中華書局排印本、一九六一年）
- 『長安志』（經訓堂叢書本）
- 『唐會要』（中華書局排印本、一九五五年）
- 『杜詩詳注』（中華書局排印本、一九七九年）
- 『唐朝名畫錄』（臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本）
- 『南史』（中華書局排印本、一九七五年）
- 『樊川詩集注』（上海古籍出版社排印本、一九七八年）
- 『文苑英華』（中華書局影印本、一九六六年）
- 『文選』（上海古籍出版社排印本、一九八六年）
- 『西陽雜俎』（中華書局排印本、一九八一年）
- 『豫章黃先生文集』（四部叢刊初編、上海商務印書館影印本）
- 『容齋隨筆』（中華書局排印本、二〇〇五年）
- 『李太白全集』（中華書局排印本、一九七七年）
- 『林泉高致』（臺灣商務印書館據文淵閣四庫全書影印本）
- 『類箋唐王右丞詩集』（四庫全書存目叢書影印本集部第九冊、莊嚴文化事業、一九九七年）
- 『歷代名畫記』（叢書集成初編、上海商務印書館影印本、一九三六年）
- 『列仙傳』（叢書集成初編、商務印書館、一九三六年）

【日文論著】

- 赤井益久 『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）
- 淺見洋二 『中國の詩學認識―中世から近世への轉換―』（創文社、二〇〇八年）
- 伊藤正文 『王維（中國の詩人五）』（集英社、一九八三年）
- 入谷仙介 『王維』（筑摩書房、一九七三年）
- 入谷仙介 『王維研究』（創文社、一九八一年）

小川環樹・都留春雄・入谷仙介

『王維詩集』（岩波書店、一九七二年）

小川環樹 『小川環樹著作集 第二卷』（筑摩書房、一九九七年）

小川環樹 『小川環樹著作集 第三卷』（筑摩書房、一九九七年）

古原宏伸 『中國畫論の研究』（中央公論美術出版、二〇〇八年）

小林太市郎・原田憲雄

『王維（漢詩大系一〇）』（集英社、一九六四年）

小林太市郎 『王維の生涯と藝術（小林太市郎著作集4）』（淡交社、一九七四年）

釋清潭 『淵明・王維全詩集』（日本圖書センター、一九七八年）

鈴木敬 『中國繪畫史 上』（吉川弘文館、一九八一年）

都留春雄 『王維』（岩波書店、一九六八年）

内藤虎次郎 『内藤湖南全集 第十三卷』（筑摩書房、一九七三年）

中純子 『詩人と音楽 記録された唐代の音』（知泉書館、二〇〇八年）

松浦友久 『李白研究―抒情の構造』（三省堂、一九七六年）

松浦友久 『李白傳記論―客寓の詩想―』（研文出版、一九九四年）

松浦友久 『詩語の諸相―唐詩ノート〔増訂版〕』（研文出版、一九九五年）

松浦友久 『中國詩歌原論』（大修館書店、一九九六年）

松田壽男 『松田壽男著作集5 アジアの歴史』（六興出版、一九八七年）

松原朗 『中國離別詩の成立』（研文出版、二〇〇三年）

森野繁夫 『謝康樂詩集 卷上』（白帝社、一九九三年）

吉川幸次郎・黒川洋一

『中國文學史』（岩波書店、一九七四年）

芳村弘道 『唐代の詩人と文獻研究』（中國藝文研究會發行・朋友書店販賣、二〇〇七年）

## 【日語論文】

石川忠久 「謝混と「遊西池」詩―東晉文學研究簡記（三）―」（櫻美林大學『櫻美林

大學中國文學論叢』第八號、一九八二年）

石川忠久 「「尋隱者不遇」詩の生成について」（小尾博士古稀記念事業會『小尾博士

古稀記念中國學論集』（汲古書院、一九八三年）

- 石川忠久 「王維輞川集校注」(岡村繁教授退官記念論集刊行會『中国詩人論 岡村繁教授退官記念論集』(汲古書院)、一九八六年)
- 植木久行 「唐都青龍寺初探」(秋月觀暎『道教と宗教文化』(平河出版社)、一九八七年)
- 植木久行 「唐都長安樂遊原詩考―樂遊原の位置とそのイメージ」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第六集、一九八七年)
- 内田誠一 「王維における業思想―安祿山の亂をめぐる―」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第八集、一九八九年)
- 内田誠一 「靜嘉堂本『王右丞文集』刊刻年代考」(日本中國學會『日本中國學會集』第五十五冊、二〇〇三年)
- 内田誠一 「『輞川集』に關する二三の問題(上)―裴迪同詠はなぜ稚拙か―」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十三集、二〇〇四年)
- 内田誠一 「王維の自閉的志向」(松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』(研文出版)、二〇〇六年)
- 内山精也 「宋代八景現象考」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十集、二〇〇一年)
- 黒須重彦 「王維作「椒園」詩と『楚辭』九歌」(栗原圭介博士頌壽記念事業會『栗原圭介博士頌壽記念東洋學論集』(汲古書院)、一九九五年)
- 高倩藝 「王維が描いた輞川―「輞川集」を中心に」(名古屋大學中國語學文學會『名古屋大學中國語學文學論集』第十一輯、一九九八年)
- 澤崎久和 「王維詩「青苔」考」(福井大學國語國文學會『國語國文學』第三十號、一九九一年)
- 澤崎久和 「白居易と繪畫」(福井大學教育學部『福井大學教育學部紀要第一部人文科學(國語學・國文學・中國學編)』第四十號、一九九一年)
- 陣内孝文 「裴迪生年考」(九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十三號、二〇〇四年)
- 陣内孝文 「王維の輞川莊『喜捨』と宦官李輔國の專横」(九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十五號、二〇〇六年)
- 高橋智 「注」『靜嘉堂文庫所藏王右丞文集』(汲古書院、二〇〇五年)「解題」(米山寅太郎執筆)

- 二宮美那子 「唐代園林連作組詩考―王維「輞川集」を源として」(京都大學) 中國文學會『中國文學報』第八十一冊、二〇一一年)
- 長谷部剛 「杜甫『江南逢李龜年』の唐代における流傳について」(早稻田大學中國文學會)『中國文學研究』第二十九期、二〇〇三年)
- 道上克哉 「王維詩における自然情景句の一側面」(中國藝文研究會『學林』第三號、一九八四年)
- 道上克哉 「王維の輞川莊について」(中國藝文研究會『學林』第十二號、一九八九年)
- 森瀬壽三 「杜詩における繪畫と畫人」(關西大學文學部中國語中國文學科編『文化事象としての中國』(關西大學出版部)、二〇〇二年)
- 森瀬壽三・後藤裕也・重信あゆみ・高橋秀治  
「王維『輞川集』淺析」(關西大學中國文學會『關西大學中國文學會紀要』第二十四號、二〇〇三年)
- 渡部英喜 『輞川集』詩考(上)―王維「鹿柴」詩の解釋をめぐって―」(全國漢文教育學會『新しい漢字漢文教育』第二十六號、一九九八年)
- 渡部れい子 「晩唐における李白受容について―詩人像形成過程を中心に―」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十五集、二〇〇六年)

#### 【中文論著】

- 韋賓 『唐朝畫論考釋』(天津人民美術出版社、二〇〇七年)
- 王家琪 『王維接受史―以唐宋爲主』(文津出版社、二〇一二年)
- 王輝斌 『唐代詩人探蹟(外一種)』(貴州人民出版社、二〇〇五年)
- 王輝斌 『王維新考論』(黃山書社、二〇〇八年)
- 王啓興 『王維孟浩然名篇欣賞』(巴蜀書社、一九九九年)
- 王仲鏞 『唐詩紀事校箋』(中華書局、二〇〇七年)
- 葛曉音 『漢唐文學的嬗變』(北京大學出版社、一九九〇年)
- 葛曉音 『山水田園詩派研究』(遼寧大學出版社、一九九三年)
- 金牛江・金向銀  
『謝靈運山居賦詩文考釋』(中國文史出版社、二〇〇九年)
- 屈守元・常思春  
『韓愈全集校注』(四川大學出版社、一九九七年)

- 侯迺慧 『詩情與幽境——唐代文人的園林生活——』（東大圖書，一九九一年）
- 吳汝煜 『唐五代人交往詩索引』（上海古籍出版社，一九九三年）
- 孔凡禮 『蘇軾文集』（中華書局，一九八六年）
- 謝海平 『唐代文學家及文獻研究』（麗文文化公司，一九九六年）
- 朱金城 『白居易集箋校』（上海古籍出版社，一九八八年）
- 周勳初 『唐語林校證』（中華書局，一九八七年）
- 徐培均 『淮海集箋注』（上海古籍出版社，一九九四年）
- 徐鵬 『孟浩然詩集校注』（人民文學出版社，一九八九年）
- 鍾巧靈 『宋代題山水畫詩研究』（中國社會科學出版社，二〇〇八年）
- 錢仲聯 『韓昌黎詩繫年集釋』（上海古籍出版社，一九八四年）
- 曹旭 『詩品集注』（上海古籍出版社，一九九四年）
- 譚朝炎 『紅塵佛道覓輞川 王維的主體性詮釋』（中國社會科學出版社，二〇〇四年）
- 張清華 『王維年譜』（學林出版社，一九八九年）
- 陳貽焮 『唐詩論叢』（湖南人民出版社，一九八〇年）
- 陳貽焮 『杜甫評傳』（北京大學出版社，二〇〇三年）
- 陳允吉 『佛教與中國文學論稿』（上海古籍出版社，二〇一〇年）
- 陳鐵民 『王維集校注』（中華書局，一九九七年）
- 陳鐵民 『王維論考』（人民文學出版社，二〇〇六年）
- 陳鐵民·侯忠義 『岑參集校注』（上海古籍出版社，二〇〇四年）
- 程樹德 『論語集釋』（中華書局，一九九〇年）
- 陶敏·易淑瓊 『沈佺期宋之間集校注』（中華書局，二〇〇一年）
- 陶敏·傅璇琮 『隋唐五代文學編年史（初盛唐卷）』（遼海出版社，一九九八年）
- 陶敏·李一飛·傅璇琮 『隋唐五代文學編年史（中唐卷）』（遼海出版社，一九九八年）
- 鄧白 『圖畫見聞志』（四川美術出版社，一九八六年）
- 皮述民 『王維探論』（聯經出版，一九九九年）
- 傅璇琮 『唐才子傳校箋』（中華書局，一九八七年）

傅璇琮 『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社，一九九六年）  
聞一多 『聞一多全集』（湖北人民出版社，一九九三年）

北京大學古文獻研究所編

『全宋詩』（第一—七二冊）（北京大學出版社）

俞劍華 『宣和畫譜』（人民美術出版社，一九六四年）

李浩 『唐代園林別業考錄』（上海古籍出版社，二〇〇五年）

李亮偉 『涵泳大雅——王維與中國文化』（中華書局，二〇〇三年）

呂光華 『今存唐人選唐詩考』（花木蘭文化工作坊，二〇〇五年）

遼欽立 『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局，一九八三年）

林繼中 『棲息在詩意中——王維小傳』（河北大學出版社，二〇〇〇年）

#### 【中文論文】

袁曉薇 『輞川集』經典化和輞川模式的建立』（深圳大學『深圳大學學報（人文社會科學版）』第二十八卷第一期，二〇一一年）

閻翠榮 『從王維詩的“閉門”意象看其隱逸心態』（『王維研究』編輯部『王維研究』第二輯（三秦出版社），一九九六年）

王文學 『“輞川別業”遺跡尋踪』（教育部全國高等院校古籍整理研究工作委員會『中國典籍與文化』一九九二年第三期，一九九二年）

王祥 『宋人論王維述評』（瀋陽師範大學『瀋陽師範大學學報（社會科學版）』二〇〇八年第二期，二〇〇八年）

邱瑞祥 『試論『輞川集』中的佛家色彩』（『王維研究』編輯部『王維研究』第二輯（陝西人民教育出版社），一九九六年）

高倩藝 『藍田輞川與桃花之仙源、八解之浴池』（梁瑜霞·師長泰主編『王維研究』第五輯（江蘇大學出版社），二〇一一年）

師長泰 『實做有盡 虛做無窮——『輞川集』王·裴五絕詩比較』（『王維研究』編輯部編『王維研究』第二輯（陝西人民教育出版社），一九九六年）

周崑 『盛唐和中唐對王維詩歌的接受』（浙江紡績服裝職業技術學院『浙江紡績服裝職業技術學院學報』二〇一〇年第二期，二〇一〇年）

蔣寅 『對王維“詩中有畫”的質疑』（中國社會科學院文學研究所『文學評論』二〇〇〇年四期，二〇〇〇年）



- 孫明君 「天下文宗 名高希代——唐代宗期待視野中的王維詩歌」（陝西師範大學『陝西師範大學學報（哲學社會科學版）』第三十六卷第五期、二〇〇七年）
- 張浩遜 「從唐代接受層面看王維詩歌的歷史地位」（韶關學院『韶關學院學報（社會科學）』第二十六卷第十期、二〇〇五年）
- 張進 「宋金元王維接受研究」（西北大學『西北大學學報（哲學社會科學版）』第四十卷第二期、二〇一〇年）
- 陳鐵民 「再談考證古代作家生平事蹟易犯的幾種錯誤——答王輝斌同志」（南京師範大學文學院『南京師範大學文學院學報』二〇〇七年第二期、二〇〇七年）
- 潘慧瓊 「名作的被忽視與受重視——對王維『輞川集』藝術特色認識過程的思考」（柳州師範高等專科學校『柳州師專學報』第十七卷第二期、二〇〇二年）
- 潘良熾·劉孔伏 「裴迪與王維交游考」（四川文理學院『四川文理學院學報』第二十卷第四期、二〇一〇年）
- 畢寶魁 「王維安史之亂“受僞職”考評」（遼寧大學『遼寧大學學報（哲學社會科學版）』一九九八年第二期、一九九八年）
- 楊軍 「王維受僞職史實甄別」（中國唐代文學學會王維研究會『王維研究』編委會『王維研究』第一輯（中國工人出版社）、一九九二年）
- 賴賢傳 「王維詩思想性和藝術美初探」（嘉應學院『嘉應大學學報』一九九八年五期、一九九八年）
- 李俊標 「略論安史之亂後的心態」（安徽師範大學『安徽師範大學學報（人文社會科學版）』二〇〇〇年第一期、二〇〇〇年）
- 劉飛濱 「王維詩題注小議」（『王維研究』編輯部『王維研究』第三輯（陝西人民教育出版社、二〇〇一年）

## 初出一覧

### 第一章

- 第一節 「王維「終南別業」詩について―“輞川”に連なるものとして―」（早稲田大學大学院文學研究科『早稲田大學大学院文學研究科紀要』第五十五輯 第二分冊、二〇一〇年二月）

- 第二節 「“友”を待つ詩人―初盛唐期の園林における詩人の交遊について

―」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第三十集、二〇一一年一二月）

### 第二章

- 第一節 「王維の輞川諸詠における田園の風景」（早稲田大學大学院文學研究科『早稲田大學大学院文學研究科紀要』第五十輯 第二分冊、二〇〇五年二月）

- 第二節 「『輞川集』における王維の風景認識―“遊止”の典故を手がかりに―」（早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第二十九期、二〇〇三年一二月）

### 第三章

- 第一節 「唐詩における「詩人」と「畫家」―王維詩を手がかりに―」（松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』（研文出版）、二〇〇六年三月）

### 第四章

- 第一節 「唐代宗による「天下文宗」評について―王縉の『王維集』獻上との關係を中心に―」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二十六集、二〇〇七年一二月）

- 第二節 「『輞川集』と「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷―文人による詩畫評價の視点から―」（日本中國學會『日本中國學會報』第六十一集、二〇〇九年一〇月）

※本論文は既発表のものにもとづいて全面的に内容を加筆、修正したものである。